

ふたりぐらし

※R-18作品です。

※性描写を含みます。

Pixiv 再録集 No.3

目次

▽ある夜のはなし	4
▽家事をするはなし	8
ふたりごと	11
▽朝ご飯を食べるはなし	77
カンパイ	82
▽コーヒーを淹れるはなし	114
▽留守番をするはなし	117
▽半分このはなし	120
▽あたたかい部屋のはなし	123
GIFT	127
▽なんでもないはなし	180

Happy New Year	183
▽ある朝のはなし	226
Be my valentine	230
▽エプロンのはなし	240
▽お一人様1パック限りのはなし	243
3/14	245
初夏とうたた寝とアイスクリーム	261
▽おしりのはなし	292
▽また、おしりのはなし	295
レース模様とフルコース	299
▶はじまりのはなし	334
「おはよう」	337
あとがき	344

開く扉と、閉じる扉。

▷ある夜のはなし

「眠れない？」

静かな声が聞こえた。もうすっかり寝たと思っていたので、驚いて肩が震えた。

「…起きてたのか」

隣のベッドで、寝返る布の音がする。同じ方向を向いたらしい。…僕からは見えないのだけれど。

壁を見る。壁紙の凹凸を目で追う。

「こんな時、君はどんなことを考えてるの？」

界塚の声。いつもの、滔々とした声音。

考えがあるわけではない。ただ、焦燥に駆られ、何か粘ついたタールのように嫌なものが胸の中に溜まっていく感じがするのだ。でもきつとそれは、僕自身の

汚い物や傷や悪意や嘘や欺瞞や、そんなものが胸中に滴り落ちているだけのことなのだ。

「…わからない」

到底説明できることでもないし、それだけ言った。

「目を閉じると、何が見えるの？」

「何も」

何もない。真っ暗だ。瞼の裏に住まわせるような人は、もういない。そんな資格はない。

「目を閉じると、僕には君が見える」

不思議な声だと思ったので、僕も寝返りをうった。横並びの二つのベッド。暗くてよく見えない。けれど、界塚がじっと息を潜めてこちらを見ているのがわかった。深い呼吸音がして、それで、と言葉が続いて。

「目を開けても、君がいる」

それで安心する、と言った。

「おやすみ、スレイン」

心臓が跳ねる。その理由は、名前を呼ばれたことだけだ。その前。

おやすみ、だなんて。最後に言われたのは、思い返せないくらい遠い記憶だ。知らず、口が笑っていた。こんな口の形も、いつぶりだろう。

姫様という時は、よくこうなった。

次第に、心と関係なく動かせるようになった。

そして、今ではとても難しい。

この前笑ったのは。

そうか。

「ああ、おやすみ」

こいつが会いに来た時だ。

「界塚」

「何？」

「…何でもない」

「うん」

瞼を閉じる。残像のように、目だけが見える。オレンジ色の瞳。

「おやすみ」

二度目のおやすみに、うん、と頷いた。

いつか。

いつか、水の滴るスポンジから徐々に水が滲み出るように、この黒々としたものが心や体から抜け出ることがあるのだろうか。

他の誰にも見せられない。こんなおぞましいものは。

でも。

この男には、それに触れてほしい。

明日も君におはようを[2018-9-11]

▷家事をするはなし

「ついに二桁の大台に乗った」

「…嫌味か？」

「そりゃ、嫌味の一つも言いたくなるよ」

足元には、白い破片。伊奈帆は冷蔵庫の脇から箒と塵取りを手にしてしゃがんだ。洗剤の泡がフローリングに飛び散っている。掃除だと思えば無駄でもないか。しかし、まあ。

「不器用だな。どうやってカタフラクトを操縦してたの？」

「それとこれとは、話が別だ」

スレインもしゃがんで、大きな破片に手を伸ばす。呻き声が出たので見ると、案の定指を切っていた。

「不器用っていうか、おっちょこちょい？ドジっ子？それ、萌えてやつなの？」

こちらを睨みつけて、黙り込んでしまった。からかいすぎたか。

「…悪いとは、思ってる」

小さな埃もかき集めて、塵取りをスレインに向ける。大きな二つの半円が乗った。そこに落ちた二つの赤い雫。

「食べたくないから割ってる、とかじゃない？」

少し心配になって聞いた。

「そんなことはない。お前の料理は美味しい」

そう言われて、立ち上がるのに時間差ができてしまった。全く。

皿は割る。コップは落とす。トーストは焦がし、塩と砂糖を間違える。コーヒ
ーだぞ。

軽い応酬の後、謝罪があつて。

僕はつい余計な一言を返し、そして、彼は言う。

料理が美味しい、とか。

掃除が早い、とか。

整理整頓が分かりやすい、とか。

舞い上がるようなことを。僕だって、初めから出来たわけじゃない。そう思うと、普通のことのよう to 思えてきた。皿の十枚くらいは。

「また、お皿買わなきゃね」

「今度は、気をつける」

申し訳なさそうな顔を見ると、割りたいだけ割ってしまえ、という気分になった。伊奈帆は塵取りの中身をぐしゃぐしゃと新聞紙で包んだ。

落下現象[2018-9-16]

ふたりごと

——君の隣。

長い冬と春の風——

[2017-03-01]

「…調子は」

薄暗い面会室の固い椅子に腰かけ、伊奈帆は聞いた。目の前に座る囚人は目を伏せたまま視線を合わせようとせず、押し黙ったままだ。

いつも並べられるチェス盤と駒は、今日はない。テーブルの上で重ねた伊奈帆の両手は、固く強張って白い。息苦しい沈黙が続く中、伊奈帆は聞いた。

「…辛い？」

何がだ、というように目だけが伊奈帆に向けられた。今更と言えば今更な問いかけだが、伊奈帆は静かに続ける。

「…生きることが、辛い？」

何を聞くかと思えば、と言いたそうな表情で、スレインは背もたれに背を預けた。こくり、と顎が動いた。

「そう」

伊奈帆はスレインを見た。火星の伯爵であり、火星軍総司令官であり、地球人であり、アセイラムの友人であり、伊奈帆にとって、星間戦争時はライバルとも

呼べる相手だった彼は、今では粗末な囚人服を身に纏い、薄暗い地下で亡霊のよう
に佇む。その顔や首、腕に見て分かるほどの痣や傷があることが見て取れて、
報告を受けていたにせよ伊奈帆の感情は逆立った。

「その、…傷のせい？」

ちらりと視線が向けられ、そして逸らされた。表情からは何の感情も見出せない。
彼は小さな声で、「そうじゃない」と言った。彼の唇がやけに赤い、と気付く。
血が滲んでいるようだった。

「そう」

伊奈帆は立ち上がる。もう、面会終了時間が迫っていた。こんなに短いのは、
これが非公式の訪問だからだ。この次は、またいつ来られるか分からない。伊奈
帆はテーブルをぐるりと回り、スレインの傍で言った。

「死なないで。お願いだから」

「…ああ」

立ち上がったスレインは、少しよろけてふらふらと扉へ向かった。伊奈帆は、

独房へ戻る彼の後ろ姿を見る。襟ぐりから見える背中には消えない傷が。肘に青い痣が。首には赤いかさぶたと鬱血が。

ガチャリ。

痩せぎすの後ろ姿が扉から消え、伊奈帆は一度壁を殴った。

——それが、三年前のこと。

その後も伊奈帆は、スレインと面会を重ねた。

先の戦績を足掛かりに、業務で功績を重ねて軍内で力を蓄え、上層部とは意向を通し、通され、様々な駆け引きがあった。

職員の異動に関わり、面会の規約を改正し、外出許可証をもぎ取り、様々な紆余曲折を経て、ようやく。

「じゃあ、戸締りよろしく。帰りは八時くらいかな」

軍服姿の伊奈帆は、真新しい玄関の扉を開けながら後ろを振り返った。少し高いところで、金の髪が揺れる。上がり框に戸惑いがちに立ち尽くすのは、軍の支給品である綿のシャツにジーンズを身に着けたスレインだ。玄関先でスレイン

は、仏頂面でもごもと口を動かした。

「…いってらっしゃい」

頷いて、伊奈帆は扉を閉めた。職場へ向かうため、通路を進む。足取りは軽い。数基のエレベーターやセキュリティを経て建物を出ると、青い空は高く、春風が頬を撫でた。

さて、伊奈帆の並々ならぬ実績と、計略と、度胸と、継続された努力により。伊奈帆とスレインは、軍の管理するトップセキュリティの一室を二人で使用している。

スレイン・ザーツバルム・トロイヤードはアルドノア研究第一人者であるトロイヤード博士の息子であり、火星軌道騎士重鎮ザーツバルム伯爵の息子である。そして、アセイラム姫からアルドノア起動権をあたえられた彼女の騎士でもあ

った。軌道騎士三十七家門を率いての星間戦争時は、その計算高い頭脳と胆力、高いカタフラクト操縦技術で地球軍に劣勢を強いた火星の総大将だ。

本来処刑されるはずの彼の存命を望んだのはアセイラム女王であり、伊奈帆はその望みに添う形で収監当初スレインに会い、話をしていた。戦時中は銃を向け合いカタフラクトで殺し合った中とはいえ。……いや、だからこそ。次第に打ち解け、人間らしい表情を見せてくれるようになった。気負わない彼の表情や言葉は、伊奈帆を安心させた。

彼と自分は、よく似ていた。多分、信念やら価値観やら、あと性格。そういうものは真逆と言っていいほど、似ていないと伊奈帆は思う。でも、なにか言葉にできない部分が、よく似ていた。方法は違っても、何かを美しいと感じ、それを愛そうとする思いの方向のようなものが。

だから伊奈帆は、そのうちにスレインのことを考えたり、思い出すことが当たり前のようになっていた。そのことに気づき驚いたことを覚えている。

たとえば。空を飛ぶ鳥を見た時に、セラムだけではなく、スレインのことを思

い出すようになったとか。夕暮れ時、オレンジ色の空を見て黒い戦闘機を思い出すとか。家でご飯を食べている最中、ふと彼の食事を想像するとか。

いつの間にかスレインは伊奈帆の内側に住んでしまっていた。伊奈帆は、アセラムの願いに関わらず、自分の意志で、スレインに関わるようになっていた。それを自覚してからは、極秘施設に足を運ぶ回数は増えた。

面会申請を出しているのに、会えない日があった。管理者に聞いても、囚人の体調不良を通すばかり。その理由は、すぐに理解した。次の面会で現れたスレインの体に、痣ができてかさぶたができていたからだ。誰の目も届かぬ暗い監獄で、死んだはずの人間に対する風当たりは、当然と言えば当然だが並々ならぬ強さだった。

スレインが尋問という名の暴力に何度もさらされる理不尽に、伊奈帆は何度壁を殴り、テーブルを叩き、椅子を蹴飛ばしたとか。すぐさまその連中を八つ裂きにしたい衝動に駆られ、現状を止めることのできない自分に怒りを抱きながらも、それでも伊奈帆はじっと時を待った。すべきことを一つ一つこなして。

スレインを救うためには、軍で力を蓄える必要があった。

——未来がある。あいつにも、僕にも。

数年越しの計画は功を奏し、伊奈帆はスレインの存命がいかにかに地球軍にとってメリットがあり、彼を保護管理するのに自分が最適であると説いた。多大な戦略と戦術を駆使し、労力を要して、ようやく。ようやく、昨日。この場所へスレインの身柄を移すことができたのだ。

「…は？」

一昨日。いつもの面会室。伊奈帆がスレインの身柄を預かる旨を告げた時、彼はこれ以上はないほど目と口を開いて、呆けたような声を出した。あほ面だなあ、

こいつ、こんな顔をするんだなあ、と思ったのを覚えている。

布石は打っておいたはずなんだが。

まあ、彼の場合、察しが悪いというよりは、自分自身に関して関心がなかったのだろう、と想像する。監視カメラ越しに、直接話せる内容でもなかったから。

「何か、質問はある？」

そう聞いた伊奈帆に、目をぱちくりさせたスレインは心底不思議だという顔をしてこう言った。

「君は、何がしたいんだ？」

顎に手を当て二秒ほど考えるふりをして、伊奈帆はこう言った。

「うん、君がここにすることは、良い状況とは言えない。君の存命に価値があると軍上層部が決定したから。この場所は、君の処遇を預かるには不適切だと判断された」

監視カメラとマジックミラーを意識して、表層的にそう答えた。スレインはふうん、と気のない返答をして、胸のペンダントを撫でた。伊奈帆はその白い爪を

目で追った。

何がしたいのかだって？

そんなのは、伊奈帆自身もよく分からないことなのだ。

この部屋に来て二日目の夜七時四十八分。ロックを外して玄関のドアを開けると、電灯の光に包まれた。なんだか嬉しくなって、伊奈帆の口元が綻ぶ。長年姉と二人暮らしをしていた伊奈帆だが、姉の帰りは遅い。誰もいない、暗くて冷えた家に帰ることが多かった伊奈帆は、明かりのついた部屋に帰る幸せを感じた。

フローリングの廊下を進み、リビングのドアを開ける。あたたかい空気。料理のいい匂いが鼻孔をくすぐる。

「ただいま。いい匂いだね」

リビングのテーブルには、サラダとグラタンが並んでいる。キッチンで洗い物をしていたスレインが視線を寄越した。

「ああ、おかえり」

スレインはきゅっと蛇口を締めて、布巾で手を拭き近づいてきた。伊奈帆は上着を脱ぐと椅子に掛けて、席に着く。スレインは椅子の背もたれに手を伸ばし、触れて、一度目を伏せた。そしてぎこちなく椅子を引き、伊奈帆の対面に腰かけ

る。

いただきます、と両手を合わす伊奈帆に倣い、スレインもいただきます、と両手を合わせた。

伊奈帆はこの部屋から、職場に通うことになっている。高校を卒業して、本格的に軍で職務に就いたのが一年前だ。火星と地球は星間戦争終結以降、少しずつではあるが歩み寄りを見せている。アセイラム女王の地球訪問も十を数えるようになった。それは、地球に建造されたのアルドノア炉の数に等しい。テレビやネットで見ると彼女は相変わらず美しく、そして大人になった。

生身の彼女に会うことは、もうないだろう。

スレインは毎日をこの住まいで過ごす。SIDEの間取りの中。することといえば洗濯とか、掃除とか、料理とか、本を読むとか。その程度だ。この場所には、テレビもネットもありはしない。あるのはまだ生活感のない真新しい白い壁と、少しの本と、使い込んだチェス盤。そして夥しい数の監視カメラだ。

世界と隔絶された空間。機械の目に一挙手一投足をつぶさに見られながら、彼は息をしている。

彼がこんな場所で惰性のように生かされている理由は、伊奈帆が彼の処遇をこう提案したからだった。

——彼の高い戦術的、戦略的頭脳とカタフラクトの操縦技術、体内のアルドノア因子は地球軍の切り札に成り得る。彼を地球軍に協力する手だてを取るべきだ、と。

要するに、彼を飼い殺せ、という内容だった。閉じられた監獄で、容認された暴力。そのような待遇を受け続けられ、恨みは募り反抗心が芽生えるのも当然であり、その才気を持ってすれば脱獄など容易いと。彼に心酔する人間は多い。また戦禍を巻き起こす元凶とならないとも限らない。彼が自ら望んで軍に力を尽くすよう、仕向けること。そのため処遇の改善は急務である、と、懇々とあらゆ

る手段で働きかけたのだ。それに、彼の処刑は保留されているが、それは最大の切り札足り得るのだ——火星の女王には。そこまで言った。

当然、そんなのは全てどぶに捨てるほどの詭弁で、狡い大人になったな、と伊奈帆は自分の言葉に辟易した。

一応、彼が軍にとって利用価値あり、と判断されれば、顔と名前を変えて伊奈帆の補佐官として採用されることになっている。

目の前で、スレインが重そうにスプーンを口に運び、億劫そうに咀嚼する。その口の動きを見ながら、伊奈帆もスプーンを口に運んだ。ほくほくしたじゃがいもと、熱くてとろりとしたホワイトソースが、舌に絡む。チーズの香ばしい香りが鼻から抜ける。とても美味しい。

「美味しいよ。また作って」

スレインはばつの悪そうな顔をして、おずおずと頷いた。スレインはそれから二、三度スプーンを口に運んだが、もう降参、という風に食べることを放棄して、

ばうっとしていた。皿には、まだ四分の三ほど残ったグラタンが、冷たくなってべっとりと皿にへばり付いている。

「ごちそうさま」

「…ああ、…ごちそうさま」

伊奈帆は、食べ終わった自分の食器と一緒にそれを流しへ運び、タッパへ移し替える。グラタン皿をお湯につけて、コップやサラダボウルを泡立てたスポンジで撫でた。ちらりとスレインに目をやると、椅子に座ったままカーテンの閉まった窓の方向を眺めている。ごし、と皿をこする手に力が入った。水音に紛れて、舌を打つ。

人が人を救えるのか？

それから三か月。

梅雨は明けたが、夕立に降られてびしょりと上着と頭髪を濡らしたまま、伊奈帆はその部屋に帰り着いた。八時九分。玄関のドアをロックして靴を脱ごうと上がり框に腰かけて屈むと、ぱたぱたという足音がして、頭に何か柔らかいものがかった。バスタオル。その上から、ごしごしと頭を拭かれた。

「ありがとう。急に降られて」

タオルの下でそう言う伊奈帆に、スレインが少し笑ったような気がした。

「お前のことだから、きつと、濡れているだろうと思った」

あの面会室でも、ずぶ濡れで現れる伊奈帆の頭を時折文句を言いながら拭いてくれたことを思い出す。そのうち、職員がタオルを部屋の中に用意してくれるようになった。

誰にも言わないが、それが嬉しくてわざと濡れたものだった。

髪を拭くときは、スレインが優しいから。そのままの、優しい彼でいられるか

ら。

優しい人が、優しさを殺さなくていいように。この場所は、彼が優しくいられる場所に成り得るだろうか。

風呂に入れ、と濡れたタオルを持って廊下を歩くスレインの後ろ姿を見ると、襟足が首を覆っていた。髪が伸びたな、と伊奈帆は思った。

湯船につかると、少し気持ちがほぐれる。ピカピカに磨かれた鏡が湯気で曇り水滴が流れる。水垢も汚れも全くない、モデルハウスのような風呂場で、すり減った石鹸と内容量が半分以下になったシャンプー、リンスのボトルだけが、月日の経過を感じさせた。

この部屋に來たばかりの頃を思い出す。相手のペースに巻き込まれることのない伊奈帆だが、その日は大いに戸惑ったものだった。

ここに来て一日目、押し黙り、どうにも所在なさげなスレインは、伊奈帆に勧められるまま、部屋の中に入り、夕食を食べて——彼はほとんど口にしなければ。風呂に入って、布団にもぐり込んで、電気を消して、そしてようやく口を開いた。並んだベッドの、あちら側で。

——僕はここで、何をするんだ？

真新しい天井を見ながら、伊奈帆は言った。

——生きる練習だよ。

「生きる練習、か」

執念深いほどに磨かれたバスタブを擦ると、きゅ、きゅ、と音がした。

「新しい生活はどうかね。界塚少尉」

長いトンネルの内部。オレンジ色のライトに照らされながら走る軍用車の後部座席で隣に座る上官に、伊奈帆は視線を前に向けたまま答える。

「順調です」

「ふむ」

上官であるハッキネン中將が、顎に手を当てて頷いた。移動車両の中で報告するのは、現在伊奈帆が身元を預かる囚人について。彼の存在そのものが、軍の最高機密の一つだ。

「監視員からも報告を受けているがね。どうだね。使えそうか」

室内の監視カメラは、機能を果たしているらしい。そんな無駄な仕事に、何人の人間が駆り出されているのだろう。気分が悪い。

「地球にも、火星にも、敵意は見受けられません。僕に対しても友好的です。でも、体力がかなり落ちています。現場で行動するには、まだ何段階かのリハビリ、

訓練が必要です」

ハッキネンは野心家だ。スレインの存命に対して、警戒しながらも期待している。保守的な人物が多い上官の中では、話がわかると言えばわかる相手だった。損得で話ができる相手はやりやすい。

「そうか。あまり待てん。急いでくれ」

火星との関係は、抜き差しならぬものではないが、のんびんだらりとできるほど樂觀できない。切り札は多い方がいいのだろう。

車がカーブに入り、遠心力で重心が傾く。戦闘訓練から随分遠ざかっている。鈍っているのは自分もだ。

「急ぐなら、待遇の改善を求めます」

無機質な部屋。嵌め殺しの窓。監視カメラ。

奪われた自由。

——奪われた死。

「書面で送れ」

「はい」

どこまで融通が利くだろう。せめて、監視カメラの数を減らしたい。今のせめて半分。伊奈帆がそんなことを考えていると、ハッキネンが口を開いた。

「さっき君は、友好的と言ったがね。君自身も、あれに友好的どころか、相当入れ込んでいるように見えるが」

伊奈帆の眉が微かに寄った。

なるほど、自分を危険視しているわけだ、と伊奈帆は無表情を決め込み上官を見た。寒気がするるのは、効きすぎた冷房のせいだけではないだろう。

分かってはいたが、今回のことは体のいい厄介払いでもあったのだろう。まあ、そう仕向けたのは自分であるので、作戦は成功だ。しかし、あまりに疎んじられては今後に支障をきたす。

「それは、どちらかと言えば、メリットでしょう。使えるように、と言われまして」

そう、願ってもいないことなのだ。軍にとっては。あの極秘施設に勤務する人

員、問題が起こったときの対処、リスク、そして伊奈帆の危険性。これらを十把一絡げにしてとりあえず保留しているのが現状だ。

「まあ、君があればにとって解けぬ縄になってくれればよいが。しかし、情が湧いても、牙を抜かれてはいかん」

トンネルを抜けた。雁の群れが横切る、晩夏の赤い空に目を細める。夕焼けに染まる車内で、ハッキネンが言った。

「界塚少尉。ミイラ取りがミイラになってはいかんよ」

ハッキネンと会った日の夜八時三十分。

玄関のドアを開けると、真っ暗だった。鼓動が早鐘のように打ち、伊奈帆は靴を脱ぎ捨て駆け上がる。リビングのドアを開けて、電灯のスイッチを入れて室内に目を走らせた。

ソファに、スレインが横たわっていた。慌てて駆け寄り、膝をついて口元に手を当てると、規則正しい呼吸の感触が手のひらに伝わった。

「はあ……」

寝ているだけか。

くの字に横になったスレインの腹のあたりのスペースに腰を下ろして、伊奈帆はスレインの顔を見下ろした。さっきは、死んでいるかと思った。生きていて良かった。

意外と、安らかな表情で眠っている。顔が青白い。全く動かない。眠りは深いようだ。

そっと、髪に触った。後頭部の、丸い頭蓋の形を撫でる。細い髪の感触が手のひらを滑る。髪がまた伸びた。そっと髪の手を持ち上げる。髪に隠れていた貝殻のような耳に触る。冷たかった。前髪に隠れた額を手のひらで包むと、人肌の体温が伝わってくる。

——ここを打ち抜くことも、できた。

それをしなかったのは、アセイラムの願いがあったからだ。

そして、今自分たちを取り巻く状況は、伊奈帆の願いだ。

「…………何が、したいんだ」

戸惑ったような声が聞こえた。スレインが、居心地悪そうに視線を泳がせて、伊奈帆を見上げている。

「起きたの」

手を引っ込めると、スレインは肘をついて身を起こした。伊奈帆の隣に座り直す。白い手が、前髪をかき上げた。

「すまなかった。いつの間にか、眠ってしまってた…」

「いや、驚いたけど、怒ってない」

伊奈帆の言葉に、スレインはほっとしたように口元を緩ませた。彼の顔色はいつも悪い。眠ったにしては、濃い隈が残っていた。半端な時間に眠って覚醒が甘

いらしい。ソファのクッションに深く体を預けて、緩慢に瞬きを繰り返している。「何か、食べられる？ ゆっくりしていいよ」

立ち上がりキッチンに向かう伊奈帆に、スレインは腰を浮かせたが、眩暈がしたのか頭を押さえてもう一度座った。伊奈帆が冷蔵庫を開けて材料を取り出していると、すまない、と申し訳なさそうな声が聞こえた。伊奈帆は包丁と俎板を取り出す。

「眠れるときに、眠った方がいい」

スレインはもの言いたげに伊奈帆を見たが、ふうと息を吐いて目を閉じた。

同じ部屋で眠っているから、知っている。浅い呼吸も、うなされる声も、引き攣るように震える肩も、跳ね起きる体も。

眠れないのだろう。それはそうだ。こんな場所で、眠れるわけがない。他に誰

もない。することもない。日中、彼は監視カメラの向こう側の人間を想像する。与えられたのは、時間と、嵌め殺しの窓から見える空。誰も罰しない、敵意がない空間。たった一人。それがたまらないのだ。

時は戻らないし、自分がしてきたことが消えるわけではない。生きていることを知られてはいけない。死んではいけない。身動きのできない雁字搦めの理不尽の中、陸に上がった魚のように、水に沈んだ鳥のように、彼は必死に呼吸をしている。

「界塚弟」

「界塚伊奈帆少尉です。鞠戸大尉」

職場である地球連合軍支部に着くと、エントランスで鞠戸孝一郎大尉に呼び止められた。自分を待っていたようだ。伊奈帆は立ち止まり敬礼する。鞠戸大尉はやれやれ、という様子でおざなりに敬礼した後、長く伸びる連絡通路を親指で示した。

「界塚伊奈帆少尉。ちょっと来い。歩きながら話そう」

左右のガラス窓から明るく照らされた長い廊下を、鞠戸大尉と並んで歩く。一応、直属の上司である鞠戸は、伊奈帆の現在の立場というか処遇というか、事情を知っている。鞠戸が口を開いた。

「いくつか質問をする。上からの命令だ。俺は、お前が言ったことをそのまま上に伝える」

「はい」

二人とも、前を見たまま話す。鞠戸の方が背が高いので、伊奈帆は普段より大股気味に歩く。

「あいつは、使えそうか」

「当然です」

あれ、と表現したハツキネンとは違う。盗聴器を忍ばせているはずだが、そんな人間らしい、青臭いところがある上官を、伊奈帆は好ましく思っているし、信頼している。

「いつになる」

「当分先です」

「具体的には、いつ頃だ」

「戦闘訓練も含めると、半年以上は」

「危険は」

鞠戸の声が低くなった。

「当然、あるでしょう。リスクはゼロにはできません。そういう相手です。でも、

危険ではないと、判断しています」

今のところは、という言葉をつけ加えようとしてやめた。

「お前は」

その言葉に、ひやり、と背筋が凍る。窓から差し込む光が、木枯らしが舞う季節であるはずなのにあまりに眩しい。空の青は絵の具を水で溶きすぎたように白かった。鞆戸に視線を送ると目が合った。深い瞳だった。

「お前は、危険ではないか」

これが、本題だ。目がそう言っていた。

「ありません」

今のところは、という言葉は、聞こえていないが伝わっているだろう。

「：これは独り言だが。お前、今回のことは上の思惑通りなんだぞ」

それは、軍が伊奈帆自身を危うんでいるという意味だ。

「知っています」

「知っていたか」

呆れたように言う鞠戸は、やはり人間的で、青臭くて、お人好しで。自分を心配してくれているのが伝わってくる。できるだけ迷惑をかけないような返答をしようとは思うのだが。もう、この件に関わらせていること自体がこの上なく迷惑をかけているに違いないので、どうしようもなかった。

「僕は、それでいいと思っています」

もうすぐ通路の行き止まりだ。正面のエレベータが近づいてくる。

「これは、個人的な質問だが。お前、これからどうするつもりだ。まさか一生一緒にいるつもりか」

「はい」

迷いなく答える伊奈帆に、鞠戸はたじろくように歩調を緩めた。

「もう、何も手放さない。そういうことです」

伊奈帆はエレベータのボタンを押す。昇降音が大きくなる。鞠戸が、伊奈帆の斜め後ろで立ち止まる。

「そうか。…しかしまあ、なんだ」

電子音。エレベータに乗り込んだ伊奈帆が振り返ると、やはりやれやれ、といった顔で鞆戸が口を開く。

「姉さんに、あまり心配をかけるな」

最後の言葉があまりに鞆戸らしくて、伊奈帆は微笑み肩を竦めた。

「しょうがありません。弟ですから」

そう言って閉ボタンを押した伊奈帆は、遠方にいる姉を思った。随分、会っていない。

夜七時三十分。ロックを外す。

玄関のドアを開けると、明るかった。ほっとして、ただいま、と言いながら靴を脱ぐ。

ここでの生活も半年以上が過ぎ、吐く息が白くなる季節になった。冷たい空気

に晒された体に、室内の空気が暖かかった。相変わらず塵ひとつ落ちていない、新居のような廊下を歩く。リビングのドアを開けた。

「ただいま」

「おかえり」

ソファに座っていたスレインが立ち上がった。ソファの前のローテーブルを見て、伊奈帆は眉を上げた。

「チェス盤だ」

「ああ。そこにあつたから、遊んでいた」

すかさずの本棚に立てかけられていた二つ折りのチェス盤。あれだけ面会室ではチェスを挟んでいたのに、ここに来てからは一度もしていない。

駒を置く白い手を見る。あの日の手だった。初めて、意思を交わしたあの雨の日の。

「：あとで、しようか。ご飯を食べてから」

伊奈帆がそう言って、スレインは頷いた。

夕食の後、ダイニングテーブルにチェス盤を移させ、二人は差し向かいに座った。

あの日々に戻ったかのように錯覚する。

あれから時は流れ、世界は変わりつつある。その流れに残された目の前の男と、一緒にいる自分。

「君は、あの時、僕に示したね」

白のクイーンへ一直線に向かう黒いナイト。白のビショップをその隣に並べた。

「それは、今でも変わらないかい」

スレインは、はつきりと頷いた。久しぶりに見る表情だった。星間戦争で、カ

タフラクトを駆っていた頃。コックピットの中ではこんな表情だったのかもしれない。冷たくて、攻撃的で、真摯な瞳だった。

「ああ。僕には、それしかないから」

彼は、服の上からペンダントを握りしめた。服に皺が寄り、手の甲に血管が浮き出た。

「わかった」

伊奈帆はそう言って、Q2のポーンを一つ進めた。

「：僕もね、そんなに気楽な身の上ではない」

スレインが、鋭い眼差しで伊奈帆を見据えた。

「それは、わかる」

スレインは、E3のポーンを二つ、進めた。

「君が僕とここにいていうのは、そういうことだろうか？」

伊奈帆は、E3のポーンを一つ前に出した。

「そうなんだ」

スレインは、腑に落ちない、という顔をして、しばらく盤上を見つめた。

「…お前。馬鹿だって、言われないか」

憎まれ口を叩くあたり、今日はやけに元気だ。面会室のあの日々に戻ったよう
で。久しぶりに、こんな風に気安く話ができることが嬉しくて。

伊奈帆は君こそ、と返した。スレインは口を尖らせて、ほんとに馬鹿だ、と嫌
そうな顔で呟いた。

「…眠れないの」

初めて、声をかけた。起き上がり、暗がりの中立ち上がって隣のベッドを覗き込む。

呼吸が荒い。スレインは、目を固く瞑って、何かをやり過ぎそうとしている。伊奈帆はこれまでずっと、何もせずにいる。スレインは、ずっと、まともに眠れていない。ここに来る前も、ここに來てからも。

何日かおきに、気を失うように眠る。伊奈帆がこの部屋に帰ってくると、真っ暗な部屋のソファで、キッチンで、廊下で、テーブルで、死んだように倒れていることが度々あった。

伊奈帆の腕が、縮こまるスレインの体に思わずと言った様子で伸ばされ、躊躇いがちに空で握られる。髪を梳くためおずおずと開かれた指先は少し荒れていて、時折引っかかった。そんな時は指先をこすり合わせて、殊更丁寧に髪を梳く。

何度も、何度も。

スレインは目を開けて見上げる。目が合った。自分を映す、その左目。見下ろす顔。

伊奈帆のこんな表情は、初めてだった。驚いて、スレインはその橙の瞳をじっと見た。

「お前は……。どうして、そんな……」

泣きそうな顔をしているんだ。

そう、言おうとしたが、なぜだか言葉にならなくて。口から出たのは別の言葉だった。

「……どうして、髪を触るんだ。……今までそんなことをしたやつは、いない。」

ひどく傷ついた顔をして、伊奈帆は口を一度開け、閉じ、もう一度開いた。

「君が、バラバラになってしまいうような気がして」

声は、掠れていた。もしかして、本当に泣いているのかもしれない、とスレインは思った。

かさついた指がスレインの頬を滑る。まるで、初めて見るガラス細工に手を伸ばすような触れ方だった。

「壊れて、しまいそうで」

その言葉に、スレインは口元を歪めて、笑った。不規則な呼吸にごほ、と咳き込み、スレインは仰向けになって、伊奈帆を見上げた。

「……きつと、とっくに壊れてるんだ」

閉じた瞼が痙攣したように震えた。顔の横に投げ出された手首は、同じものを食べているのに、骨の形が分かるくらい痩せていた。

「食べることも、眠ることも、とても難しい」

開いた瞼の奥から、透き通るような瞳が現れた。その碧が伊奈帆を射抜いた。

「お前は、生きる練習と言ったけれど」

お前を道連れにして、箱の中で壊れ続けて。

これは、生きていると言えるのか？

生きるって、何だ？

伊奈帆は、スレインの右の手のひらを握った。力をこめると、握り返す感触があった。指先が少し冷たくて、手のひらは温かい。指の間に指を差し込む。固く結んだ指から、血液が流れる感触がどくどくと伝わってくる。

「…僕は、君の傍にいたいよ」

「何で」

「生きているのか、って言ったね。そう見える。僕には、今の顔は泣きそうに見えるよ」

伊奈帆は指の背で、スレインの目の端を撫でた。乾いていて、涙は流れてはいなかった。

「放っておけない。…多分、君のことが好きなんだ」

聞いた途端、スレインは繋がれた手をほどこうともがいた。体力と体勢差から抵抗は敵わず、もう一方の手も繋がれて、苦しい声が出た。

「…やめろ」

これで全力で暴れているのかと思うと。その抵抗を受け止めて伊奈帆は愕然とした。削がれた力、挽がれた羽、すり減らした牙。ぐっと、手に力をこめる。尖った肘が跳ねた。

「…大事に、したいんだ」

「やめてくれ」

抵抗が止み、肩が震え出した。しゃくりあげるような声が聞こえてきて、伊奈帆は両手を解いた。壊れて放り投げられた人形のように、スレインは泣いていた。伊奈帆は、スレインの髪を撫でた。一瞬だけびくりと体が跳ねて、その後はずっとそのまま泣いていた。伊奈帆は、泣き止むまで、ずっと髪に指を通し続けた。何度も。

「…君は今、何を考えてるの」

涙が止まり、天井を見上げたままぴくりとも動かないスレインに、伊奈帆は聞いた。スレインは、目だけを動かして伊奈帆を見た。そして瞼を閉じた。

「きれいで、いてほしいんだ。触ってほしくない。見てほしくない。誰にも…僕は」

瞼がもう一度開いて、澄んだ碧が伊奈帆を見た。

「もう誰も傷つけない。誰も、殺したくない。…お前を、死なせたくない」でも、生きている限り、人は人を傷つける。だから、スレインは眠れない。生きることを放棄できず、生きることを受け入れられず、ここにいます。

「…じゃあ、」

伊奈帆は、スレインの瞳を見つめ返した。真っすぐに視線が交わる。馬乗りになって、泣き濡れた顔の両側に、両手をつく。目を逸らせないくらい顔を近づけて口を開く。

「じゃあ、どうして君は、生きてるの」

スレインは無表情に一度瞬きをした。視線を合わせたまま、淡々と答える。

「…生きるように言ったのは、お前だろう。それとも、」

見開いた瞼が真円を描いた。唇が戦慄いた。

「お前が、殺してくれるのか」

密やかな声。引き結んだ口が弧を描くのは。

歓喜で？切望で？絶望で？

「君の命は、僕のものじゃない」

伊奈帆は、肋の浮いた薄い胸を握りこぶしでどん、と叩いた。かは、とスレインが咳き込む。

「君は、セラムさん…。アセイラム姫の願いによって、生きているんだろう」

苦しそうにスレインが顔を歪めた。

「それを僕に教えたのはお前だ」

伊奈帆は体を折り、スレインの胸に額を合わせた。どくどくどく。心臓の鼓動が伝わる。

「そう。でも、僕の意味で君が生きているわけじゃない。君は、アセイラム姫の願いによって生き、生かされているんだろう。…でもね、僕は」

伊奈帆が顔を上げて、スレインの頬を両手で包んだ。スレインがその腕を振り払おうとして、やめる。行き場を失った手は、伊奈帆の腕にそっと降りた。息がかかるくらいの距離。

「君が、君の意志で生きること望むよ」

ひっ、とスレインの喉が鳴った。

「…それは、無理だ」

「そうかな」

「…殺した。正義とか、大義のためじゃない。僕の都合のために、たくさんの人を不幸にした」

「それは、僕も同じだよ。それが、戦争だ」

スレインが、伊奈帆の腕を握った。

「英雄だなんて調子のいいこと言っているけど、怖いんだ。人殺しが。倒すべき

敵がいなくなった世界から、僕を追いやる方法を探してる。君がいなくなったら、いよいよ僕は一人になってしまう。僕と君は、同じだよ。同じ、人殺しだ」

だから、と伊奈帆は続けた。近すぎる瞳が、何かを探すようにじっと目の奥をのぞき込んだ。

「だから、死ぬな」

何か、見えたのだろうか。わからない。スレインの視線が、橙の虹彩から外され、閉じられた左眼窩へ移った。そこに、スレインの指が触れた。指先は震えていて、左目からこめかみの銃創までをゆっくりと辿った。その手に、伊奈帆は自分の手を重ねた。スレインが顔を歪めて、不器用に笑った。伊奈帆も、笑った。いつの間にか泣いていて、ぽた、ぽた、とスレインの顔に水滴が落ちて頬に涙の道を増やした。

「…勝手な奴だな、君は」

スレインの首に腕を回して、伊奈帆は抱きついた。ぽんぽん、とあやすように伊奈帆の背中をスレインが叩く。ぴったりとくっついた胸から、お互いの心臓の鼓

動が伝わる。

「死ぬなら、道連れにしろ。もし勝手に死んだら、地獄の果てまで追いかけるから」

だだをこねるように腕に力をこめる伊奈帆の体温を感じて、生きている伊奈帆の体温を感じて、同じように自分が生きていることが彼に伝わっているのかな、とスレインは天井を見た。

「それは、ごめんだ」

伊奈帆の背中に回した腕に力を込める。伊奈帆の心臓と一緒に、自分の心臓が嬉しそうに跳ねている。

そうか、僕も生きたかったんだ、とスレインは思った。

伊奈帆は思い出す。

その記憶は、もう三年以上前ものだ。スレインがあの施設へ収監され、数か月経った頃だった。

伊奈帆は、見た。

尋問で、あれが尋問と呼べるものならの話だが。

数人の軍関係者に囲まれていた。それは独房で、数人がかりで、情報収集というよりは憂さ晴らしという目的で。拘束されて、乱暴されて、傷つけられていた。伊奈帆は、何日も経ってから録画された監視カメラ越しにその光景を見た。

血が出ていた。腫れていた。引き裂かれていた。映像を見た後で面会した彼は、青白い顔にいくつかの青あざとかさぶたをつくって、ひよこひよここと歩きにく

そうに歩いてテーブルに着いた。その白い首には、齒列の形にくっきりとかさぶたが残ってた。

軍神と呼ばれる伊奈帆も、年齢の上では一人の多感な男子高校生だった。至極まともな恋愛観を持っていて、恋とか、愛とか、そういうものにある種の憧れを持っていたりした。手をつないだり、キスしたり、それ以上のことは好きな人とするものだと思っていたし、今でも思っている。

だから、ショックだった。欲望の食い物にされても抵抗一つせず受け入れる彼の姿が。しかもそれが、習性のように長年繰り返されてきたであろうことが。彼の姿に感じた苛烈な感情。その時は訳もわからず壁を殴ったが、今ではその感情の名前が分かる。

「ねえ。今すぐく、君にキスしたいんだけど」

「はあ？」

首に抱きついたまま、伊奈帆が聞くと、呆けたような声が返ってきた。腕を緩めて、間近で顔を見ると、呆れた表情をしていて、今更ながら間抜けなことを聞いたかな、と思った。

「いいかな？」

「ふっ、はは、は」

スレインは、猫のように目を細めて笑った。眉尻を下げて、しょうがないなあ、という顔のスレインは、きっと本来の彼の表情なのだろう。小首を傾げて、伊奈帆の頬に触れた。

「そんなことを聞くやつは、はじめてだ」

「そんな奴らと一緒にしないで」

「…そうだな。ごめん」

不機嫌に言い返す伊奈帆に目を丸くして、スレインは微笑んだ。

「でも、いいのか」

ちらり、と視線を送るのは、監視カメラだ。伊奈帆の尽力により、入居当初の三分の一度には減ったが、今だに全ての部屋が監視されている。普通に生活していれば気にならない場所に設置してあるが、スレインがあれだけ執念深く掃除をしているのであれば、きっと全ての位置を把握しているだろう。

「構やしない。見られて困るようなことはない」

軍にとっては寝耳に水かもしれないが、願ってもない事態だろう。利用するにしても、処刑するにしても、スレインは野放しにはできない相手だ。伊奈帆が現在の処遇を受け入れている理由としては、これからの行為に説得力はある。

「そうか。君がいいなら、いい」

伊奈帆の髪に指が差し込まれて、引き寄せられる。スレインの首筋からは、どくどくと血液の流れる感触が伝わった。目を閉じて触れ合った唇は冷たくて、震えていた。唇を離して目を開けると、困ったように笑う顔があった。つられて伊奈帆も笑った。

伊奈帆の手が、スレインの首から、鎖骨、胸を辿った。とくとくと、心臓の鼓動を手のひらに感じる。ぐっと指に力が入り、スレインが反射的に身じろいだ。

「…君が嫌なら、しない」

「…別に、いい」

こくりと頷くスレインは、感情の読み取れない顔をしていた。伊奈帆は不思議に思って聞く。

「嫌？」

スレインはぱち、と瞬きして、小さく首を振った。

「嫌じゃ、ない。でも、そんなこと、いちいち聞くのが不思議なだけだ」

そう、と伊奈帆は一度眉を顰めて、そして殊更ゆっくりと顔を近づけて、もう一度冷たい唇に口づけた。

照れたように表情を緩ませて、伊奈帆は言った。

「初めてなんだ。間違えたら言って。」

伊奈帆の手が緊張しているのかぎこちなく体を滑る。こんなに丁寧に、恥ずかしそうに触れたのは初めてで、スレインの口に小さな笑みが浮かんだ。

「…お前が、そんなこと言うなんて」

こんなに優しい男だとは、知らなかった。大切そうに触れた場所から溶けていくように心地よくて、でもそれが怖くて、思わずスレインは唇を噛んだ。

伊奈帆はスレインの腰のあたりに馬乗りになって、スレインの服の下の肌に触れていた。服は首のあたりまでたくし上げられて、暗闇にペンダントの銀の鎖が光る。引き皺った傷跡を、伊奈帆は指の腹で注意深くなぞる。

伊奈帆の触れ方が苦しいほどにもどかしくて、スレインは伊奈帆の服の裾を引っ張った。

「…そんなに、優しくしなくても、いい」

手を止めて、伊奈帆が聞いた。

「嫌？」

じつと見つめられて、スレインはぐ、と言葉に詰まる。

「…嫌じゃ、ないけど…」

「…ちょっと、腕上げて」

服を脱がされて、両手を絡めとられた。抵抗するつもりは初めからないけれど、慣れない触り方にどうしていいかわからなくて目をぎゅっと瞑った。

「あっ…」

首筋を吸われて、思わず声が出た。今までも吸われたことはあるし、噛まれたことも、絞められたこともある。でも、こんなのは初めてだ。初めての感覚に喉が仰け反る。背筋にびりびりと甘い感触が駆け上がってきて、背中が跳ねた。

「ふっ…、…は、あ」

首筋から鎖骨へ、胸の傷へ、花が散る。息が苦しい。はあはあと、荒く吐く息に自分ではないような声が混ざって、頭がくらくらしてきた。

伊奈帆が、口を塞いだ。歯が鳴り、舌が絡まって、吐息が混ざり合った。ぺろり、と唇を舐めていった。…きつと、血の味がしただろう。

伊奈帆の手が、腰骨のあたりを撫でた。ビクリ、と腰が強張る。

「嫌だったら、言って」

伊奈帆が下衣に手をかけて聞いた。嫌じゃないから、スレインは首を振った。嫌じゃない。嫌じゃない。でも、こんなのは初めてだ。全身が心臓になってしまったように鼓動が大きい。

足から服が抜き取られて、腰から腿を撫でられた。反射的に逃れようともがくと、伊奈帆に足を膝裏に挟まれて固定された。触られて、苦しいのか、気持ちいいのか分からないまま体が跳ねる。目尻に涙が溢れ、視界が滲む。ぐらぐらと天井が揺れる。

「んっ…！く、は…あ」

「ね、痛くない？」

スレインの腕が伸ばされ、ぎくりと強張った。伸ばした手はそのまま空を切ってもどかしく胸を掻き抱く。爪の跡が赤く線を残した。こくこくと頷いて、痛くないから、とスレインは涙が張った瞳で伊奈帆を見た。はあはあと、肩で息をして体が揺れる。

「う、…ん、…あ。…はや、く。かい、づ、か」

血の味のする唇にもう一度口づけ、伊奈帆は言う。

「伊奈帆」

スレインが荒い呼吸を繰り返しながら、伊奈帆を見た。胸で握り締められた手を握る。固い。

「伊奈帆って、呼んで」

スレインは握られた手をそのままに、あ、とかう、とか呻き声を漏らして口を数度開閉した後、小さく口を開いた。

「い、…伊奈帆…」

伊奈帆は隻眼を細め微笑んだ。スレインの指に口付け名を呼ぶ。

「スレイン」

恥ずかしいのか照れているのか。顔を背けたスレインに、ゆるやかな愛撫を続ける。高い声が漏れた。腰が揺れて、爪先が伸びて足が強張った。揺れる腰を伊奈帆はゆっくり撫でた。

「あ…、は…あ、うん…っア」

「気持ちいい？」

スレインはこくこくと頷き、シーツを握る手にぎゅっと力をこめた。

恋とか愛の先にあるべき行為を、単なる性欲処理として強いられてきたことに。伊奈帆は何度壁を叩いたかわからない。大切な人。大切にしたい人が、物以下扱いを受けてきた。最初は、どうすればいいのかわからなかった。随分泣いたし、ひびが入るかと思うくらい壁を殴った。

でもあの日。伊奈帆があの地下から連れ出した日。晴れわたる青い空に眩しうに目を細め、子どものように笑ったスレインの顔を見て、分かった。

簡単なことだった。好きだから、大事にしたい。好きだから、一緒にいたい。好きだから、一緒にになりたい。

そういうことだった。だから、もう躊躇わないし、目一杯でいくと決めた。

シーツを破るか、と思うほど固く握られた手を見る。いつも、こうやって、誰かに縋ることもなく、何もかも受け入れてきたのだろう。

「ねえ」

「……う、ん？」

熱っぽい碧の瞳が伊奈帆を探した。目が合うと、伊奈帆はその色をただ一つの瞳に映す。

「…好きだよ」

ひぐりと、スレインの喉が鳴った。

「君が好き」

「伊奈帆…」

みるみる顔を歪ませるスレインの目から、次々に涙が溢れる。今日は泣かせてばかりだ、とその涙を拭った。

「好きだよ。スレイン」

こっん、とおでこを合わせる。温かった。

「君が大事にしているものを大事にしたい。痛みを感じる君の傍にいたい。夢を見るなら、一緒に手を伸ばすよ」

あの雨の日、約束した。初めて本当の言葉を交わした、チェス盤の上で。

「だからさ。そんなに怖がらないで」

伸ばした後ぐつと握られる手のひら。はっと強張り空を切る腕。痛みや快楽に耐えて噛みしめられる唇。

「構わないから。しがみついてくれていいんだ」

その手を握り、その腕を背中に。血の滲む唇に触れるだけのキスを。

「」

抜けるような青空。

桜の花びらがはらはらと風で舞い上がっている。各駅停車の電車のドアが開き、ホームに降りる。陽射しは明るいが、吹き付ける強い風に伊奈帆は肩を竦めた。

駅の改札を出た伊奈帆は、待ち合わせた人物を探す。今日は平日で、駅前それほど込み合っていない。一通り見渡し、遅刻かな、とスマートフォンに手を伸ばした時だった。

「なおくん」

右側からよく知った声がした。そちらを見ると、やはりよく知った顔が、よく知った笑顔で笑いかけている。しかし、先ほど探し当てられなかった理由に思い至り、伊奈帆は一瞬言葉を失った。

「ユキ姉」

一年ぶりに会う姉は、名前を呼ぶと嬉しそうに笑った。

「久しぶりね。元気？」

頷いて、伊奈帆は姉の姿を瞳に映す。

「うん。驚いた。髪、切ったんだね」

「えへへ、そう。似合う？」

腰まであった黒髪が、顎先までの長さになって、軽やかに揺れていた。ハンドバックに添えられた手の爪は、控えめなピンク色に染まっている。

「うん。きれいだよ」

その言葉に、ユキはにっこり笑った。

「ありがとう。じゃあ、行こっか」

桜の花びらがつま先で遊ぶ春の道を、並んで歩く。

もう、伊奈帆の方が背が高い。パンプスを履いた姉の歩幅に合わせて、いつもより、少しゆっくりと歩く。

きっと。姉が、まるで知らない女の人みたいに思えるのは。僕以外にも大切な人ができたからだろう。

「どう？調子は」

何気なさそうにユキが聞いた。多分、一番気になっていることで、今日はそれを言うために伊奈帆は会いに来た。

「楽しいよ。それに、幸せだ」

「そう」

ユキはにこにこ伊奈帆を見上げた。腕を伸ばして、ぽんぽん、と伊奈帆の頭を撫でた。

「寂しいなあ。知らないうちに、大きくなっちゃって」

でも、よかったね。そう言った姉に、伊奈帆はありがとう、と笑った。

「ただいま」

リビングに入ると、スレインはソファで本を読んでいた。伊奈帆の声に振り向く。

「ああ、おかえり。」

スレインは立ち上がり、キッチンへ向かった。

きっとお茶を入れてくれるんだろう。肩に髪が踊るその後ろ姿を見て、髪が伸びたな、と伊奈帆は思った。

「姉貴がね。髪を切っていた」

スレインが淹れてくれた紅茶を前に、伊奈帆は言った。ふうん、と相槌を打ちつつ、彼は耳を傾けている。

「きれいになってて、大人になってた」

「そうか」

紅茶を口に運ぶ。良い香りがして、おいしい。湯気の向こうに見えるスレインは、肘をついて伊奈帆を眺めていた。伊奈帆は紅茶をテーブルに戻す。水面に、同心円が広がった。

「よかったねって、言われたよ」

「何が？」

目の前に座るスレインを見る。一年前、初めてこの場所に来たときのことを思い出す。所在なさに佇む彼と、監視され、自由を奪われた空間。埃一つなく掃除された部屋。

嵌め殺しの窓から見えた、飛ぶ鳥。

今では、監視カメラは玄関とキッチンだけになって、代わりに物が増えた。そして、窓は開閉ができるようになった。初めてカーテンが揺れたのは、つい先週のこと。

春風が、肩先まで伸びた金の髪を揺らした。手負いの獣のようだった彼は今、自然とそこにいて、紅茶を飲んでいる。

時々、優しく笑って。

伊奈帆も笑う。

「君のこと」

「僕のこと？」

ふわ、と風が吹き込んだ。強い風に目を閉じ、そして目を開ける。細かな傷のついたテーブルに、桜の便りが届けられていた。

「桜だ」

スレインが花びらをつまんで大切そうに手のひらに乗せた。

「昔、咲いているところを見たことがある」

父さんと、日本に来た時。フジヤマも見た。きれいな山だった、とスレインは話した。

伊奈帆は、開け放った窓から青い空を見上げる。

「来年、一緒に見に行こう」

その言葉にスレインは、照れたように、嬉しそうに笑った。

▷朝ご飯を食べるはなし

眩しい。

伊奈帆は閉じた目をぐっと寄せた。朝だ。もう少し寝ていたいのが、そういうわけにもいかない。嫌々身を起こし伸びをすると、肩と首が鳴った。どうも体が重い。最近、仕事を立て込んでいるせいだ。

スリッパをひっかけてパジャマのままリビングへ足を踏み入れる。先客がいた。彼は伊奈帆に気づいて、キッチンから盆を持って持って近づいてきた。

「おはよう。スレイン」

「…おはよう」

スレインはボソボソと挨拶を返した。テーブルの上の皿には、拳大のおにぎりが四個と、黄身が固そうな目玉焼きが並んでいる。

「このおにぎり、君が作ったの？」

スレインが急須の乗った盆をテーブルに置き、辺りに茶葉の良い香りが漂った。スレインは手際よく湯呑みを返し、暖かいお茶を交互に注ぐ。

「お前が作ったほうがおいしいだろうけど……」

自信無さそうな口ぶりは、これまでの製作物の反省を踏まえてのことかもしれない。伊奈帆は椅子を引いて座った。スレインも向かいに座る。

「うれしいよ。誰かに料理を作ってもらうのは」

伊奈帆が言うと、スレインは視線を逸らした。

「そんなものかな」

会話に手応えがないのはいつものことだ。気を取り直して、伊奈帆はおにぎりの乗った皿を引き寄せた。

「これ、選んでいい？何が入ってるの？」

スレインが覗き込んで、指で一つ一つ指し示した。神経質が過ぎるくらい、短く切り揃えられた爪だ。関節が目立つ指は静脈が青く透けている。

「これが昆布で、これが梅干し。これとこれは、シーチキン」

「じゃあ昆布とシーチキン」

皿の向きを変えて、手を合わせる。

「いただきます」

「いただきます」

伊奈帆は大きな握り飯にかぶりついた。一口目は、具に到達できなかった。ちよっと塩気が足りない気がするが、悪くない。三口目でようやく昆布の味がした。

「おいしい」

「そうかな」

スレインは口をもぐもぐさせながら、首を傾げた。

「上手になったよね」

「そうかな」

白身が一体化した二つの目玉焼きを箸で切り分け小皿に取る。焦げてないし、黄身を割るとたんぽぽのような鮮やかな黄色が目飛び込んだ。

「おにぎりを作るのも、目玉焼きを作るのも」

お茶は初めから上手に淹れてたね、という伊奈帆の言葉に、スレインは微妙な感じで頷いた。

「…そうかも」

前はご飯も炊けなかったし、トーストは焦がすし、目玉焼きはフライパンにこびりついて取れないし。そういえば、海苔も知らなかったな。梅干しを初めて食べた時のあのびっくりした顔。

伊奈帆の口から音もなく笑い声が漏れた。空腹を自覚して体が軽く感じる。なんだか元気になってきたみたいだ。

スレインが梅干しの種を指でつまんで皿の端に置いたのが見えた。結構経ったな。一緒に暮らすようになって。

「スレイン、醬油取って」

「はい」

自然に手渡された小瓶を傾ける。プラスチックの赤い注ぎ口から、目玉焼きの上に黒い雫が垂れた。

「目玉焼きには醤油がいい」

「うん。僕も」

はい、と伊奈帆は手を伸ばし、スレインは醤油の瓶を受け取った。

きみとっはん[2018-06-10]

カン パイ

——冬。
君の生まれた日。

[2017-04-24]

「はいこれ。お土産」

帰ってくるなりスレインに紙袋を押し渡した伊奈帆は、上着を脱ぎながら寝室へ向かった。リビングで土産を受け取ったスレインは、重みのある紙袋をテーブルの上に置き中身を取り出す。

「瓶？」

黒い瓶に模様のような文字が踊っている。これは漢字だ。よく見る字だ。

「ツクル……？」

「ごく」

Tシャツにジーンズと、ラフな格好に着替えた伊奈帆は、「くれた人は、ガンダムじゃないぞ、って笑ってたけど。何のことだろうね」と言って首を傾げた。スレインも、何の事だかさっぱりわからない。そもそもガンダムとは何だ。

「お酒だよ。原料は米」

「酒？」

言われてみれば、それしかないという見た目だ。高級そうに見える。

しかし、伊奈帆が酒を飲んでいるところなど見たことなどない。この家のアルコールは、煮物に使う料理酒しかない。

「お酒なんて、どうしたんだ？」

「貰い物だよ」

そこで伊奈帆は、明後日の方向を見た。

「今日、誕生日だから」

「ああ」

どうやら照れているらしい伊奈帆が頷く。それを複雑な気持ちで見たスレイシだった。

伊奈帆との付き合いも数年になるが、今まで誕生日の一つも知らなかったのだ。昨年の誕生日はどうしていたんだっけ、と思いを巡らした。

「うん。お酒なんて、初めて飲むよ」

伊奈帆はまじまじと酒瓶の表裏を確かめ、十五度ってどんなもんかな、と呟いた。これまでの人生においてアルコールを摂取したことがゼロではないスレイ

ンは、初めて酒を飲むには高めかな、と心の中で答えた。

「お前にも、初めてのことがあるんだな」

伊奈帆がスレインを見て呆れたように肩を竦めた。

「当たり前だよ。結構シンプルな人生を送ってきたからね」

十代で生ける伝説となった軍神が、よく言う。

「そうは見えない」

「心外だ」

伊奈帆は椅子に掛けてあったエプロンを手に取ると、キッチンへ向かった。腰ひもを結びながら、スレインに聞く。

「何か、食べるものを作るよ。何がいいかな」

スレインは瓶のラベルと伊奈帆の後ろ姿を交互に眺め考える。

おそらく、この酒に合う料理は何か、という問いかけだろう。伊奈帆が夕食のメニューをスレインに聞くことはほとんどないからだ。聞かれたのは同居直後の一度だけ。何も言えなかった。食べたい物が何一つ思い浮かばなかったから。

不愛想で朴念仁な伊奈帆だが、見かけよりずっと優しいのだ。

「さあ。いつものおかずでいいんじゃないか」

そんなもんかな、と言いつつ、冷蔵庫の中身を物色した伊奈帆の手にはすでに三つの卵が収まっていた。伊奈帆は本当に卵が好きだな、と思う。大体、伊奈帆が冷蔵庫から一番最初に取り出す食材は卵だ。

「スレイン、食器並べておいて」

「ああ。…界塚」

おめでとう、と言いきびれたが、よく考えればそんなことを言える筋合いではなかったことに思い至る。命を奪おうとした相手の誕生日を祝うだなんて、皮肉すぎる。

「いや、…ええと、コップでいいか？」

「うん。それしかないし」

伊奈帆は食材を俎板の周りに並べ、腕まくりをした。

この男は戦闘中と料理中が一番生き生きしている、とスレインは思った。

三つの卵はだし巻き卵に姿を変えた。

ソファの前のローテーブルには、茶色っぽい料理が多く並んでいる。おそらく日本の伝統料理だろう、とスレインは推察した。この酒も日本の地酒のようなものらしいので、カテゴリを合わせたのだろう。ダイニングテーブルで食事をすることが通例だが、向かい合って酒を飲むのも、ということになり、こちらへ並べた。

スレインは、目の前のコップに八分目までなみなみと注がれた酒を見た。透明な、綺麗な酒だ。

しかし、こんなに注いでいいのだろうか。水でもあるまいし。

「いただきます」

「いただきます」

「はい、乾杯」

「乾杯」

カッン。

ぐい、と煽ると、喉がかつと熱くなった。アルコール独特の香りが鼻から抜ける。癖がなく、香りがやわらかい。ふと隣を見ると、伊奈帆が目をぱちくりさせていた。手の中のコップの中身は半分くらいに減っている。一気に飲みすぎだろ
う。

「ああ、びっくりした。飲み込めないかと思った」

「大丈夫か」

「オーケーオーケー、大体分かった。これはちょっとずつ飲む飲料なんだ。」

もう一度ぐい、とコップを傾けた伊奈帆はすでに鼻の頭が赤くなっている、先行きが不安になるスレインだった。

「食事もしないと、気分が悪くなるぞ」

「オーケー。ああ、お腹がすいた」

だし巻き卵に箸を伸ばす伊奈帆の赤い耳を見る。日本人は酒に弱いというのは本当だったんだな、と思い、その一般的な事例に目の前の男が当て嵌ることが何だか可笑しくて、スレインはコップに着けた唇を緩ませた。

食事と酒を黙々と口へ運ぶ。二人の間には、会話は少ない。それでも不思議と、沈黙が苦にならないのだった。今日は隣に座って食べていることと、アルコールも手伝って、スレインはかなりリラックスして食事をすることができた。

食事の時間は、緊張する。どうしても体が受け付けない時があるのと、せっかく作ってくれた食事を残すのが悪いと思うからだ。伊奈帆が気を遣ってくれているのが分かるので、それが余計に心苦しい。

肉じゃがに箸を伸ばそうとして、肩に重みがあることに気付いた。肩に伊奈帆の頭が乗っている。

「界塚？」

肩に凭れかかって、じっとしている。慣れない酒に気分でも悪くなったか、と

顔を覗き込むと、規則正しい呼吸音が聞こえた。

「寝てるのか」

ご飯を食べて寝るなんて、子どもみたいなやつだな。スレインは呆れつつも、左目の眼帯を外してやる。閉じられた両目。

寝顔は二十歳よりずっと幼く見えた。前髪が目に入りそうだったので、掻き上げてやる。そうしてから、スレインは首を振った。

「…何をしているんだ、僕は」

酔っているのかもしれない。伊奈帆を起こさないように、ゆっくりと背もたれに体重を預ける。天井を見ると、蛍光灯が目には痛いほど明るかった。

「お前といると、おかしくなってしまうそうだよ。…いや。もうおかしいのかな」
生きていることがおかしいのかな。それとも、死んでいることがおかしいのかな。こんな穏やかな時間が、どうして自分に与えられたのだろう。世界には、紛争も貧困も強奪も、理不尽な死も逃れられない不幸も溢れかえっている。生きたいと願うのに、生きることすらままならない人たち。そういうことを考えると、

頭と心がおかしくなってくる。

…いや、正常になってくる、が正しいのかもしれない。

もぞもぞと伊奈帆の頭が動いて、寝起きのくぐもった声が聞こえた。

「起きたか」

「…今、何時？」

酒の所為か寝起きの所為か、呂律が回っていない。時計を見ると、いつの間にか飲み始めてから四時間近くが経過していた。

「ええと…。一時半」

「寝てた。眠い」

伊奈帆は大きな欠伸をした。ごしごしと目を擦るのを見て、そんなに乱暴に擦るな、と言いたくなる。彼は左目に触れて、おや、と周囲を見渡した。

「ああ」

伊奈帆はテーブルの上に置いた眼帯を見つけて、手を伸ばしかけてやめた。大雑把な動きで、ソファにもたれて足を伸ばした。

「起こさないんだね」

まだ酔いが醒めていないのか、たどたどしい声音で伊奈帆が言った。

「起こして欲しかったか？」

「いや：よく寝た。スレイン、ありがとう」

ソファにずぶずぶと沈み込み、目を閉じて伊奈帆が言った。珍しく、見て分かるくらい微笑んでいた。

「ええと、何が？」

何のことか分からず聞くと、伊奈帆は薄く片目を開けてスレインを見た。

「肩を貸してくれて」

何だ。そんなこと。

「ああ。別に、こんな体でよかったら。どう使ってくれてもいい」

「そういう意味じゃない」

伊奈帆は頬も首も耳も、茹蛸のように真っ赤だった。体がソファからほとんどずり落ちて、背もたれを枕にして緩慢に瞬きを繰り返している。

「…酒は弱いんだな」

「そうみたい。初めて飲んだし」

伊奈帆が不機嫌そうに唸った。もはやただの酔っ払いだ。

「眠い。喉が渴いた」

我儘だな、と思いながらも酔っ払いは総じて我儘なものだ、と思い直してスレインは聞いてやる。

「水を飲むか」

「うん」

コップに水を入れて戻ってくると、伊奈帆はソファに俯せに寝そべっていた。

「ああ、信じられない。どうして大人はお酒なんて飲むんだろう」

「大丈夫か」

コップをテーブルに置いて、伊奈帆の頭の近くに座る。背中を触ると、服越しに体温が伝わってくる。ぽかぽかとして、子どものような温度だった。

「ああ、ありがとう。…君、大丈夫なの。全然赤くないけど。どっちかと言えば

青い。顔が」

僕なんかこんなんだよ、と腕まくりした伊奈帆の腕は上の方まで赤かった。

「何ともない」

へえ、と生返事をした後、伊奈帆が体を起こそうとしがみついていたので、起こすのを手伝ってやった。ソファに並んで座り水を手渡してやると、半分くらいを一気にごくごくぐくと飲んだ。

「へえ、いいなあ。」

そう言ってもう一度コップを煽り、全部飲み干した。空のコップを受け取り、テーブルに置いてやる。

「ああ、美味しい」

時計を見ると、もう二時だ。伊奈帆は明日、…いや、もう今日か。今日は仕事の筈だ。早くベッドで寝た方がいいだろう。

「風呂に入るか？」

スレインが聞くと、伊奈帆がぐるりと目を回して口を歪ませた。何を表現した

いのかは、よく分からなかった。

「うーん、どうだろう」

「まあ、沸かしてくる」

立ち上がろうとしたら、腰を両腕でホールドされた。臍のところで両手の指ががちりと組んでいるので、全く身動きができない。

酔っ払いのくせに、どこにこんな力が。

「…何のつもりだ」

「いや、ここにいてよ」

中腰のまま振り返って聞くと、予想外に拗ねた声が聞こえてきた。輪になった両腕がぎりぎりと締めあげて、絶対に離さないという強い意志を伝えてくる。

「ええと…」

伊奈帆は酔っぱらうと子ども返りしているようで、普段が普段なだけに落ち着かない。いつもの理屈っぽくて冷静なお前はどうした、と思う。

諦めてソファに腰を沈めると、伊奈帆はぐりぐりと腰に頭を押し付けてきた。

小さい子どもか。こいつ、明日素面に戻ったらどうするつもりだろう、といらぬ心配をしてしまう。

「あの、界塚…」

「伊奈帆」

「へ？」

意味が分からず伊奈帆を見ると、ぺしぺし、と伊奈帆の右手が太ももを叩いてきた。

「名前。伊奈帆って呼んで」

このタイミングで、ファーストネームで呼ぶことを強要されるとは思わなかった。

別にいいけれど。しかし、あまりにも馴れ馴れしくないだろうか。

「いや、そんな仲か？僕たちは」

「一緒に地球に落ちた仲じゃないか。スレイン」

「よくもまあ、そんなことを言うなあ。お前は」

そういえば、こいつはいつからか僕を名前で呼んでいたな、と思い当たった。いつからだろう。二人でいると「ねえ」とか「なあ」とか、名前を呼び合うことも少ないけれど。結構前から伊奈帆はスレインをファーストネームで呼んでいた。

「ほらほら」

「：お前、酔うと子どもみたいだぞ」

「いいんだよ。君より年下なんだから」

そういえばそうだった。この理屈屋の朴念仁が年下だと宣言されると、更に生意気度が増したように思う。意外と甘え上手なこの男には姉がいるんだった、と思ひ出した。

そうか。

姉となかなか会えなくて、寂しいのかもしれない。

「：いい」

「い？」

瞳を輝かせて見つめられると、居心地が悪い。目を逸らして一度ため息をつき、スレインは観念した。

「…伊奈帆」

「…へへ」

にへら、という擬音がつきそうな表情で伊奈帆が笑った。こんなに笑うやつだったのか、と思ったし、こそばゆそうに照れる姿に、意に添わず可愛げを感じてしまう。

不思議なやつだ。頭がいい割に、時々驚くほど子どもっぽくて、そして普通だ。この非凡な男が、ごくごく一般的な人間らしい感覚で物事を感じているらしいことが、空恐ろしくも思う。

「調子が狂う…」

しかし言葉にするとそれだけに収まってしまって、思考は拡散してしまった。存外自分も酔っているらしい、とスレインは思った。

「狂えばいいさ。調子も気も。君も、もっと飲みなよ」

伊奈帆はしがみついていた腕を解いて起き上がり、勢いよくスレインのコツプに酒を注いだ。数滴が飛沫を上げて飛び散り、縁まで満たされた液体を溢さないようにゆっくり口に運ぶ。酒瓶を見ると、量は半分ほどまで減っていた。酔うのも当然か。

「酔っ払い……」

「ははは、初めて言われた」

けらけらと笑う伊奈帆を見て、こいつも結構大変なんだな、とスレインは思った。

縦社会の軍隊では、伊奈帆のような人間は余程やりにくかろうと思う。どれだけ有能で実績があっても、戦時中であればともかく、現在のような小康状態では力の発揮しようがないのだろう。軍も彼を持て余しているのではないか。

戦争が終わって、軍人をやめても良かったはずだ。伊奈帆が今も軍に居続ける理由は自明で、罪悪感で胸が張り裂けそうになる。

ぐるぐると抜け出せない思考の迷路に迷い込んでいたスレインが我に返ると、

静かだった。時計を見ると、二時半だ。このままだと夜が明けてしまうな、と思
い伊奈帆を見る。さっきまでの行動が嘘のように、静かな佇まいでスレインの隣
に座っていた。膝の上で両手を組んで、弄んでいる指先をじっと見ていた。

「ねえ、死んだら良かった？」

「え？」

急に温度が下がったようだった。伊奈帆はスレインに顔を向けた。その右目は
少し充血していたが、冷たく冴え冴えとした理性の光が見える。まっすぐな視線
を送るその表情からはどんな感情も読み取ることができなかった。

とても静かだ。伊奈帆が口を開く。

「地球に落ちて。僕が撃てば良かった？」

伊奈帆が自身の左側頭部を指で押した。

スレインは暗く、冷たい海を思い出す。ぞっと背筋が凍る。冷水を頭から浴び
せられたかのようにだ。急速に酔いが醒めていくのを自覚し、様々な記憶が脳裏に
フラッシュのように瞬く。

星が降るような空だった。真っ黒い海と冷たい水。痛む内臓と鉄の味。感覚のない指先。何を考えて、陸に上がったのだったか。あんなになっても、まだ何かを探していたのかもしれない。死ぬ理由か、見えない未来か、共に落ちた敵の姿か。拳銃の装填音に顔を上げると、頭から血を流した伊奈帆がいた。右手のトリガーを引けば、銃弾が確実に発射されただろう。

今の伊奈帆の表情は、その時の表情によく似ている。

「…今更だ」

いつまで待っても銃弾はやってこなかった。意図も理由もわからず、何も言うこともできず。それより何より、もうくたくたに疲れていた。生きることにも、死ぬことにも。目で見ること、音を聞くことにさえ疲れていた。ヘリコプターがやってきて、麻酔を打たれ意識を失うとき、ようやく終わった、と安心した。それなのに。

「ほんとと言うと僕は、迷ってたんだ。でも、やめた。どうしてだかわかる？」

伊奈帆の声は掠れて、淡々としていた。伊奈帆の横顔を見る。スレインの場所

からは、閉じられた左目と側頭部に残る銃創が見えた。

「…復讐か？」

目を覚ました時、なぜ生きているのかと心底不思議だった。傷は手当されて、白くて清潔な部屋にいて、服を着ていた。頭の近くでピ、ピ、と電子音がして、この体は何の問題もなく生きていることが分かった。

その時の絶望を思い出す。復讐だったとするなら、成功したと言えるだろう。いや、成功し続けている。

伊奈帆はスレインの返答を聞くと瞼を閉じ寂しそうに笑った。ゆるゆると首を振って、目を閉じたまま天井を仰いだ。

「もう、殺したくなかった」

絞り出すように発声された言葉と、そこ滲み出た深い疲労感に驚き、スレインはじっと伊奈帆を見た。伊奈帆は隻眼で天井を見ている。

きつと違うものが見えているだろう。心の中にこびりついた何か。

「沢山、人が死ぬところを見た。僕自身、沢山の人を殺した。何人殺したかさえ、

覚えていない。分らない。…人が死ぬっていうのは、嫌だ」

それはスレインだって同じだ。いや、それ以上だ。たくさん殺した。戦争だからと、片付けられるものではない。なぜなら、スレインは分かって殺した。仕方なくではない。自分の目的のために、多くの人々を犠牲にした。数字じゃない。こんな命一つで贖うことができると思っていたなんて、驕っていた。失ったものは取り戻せない。償いなんて、できるわけがない。今なら、それが分かる。あのととき死んでいたら、分からなかっただろう。命は重い。奪われることより、奪う方がずっと重い。

「今でも死にたい？」

もしかして、伊奈帆は後悔しているのだろうか。スレインを殺さなかったことを。もしスレインがああ場で死んでいれば、今頃伊奈帆は学校にでも行って、勉強をしたり、友だちを作ったり、一般的な生活をしていただろうと思う。

「僕の希望なんて、無意味だ」

歴史にもしもはない。今更だ。時間は戻らない。選択はやり直せない。失った

ものは戻らない。様々な選択の結果、今がある。

いいも悪いもないだろう、と思う。だって、あんまりだろう。命があって、居場所があって、ここは安全で、お前までいる。こんな日々は、あんまりだろうが。

スレインは、コップを持ちあげ中身を喉の奥へ放り込んだ。まだなみなみと残っていたが、全て飲み干した。テーブルにコップを置こうとして、床に落下した。割れずに転がるコップを視界の端で捉え、鬱陶しい前髪をはらう。

「でも、そうだな。お前とこんな風に暮らしていると、気が触れてしまいそうだよ」

伊奈帆がその言葉に頷いた。

「そうだろうね」

「壊れてしまいそうだ。いや、もう壊れているのかな」

頭痛がする。しかしそれはいつものことなので、アルコールが原因かは分からない。

こめかみを流れる血管がどくどくと音を立てる。心臓の音が急に大きく聞こ

えてきて、体から飛び出しそうだ。ああ、このまま体がバラバラになってしまったらいいのに。スレインは頭の中で飛び散った血や肉片を想像し、伊奈帆に掃除してもらうのは申し訳ないな、と考える。ああ、違う違う。呑み過ぎだ。でもそうか、思考が脱線するのは悪くない。どうして大人が酒を飲むのか分かった。

伊奈帆の右手が伸びてきて、スレインの首に触れた。揃えた指を押し付け、右目は静かにスレインを見据えて。

首を絞めるのか、と思っただけのまま待った。しかし。伊奈帆は触るだけだった。ささやかに圧迫された皮膚の下で、血液が流れる感触。

「脈が速い」

伊奈帆は手を離れた。次に自分の首に手のひらを押し付ける。

「同じくらいかな」

伊奈帆は酒瓶を傾けて、コップに勢いよく注ぐ。かなり零れた。伊奈帆がコップを持ち上げ、透明な液体が腕を伝って肘から滴り、口元から溢れた液体が、顎と首を濡らして鎖骨に溜まる。半分くらいになったコップを伊奈帆はスレイン

に差し出した。

「実は、僕も同じなんだ。おかしいんだよ」

ひそやかに、まるで愛の告白のように告げられた。

そうか、同じか。

スレインは水滴の滴るコップを受け取って、中身を飲み干した。手も口も体の中も酒まみれだ。見ると、伊奈帆が、家を見つけた迷い子のような顔をしていた。

「それでも、生きようよ」

そうか、伊奈帆も取り付かれているのか。自分と同じものに。逃げられない。戦うこともできない。忘れることも。無かったことにすることも。

そうか。

同じだったのだ。自分たちは。

「君を殺してあげられるのは、きっと僕だけだった。でも、僕にはできない。もう、誰も死ぬところを見たくない。君が死ぬところも」

伊奈帆は唇を噛んだ。スレインは、次の言葉をじっと待つ。

「そしてきつと」

瞳が交錯した。ノヴォスタリスクのチャンバーで見た色。その剥き出しの感情と、願いによって鮮やかに彩られた瞳を思い出す。

あの時から。きつとあの時から、僕たちは背中合わせだった。同じ人を大切に想い、失い、僕たちはお互いを探して、戦って、殺し合った。しかしその実、僕たちはこんなにもよく似ていた。まるで同じコインの表と裏のように。

「僕を殺すことができるのは、君だけだ。君は、僕を殺せる？」

「お前、死にたいのか」

返答は予感できたが、スレインは聞いた。伊奈帆は初夏の青空のような晴れやかな表情で笑った。

「君と同じだよ」

そうだと思った。

スレインは、自分の手を見た。皮膚の色は、赤くも青くもない。透明な酒に濡れた両手。横目で見る伊奈帆の手も、同じだった。

自分は今、死にたいわけではない。かといって、生きたいわけでもない。苦しみが欲しいわけでも、安らぎが欲しいわけでもない。欲しいものは分らない。

とりあえず保留にしている。死ぬことを。

「もしさ、何かのきっかけで僕を殺すなら」

伊奈帆は濡れた人差し指でとんとん、と自分の眉間をノックした。悪巧みをする悪戯小僧のように目を細め、口角を引き上げこう言った。

「次はしくじるなよ」

スレインはどう言葉を返せばいいのか皆目見当がつかず、せめてそんな意思がないことを示すために伊奈帆が示した場所を指で撫でてキスをした。

「ああ」

伊奈帆はスレインの肩口に顔を押し付けて鳴咽を漏らして泣き出した。

「早速呑んだか。どうだった」

翌朝、伊奈帆が会議室への廊下を歩いていると、後ろから声を掛けられた。振り向くと、鞠戸孝一郎大尉が小走りに駆け寄ってくる。何とか方向転換をして敬礼をするが、伊奈帆の動きにキレはない。

「ふらふらだな。十メートル後ろからでも分かったぞ。呑み過ぎだな」

鞠戸がにやにやと笑って伊奈帆の肩をぽんと叩いた。今の伊奈帆にはそのささやかな衝撃だけでも大砲を喰らったように感じる。ふらふらとよろけて、痛む頭を押さえた。

「…頭が痛いです」

起きてから、頭の中で除夜の鐘が鳴っているようだ。血液が鉛になってしまったのではないかというくらい、体が重い。内臓が脱水中の洗濯機のようにぐいぐ

いと胃の中をミックスし、今の伊奈帆の気持ちを一言でいえば早く帰って寝たい、に尽きる。

「二日酔いか。誰でも最初はそんなもんだ。二人で呑んだのか」

「気が付いたら夜が明けてました」

そう。昨晚はとにかく酔った。曖昧な記憶も多いが、あんなことまで話して自分もどうかしていた。嘘がないだけ余計に悪い。由々しき事態だ。朝起きて昨夜のことを思い返すにつれ、これが酒の勢いというものか、と頭を抱えた。重い足取りでリビングへ行くと、先に起きていたスレインは氣にした風もなくおはよう、と挨拶を口にした。

「それはそれは。長い一日になりそうだな」

食器などはすっかり片付けられて、洗濯機が壁の向こうでごうんごうんと音を立てていた。キッチンでコーヒーを淹れていたスレインは、伊奈帆に「調子はどう？」と聞いてきた。なんだか立場があべこべになったみたいで変な感じだったが、悪くないと思う。食欲がなかったので、水を飲んでコーヒーは香りだけ摂取

して出てきたのだ。

「そういえば、ガンダムって何ですか」

スレインに聞いても知らなかった。ついでのつもりで聞いてみる。鞠戸は目を輝かせて話し出した。

「ガンダムは、ロボットアニメだ」

「アニメ」

いつの時代だろう。少なくとも、自分は知らない。

「カタフラクト乗りの何割かは、ガンダムに憧れて軍人になったんだぞ」

「憧れて。へえ」

兵科教練が当たり前の世代である伊奈帆にとって、カタフラクトの操縦は国語や数学のような一教科に過ぎない。語気の熱さについていけない。

「ザクって何ですか」

「赤色は、シャア専用なんだ」

「シャア」

「他は、緑色だ」

「緑色」

スピーカーのように鞆戸の言葉を繰り返す伊奈帆は、この会話を始めたことを後悔していた。どうでもいい単語をインプットして、頭がさらに重くなった気がする。

「でも、鞆戸大尉のくれたザクは黒かったですけど」

「そのざくじゃない」

どうも会話が噛み合わないのは、二日酔いの所為ばかりではない気がする。

「美味かったか？」

あまり味を覚えていないが、きっと美味しかった、と思う。不味かったら、空になってないだろうから。

「ええ。またお願いします」

二日酔いは辛い、いい夜だった。…うん、いい夜だった。

「おいおい、結構高いんだぞ」

「ありがとうございます」

「ちゃっかりしてゐるなあ」

今度はもう少し小さいコップで飲むことにしよう、と心に決めて、伊奈帆は会議室の扉をノックした。

▷コーヒーを淹れるはなし

夕食後、ソファでタブレットを操作していた伊奈帆はふと気づいて顔を上げた。香ばしい香りが鼻孔をくすぐる。

「コーヒー？」

「ああ」

キッチンから返事が聞こえた。伊奈帆はソファの背にもたれてそちらを見やる。スレインの後頭部が見えた。

「二人分ある？」

「一応。…眠れなくならないか？」

「コーヒー一杯くらいどうってことない。ねえ、僕に分、砂糖入れて」

「ミルクは？」

「いらない」

会話は途切れたが、なんとなく視線を外し損ねて、伊奈帆はコーヒーを淹れるスレインの後ろ姿を見ていた。蛍光灯の光を受けた金髪は項を隠して肩に散り、毛先が四方八方に遊んでいる。

髪が伸びたな。短くするにはどうしたらいいだろう。人の髪なんて自分は切ったことがない。できるだろうか。と伊奈帆は考えた。

「ほら」

気がつくと、マグカップを両手に持ったスレインがソファの背に立っていた。伊奈帆が受け取ろうと手を伸ばす前にスレインは片方のマグの中身を一口飲んで、小さく頷きそれを差し出した。

「…ありがとう。なんでちよっと飲んだの？」

スレインは首を傾げて自分のコーヒーを口に運んだ。そちらには砂糖は入れていないはずだ。彼はいつもコーヒーをブラックで飲むし、紅茶もストレートだ。「おいしくできてるかなと思って」

目を丸くしてそんなことを言うものだから、伊奈帆は返す言葉をなくし手の

中のカップに顔を近づけた。湯気が頬を撫でて、黒っぽい香りが強くなる。口に含むと、濃くて、苦くて、酸っぱくて、ほんのり甘い。

「おいしいよ」

スレインは目を細めて笑った。伊奈帆はもう一度カップを傾け飲んでみる。斜め上の笑顔がちらついて、味なんてもうよくわからない。しかしもう半分くらいになったマグカップの中身がなくなればいいのに、と思った。

三杯分のおまじなご[2018-06-10]

▷留守番をするはなし

チン、という軽い電子音。アルミの小さな扉を開けると、きつね色の香りが溢れ出した。

「ちょっと焦げたか」

濃い色目のついた食パンをスプーンと一緒に皿に乗せ、冷蔵庫を開ける。同じ形の瓶が二つ。赤いのと、橙のと。

普段なら、自分は赤い方の瓶を取る。そちらの方が好みだからだ。しかし、なぜか今日はもう一つの方にしようか、と手を伸ばした。

プルルル、と電子音が聞こえた。電話だ。皿と瓶を両手に持ってリビングのテーブルに向かう。どんどん大きくなる着信音はあいつの小言みたいだ。朝食を置いて、スレインは通話ボタンを押した。

「もしもし」

『おはよう。生きてる？』

「ああ」

『朝ごはん食べた？』

「今から」

『そう。邪魔したね。明日帰るから。多分十九時くらい』

「ああ」

『買い物して帰るよ。何食べたい？』

「何でも：お前が食べたいものでいい」

『そう』

「界塚」

『どうしたの？』

「：いや、なんでもない」

『：じゃあ、またね』

「うん」

声の聞こえなくなったスマートフォンを見る。これが鳴るのは三日ぶりだ。声を聞くのも。前は、確か夜だった。

「帰ってくる、か」

スレインは壁にかかったカレンダーを見る。伊奈帆が任務で出て行って、もうひと月だ。場所は知らない。数日おきに電話がかかってくるが、時刻は不定期だ。いつも同じ声に聞こえるが、ちゃんと寝ているのだろうか。

椅子に座って、トーストを齧ってみた。パン屑が皿の上にパラパラと散らばる。「冷めたな」

八分目までが満たされた小瓶の蓋を開け、スプーンで中身をすくい取りパンに落とす。ひと匙。ふた匙。伸ばさずそこに齧り付く。とても甘くて、少し苦い。

「あいつ、今どこにいるんだ」

向こうもそうかもしれないが、こちらが気じゃないんだぞ、と瓶にスプーンで八つ当たりする。コン、と鈍い音がした。

ママレード・ジャム[2018-06-10]

▷半分このはなし

今日は、朝からいい感じだ。

まず、卵を割ったら黄身が二つ。せっかくだから、目玉焼きにして醤油で食べた。

次に、職場までの交通機関が示し合わせたように噛み合った。信号も全部青。そして、今日は会議が一つもない。自分の仕事に専念できる。十時頃、同僚が出張の土産と言ってクッキーをくれた。

電話も鳴らない。自分が電話口に出ることは稀だが、気が散らず集中できる。昼食は社員食堂で食べた。ランチを頼むと、デザートをおまけしてくれた。プリンが二つ。

定時に退社する。帰り際に、同僚が家で採れた、と柿をくれた。四つ。

帰りのバスでふと思い立ち、途中下車して寄り道する。

そういえば、鍵を忘れた。インターホンを押すと、足音が聞こえてきた。鍵を回す音と、ドアノブが回る音。扉が開いた。

「ただいま」

「おかえり。…それは？」

「柿をもらった。夕飯の後に食べよう」

伊奈帆は白いビニール袋を差し出す。腕まくりした細い腕が伸びてきた。

「あと、これは僕から」

猫目が丸くなり、え、の形に口が開いた。

「どうして？何か、特別な日だったか？」

柿の袋を腕に提げて、彼は後から渡された直方体の包みに視線を落とした。

「今日はいいいことが沢山あったから、そのお裾分け」

スレインが笑った。

「朝の卵のことか？お前、本当に卵が好きだな」

今日はステーキだから、丁度いい。焼き加減は？　ちょっと焦げた。…そんなことを言いながら、二人並んでリビングに入る。明るい照明に、火を使った調理の匂い。少し香ばしすぎるが、焦げ臭くはない。味はそこそこの期待できそうだ。

朝食の目玉焼きは、少し小さいけれど嬉しかった。二人で半分こするのは、なんかいい。

テーブルワイン[2018-10-26]

▷あたたかい部屋のはなし

寒いのは嫌いだ。

手足が冷えてかじかむし、北風のおこす砂埃が目痛い。重ね着で着膨れするし、日の出は遅くて日の入りは早い。

でも、冬が嫌いってわけじゃない。

まず、コンビニの肉まんが美味しい。焼き芋もおでんも炬燵の蜜柑も。冬の味覚に舌鼓を打つ時は、冬もいいもんだ、と思う。

それと、星が綺麗だ。寒いからあまり夜風は好きじゃないけれど、澄んだ空に広がる星の海はあの頃を美しい姿で投影してくれる。だから、冬も悪くないと思う。

そして、お風呂。湯船に肩まで浸かると、じんわりと温かい。仕事の疲れとか、

社会の理不尽とか、時々頭を過る種々多様な不安とか。そんなのが全部お湯に溶けだして、栓を抜くと洗い流された心地になる。

あとは、そう。これは最近知ったんだけど。

「ただいま」

玄関で靴を脱ぎ、通路を進む。パタパタというスリッパとフローリングの接触音が大きくなる。リビングの扉から、スレインがひょっこり顔を出した。

「おかえり：それ、何だ？」

伊奈帆は右手のビニール袋を手渡した。

「焼き芋。食べたことある？」

好奇心で碧の目が輝いた。節くれだった手が中身を取り出し、巻き付いた新聞紙を剥ぐ。

「焼いた芋？こんな色、初めて見た」

「サツマイモ。後で食べよう」

うん。と頷くスレインの後に続いて、ドアの中に足を踏み入れる。明るくて、暖められた部屋の温度に笑みが浮かぶ。

冬は、嫌いじゃない。

あったかい部屋に帰るっていうのは。そこに待っている人がいるっていうのは、いいものだ。

「あ、カレー？」

「今できた」

「いい匂い。焦げてないね」

スレインがうるさい、と口を尖らせた。蓋を取った鍋から白い湯気が雲のように浮かび上がる。よい香りに、腹の虫がぐうと鳴いた。

寒いのは嫌いだ。けれど。凍える冬も、二人でいれば寒くはない。

冬の日[2018-11-1]

GIFT

—
冬の贈り物。

[2017-12-20]

「はいこれ。どれがいい？選んで」

冬の風に鼻の頭を真っ赤にした伊奈帆が、玄関先で右手を差し出した。スレインは、光沢のあるぺらりとした紙を受け取る。その紙面に目を滑らせて呟いた。

「ケーキ？」

伊奈帆は靴も脱がず頷く。もこもこと巻き付けたオレンジ色のマフラーを指で押さえ言った。

「さっきそこでもらった。もうすぐクリスマスだから」

そういえば、クリスマスまであと五日だ。本来はキリストの生誕祭だが、この国では信仰によるよりも、パーティーやプレゼントに便乗するお祭り要素が強い。スレインもそれほど信心深いほうではないし、伊奈帆の信仰は不明だ。しかしスレインは、伊奈帆が収容当時、事あるごとに季節の行事を引き合いに様々な差し入れを持ち込んでいたのを思い出した。存外イベント事が好きらしい。

玄関先で、せっかくだから、頼もう。どれがいい？と聞きながら、伊奈帆は寒

そうに腕を組んで左右に体を揺らしている。スレインは紙面に並ぶケーキの写真を見た。かわいらしく飾りつけされたガトーフレーズ、ガトーショコラ、チーズケーキ、ブッシュ・ド・ノエル、オペラ、フルーツタルト…、見ているだけで胸焼けしそうだった。

「それでも…」

「どれでもいいは嬉しくない。遠慮しないでいいから。好みとかないの？」

伊奈帆が一度くしゃみをした。

「お前は？」

「ええと、…これかこれ」

伊奈帆が指さしたのは、イチゴのデコレーションケーキとブッシュ・ド・ノエルだった。どちらもかわいらしいサンタクロースの人形とチョコプレートが飾り付けられて、小さい子どもが好きそうなデザインだ。

「これでいい」

「そう」

伊奈帆は胸ポケットのボールペンを取り出しブッシュ・ド・ノエルに大きく丸をつけて、もう一度扉を開けた。外の冷気が吹きこんで、スレインも一度くしゃみをした。

十二月二十四日。サイバネティクス研究所。

「界塚少尉」

デスクで仕事をしていると、来客だと知らされた。伊奈帆が応接室へ行くと、ソファに腰かけたダルザナ・マグバレッジが微笑んだ。戦時中は世話になった相手で、戦後も何かと世話を焼いてくれている。伊奈帆は敬礼した。

「艦長。ご無沙汰しています」

ソファを勧められ、ダルザナの向かいに腰かけた。彼女は目の前の紅茶を一口飲み、口を開く。さつき同僚がポットで入れた、インスタントの安物だ。香りも何もないが、彼女は品良くカップを置いて聞いた。

「その後、どうですか」

いつもの事務的な口調だが、どこか柔らかない。ダルザナは伊奈帆がスレインの出所と監視役に尽力した旨を心得ており、何かと力を知恵を貸してくれた。

「まあまあ、です」

少し言葉を探し、数秒後そう言った伊奈帆をじっと見てダルザナは頷いた。それは何よりです。そう言って、足元に置いてあったらしい紙袋を持ち上げ伊奈帆に差し出す。

「これを飾るといいでしょう」

紙袋の上部から中をのぞくと、赤と白、緑が見えた。

「花…？」

ダルザナはソファに深く背を預け、両手を膝の上で組む。

「今日は、ケーキくらい食べるのでしょうか？テーブルに、花があってもいいでしょう」

どうやら、これはクリスマスプレゼントらしい。以前も、引っ越し祝いやら何やらで食器やリネンをもらった。折り目節目に何かと物をくれる。伊奈帆はありがたく受け取ることにした

「いつも、ありがとうございます」

「メリークリスマス」

ダルザナはそう言って、紅茶を飲み干し立ち上がった。

「界塚弟」

地球連合軍本部のエントランスで前方から聞こえてきた自分と呼ぶ声に、伊奈帆は足を止めて背筋を伸ばした。数メートル先から、薄着の鞠戸孝一郎大尉が小走りに駆け寄ってくる。伊奈帆は手袋とマフラーを外し、目の前まで来たとこ
ろで敬礼した。

「鞠戸大尉。あの時はどうも」

鞠戸はふう、と大きく息を吐いてにやりと笑った。

「いいってことだ。それより、これをやる」

胸の前に差し出された紙袋を受け取る。光沢のある丈夫そうな紙袋は、細長い。

「これは？」

中を覗くと、想像通り瓶が入っていた。金色で、リボンがついている。鞠戸が自身の頬を掻いた。

「せっかくのクリスマススイブだ。羽目を外してもいいだろう」

鞠戸には前にも酒をもらったことがある。興味本位で飲み、ひどい目に遭った。

「僕は弱いんですが」

ははは、と笑って鞠戸は伊奈帆の背中を叩いた。大きな手の平だ。

「そろそろ、酒との付き合い方を覚えないな」

「大尉には言われたくないですね」

「そりゃそうだ」

もう一度声を上げて笑って、鞠戸は茶目っ気のある顔で敬礼の姿勢をとった。

「まあ、なんだ。健闘を祈る。メリークリスマス」

「なおくん、こっちよ」

ユキと待ち合わせをしていた連合軍のカフェは、休憩中の職員や来客で三割ほど席が埋まっていた。奥の方でユキが立ち上がり手を振ったので、テーブルや人を避けながらその席に辿り着く。席に着くと店員がすぐに水を持ってきたので、ココアを注文した。荷物を足元に置き、マフラーと手袋を丸めて背中の後ろにまとめる。

「ユキ姉。しばらく」

ユキは明るい表情で微笑んだ。姉のこの笑顔を見ると、安心する。

「どう？元氣してる？」

「うん。ユキ姉も、元氣そうでなにより」

もう、他人行儀ね。そう言いながら、ユキはにこにこ嬉しそうだ。こうして顔を合わせて会うのは半月ぶりくらい。その頃は、まだこんなに寒くなかった。飲み物は、紅茶とカフェラテだったか。ユキが伊奈帆の足元の荷物を屈んで見た。大きさと形の異なる二つの紙袋が椅子の足に寄せて置いてある。

「あら、プレゼント？誰から？」

「これはマグバレッツ艦長と鞠戸大尉」

今日はこの後、ケーキとチキンも買っていくんだけど。そうぼやく伊奈帆の前に、ウエイターがココアを持ってきた。ふわりと湯気の立つそれを両手で包み、伊奈帆はあったかい、と呟く。そのままずず、と啜ると、甘さ控えめで、濃いカオの風味がした。

伊奈帆は、もう少し甘い方が好みだ。伊奈帆のほとんど変わらない表情からでもユキはそんなのはお見通しのようで、くすりと笑って伊奈帆の前に砂糖壺を寄せる。見ると、ユキの頼んだものもココアだったようだ。湯気がなくなり、半分以上減っていた。

「荷物を増やして悪いわね。はい、これ。クリスマスプレゼント」

ユキが中腰でテーブル越しに紙袋を持った手を伸ばす。茶色い紙袋を受け取ると、急に体が軽くなったようだ。自分はどうかやら、とても嬉しいらしい。伊奈帆は自分の心の動きをそう分析しながら、紙袋を自分の膝に置いた。中身を見下

ろす。

「ありがとう」

「二人で仲良く分けるのよ」

ということは、スレインの分も用意してくれたらしい。テープで止められている袋の口からは、真っ白いギフトボックスが見えた。リボンが、赤と青の二色。

「…ありがとう」

ユキは小さく首を傾げて、それから満面の笑みで頷いた。伊奈帆は、姉のこういうところが小さい頃から大好きだった。

「メリークリスマス。なおくん」

伊奈帆はありがとう、ともう一度返事をして、砂糖壺から掬った砂糖を、温かいココアに入れた。

「ただいま」

「おかえり」

インターホンが鳴ったので、スレインは玄関を開けた。目に飛び込んだのは、両手を荷物でいっぱいにした伊奈帆。どうやってインターホンのボタンを押したのだろうか。扉を閉めると、伊奈帆は玄関先で一つ一つスレインに手渡した。

「これ、ケーキ」

ピンクの箱を受け取る。クリスマスリースのシールが貼ってあった。

「あと、チキン」

ビニール袋に、バケツ型の箱が入っている。しっとりと温かい。箱は湿って柔らかそうだ。

「今日は早いな」

いつもの伊奈帆の帰宅より、一時間ほど早い。まだ部屋が暖まっていなかったが、とスレインは言った。伊奈帆は口をほころばせた。

「クリスマスだから、早く帰れて。…あと、これももらった」

腕にぶら下がっていた細長い紙袋を受け取る。ずしりと重い。中の箱の英字を読み取る。

「シャンパン？お前、飲めるのか？」

飲める、と固い顔で頷いた伊奈帆だが、スレインは眉を寄せた。前に、一緒に酒を呑んだことがある。その時の伊奈帆は酔って散々で、盛大に二日酔いをしてた。まあ、伊奈帆が飲みたいというならしょうがない。両手がいっぱいになったが、さらに伊奈帆が肘にかけていた二つの袋を持ち上げる。

「あとこれと。それと、これはユキ姉から。プレゼントだって」

「いろいろと、貰ってきたな」

伊奈帆はああ、重かった、と言いながら解放された肩と手首をぐるぐる回した。「ユキ姉からは、二人で分けてねって言われた。君の分もあるみたい」

伊奈帆は靴を脱ぐと、珍しく鼻歌を歌いながら廊下を歩き出した。スレインは肘から先に荷物をかける。

結構重い、と両手で持ち直し、その後ろに続いた。

伊奈帆がリビングに入ると、テーブルにはすでに皿とカラトリが並べられていた。どこから用意したのか、キャンドルまである。伊奈帆がコートや上着、ネクタイをハンガーにかける間、スレインは、キッチンでチキンやケーキを皿に盛り始めた。お互い、こういうところは几帳面なので、ストレスは少ない。

「準備してくれたんだ」

「…暇だったから」

スレインがダルザナからもらった紙袋の中を取り出した。あっと息を呑む気配が分かった。

「ポインセチアだ」

顔の高さに持ち上げて、近くで眺め香りを嗅いでいる。嬉しそうな顔だ。伊奈帆は食器棚からワイングラスを取り出した。

「それ、クリスマスによく見る花だね」

「花言葉は、聖夜。色も赤、緑、白のクリスマスカラー。クリスマスによく見るのは、そういう理由だ」

スレインがいそいそとテーブルの中央に花を置いた。霧吹きで湿らせたらしく、水滴が葉や花びらできらきらと光っていた。そのまま料理運びにキッチンに戻っていくスレインの後ろ姿を見送る。心の中で艦長に感謝しながら、これからは時々花でも飾ろう、と伊奈帆はぼんやり考えた。

伊奈帆は椅子に座り、ユキからもらった紙袋から中身を出した。曲線を描く白いギフトボックスが二つ。赤いリボンと青いリボンで色分けがされた、少し大きさが違う箱を持ち上げる。どっちがいい？とスレインに聞いた。スレインは両手に皿を持って近づき、テーブルに置いて遠慮がちに言う。

「お前が先に選べ。お姉さんからだろう」

それもそうか、と赤いリボンのついた大きい方の包みを選び、小さい方をスレインに手渡す。スレインが両手で受け取り、伊奈帆の向かいに座った。シュル、とサテンのリボンをほどいて箱を開けた。

「マフラーだ」

伊奈帆の開けた包装紙の中身は、クリーム色のマフラーだった。

スレインを見ると、両手に芥子色の手袋を持っている。伊奈帆は、もう一度手の中のマフラーを見る。

「交換して。いい？」

伊奈帆の提案に、スレインが目を大きくした。

「いいけど、珍しい。どうしたんだ？」

「別に……」

スレインは手袋の向きを合わせて重ね、伊奈帆に腕を伸ばした。テーブルの上で、贈り物を交換する。伊奈帆はそれを大事にテーブルに置いた。

「ありがと。じゃあ、乾杯しよう」

シャンパンの瓶を持ち上げる。ぎゅ、ぎゅ、とコルクを回す。

パン、と栓を抜き、伊奈帆は琥珀色の液体をスレインの前のグラスに注いだ。

「もう、三年か」

乾杯の後、言葉少なに食事を続けていたスレインがグラスを置いて言った。このグラスは、随分前に艦長から引越し祝いと称してもらったものだ。チューリップ型のグラスに細かな模様が刻まれていて、ステムは青い硝子でできている。ふっくらとした曲線を描く青硝子を、スレインの白い指先がなぞった。なんとなく目で追っていると、人差し指と小指にさかむけができているのに気が付いた。「そうだね」

伊奈帆はグラスを置いて、今年のクリスマスを思い返す。こんな気の利いたグラスや、花や、キャンドル、チキンもケーキも何もなかった。そもそも、スレインはまだここにいなかった。伊奈帆は一人でこの部屋に帰ってきた時のことを思い出す。一人の部屋っていうのは、嫌いだ。しかもそれが寒くて暗いなんて。

目の前の光景に意識を戻す。明るく温かい部屋。ケーキとチキン、瑞々しい花。泡の上る立ち昇るシャンパンで満たされた美しいグラスと、目の前に座るスレ

インの安らいだ顔。

うん、悪くない。今夜は素敵だ、と伊奈帆はケーキをナイフで切り分け、スレインと自分の前に置いた。

「不思議な感じだ」

自分のケーキの脇に置かれたサンタクロースを指でつつき、スレインが微笑んだ。こんな柔らかい表情を見せてくれるようになったのはいつからだっかな、と伊奈帆は思った。

「何が？」

「お前とこうして、クリスマスケーキを食べているのがさ」

「…まあね」

「前に、クリスマスに面会に来たことがあったろ」

「ああ。…その話はやめよう」

拗ねたような声を聞いて、スレインはくすりと笑った。

「お前、面会室でクラッカーなんて鳴らすものだから、職員が血相変えて」

あれは確か一年前のクリスマスだ、とスレインは記憶を辿る。面会室の扉を開けると乾いた破裂音が響いた。ついに撃たれたか、と思ったのも束の間、エマージェンシー音をバックにバタバタとした複数人の足音がやってきて、スレインは面会室から羽交い絞めにされて連れ出されたのだった。独房に戻り自分の体をよくよく見ると、頭の上から紙テープやら紙吹雪やらに覆われていて、ああ、あれはクラッカーの音だったのか、と合点した。次の面会は一か月ほどしてからで、現れた伊奈帆は始末書を書かされた、遊び心が通じない。とげんなりした表情で差し向かいに座ったのだった。

「あれは面白かった」

伊奈帆が無然とした顔でケーキを口に運んだ。咀嚼して飲み込み、ふう、とため息をつき両手を頭の後ろで組む。それはやけに子どもっぽい仕草に見えて、そう言えば年下だったつけ、とスレインは伊奈帆の鼻の頭を見た。アルコールのせいか、ほのかに赤い。

「昔のことだよ。そのせいで、せっかくのケーキを食べそびれたんだ。しばらく

は面会許可が下りなくて、そうしている間に君の誕生日も過ぎちゃったし。散々だったよ」

スレインは天井から壁から、部屋を見渡した。

伊奈帆に連れられこの部屋に来たのは、まだ肌寒い春の日だった。来た時にはすでに伊奈帆が移り住んで半年ほど経った後で、物は少ないが生活感の滲み出たりビングはほのかに醬油の香りがしたのを覚えていた。

自分の身柄を伊奈帆が引き取ることになると思ったときには、呆れたものだった。変わった奴だとは思っていたが、命のやりとりをして自身に瀕死の重傷を負わせた相手と一緒に住むとはお人好しや変わり者を通り越して酔狂だ。しかしどんなに食ってかかってでも伊奈帆はもう決まったことだから、と相手にしなかった。気持ちの整理がつかないまま始まった伊奈帆との共同生活は、もう八か月になる。

暖かい部屋で、清潔な服を着て、ご馳走にケーキに、シャンパンまである。それに、自分のために贈られたプレゼントも。一緒に過ごす人も。まるで絵にかい

たようなクリスマスの夜だ。こんなクリスマスは父親との思い出にもない。

小さな頃。いつも、クリスマスの時期にはテレビや街並みの幸せそうな家族を寂しい気持ちで眺めたものだった。それが今ではどういうわけか、クリスマスイブをあゝの界塚伊奈帆と二人きりで過ごしている。さっき、両手を荷物でいっぱいにして帰ってきた伊奈帆の姿。きつと、世の中のお父さんたちはあんな風に家に帰ってくるんだろうな。そう考えて、スレインは不思議な心地になった。

この花も、シャンパンも、伊奈帆のために誰かから送られたものだ。ケーキとチキン、伊奈帆が買い求めて、彼の姉からはクリスマスプレゼントが贈られた。きつと、この部屋で、自分と二人で過ごす彼のために。

「美味しい？」

その声に顔を上げると、伊奈帆は顔を赤くして頬杖をついていた。瞼が重そう。見ると伊奈帆の皿は綺麗に平らげられている。スレインはまだ半分以上残っているケーキを食べることにした。甘酸っぱい苺とふわふわした生クリームは、クリスマスの幸せを象徴するような甘い味がした。

「うん、美味しい」

スレインがそう言うと、伊奈帆は満足そうに頷いた。

「ねえスレイン、ちょっと歩かない？」

食事を終えて洗い物が終わる頃、伊奈帆がキッチンにひょっこり顔を出した。厚手のジャンパーを着て、マフラーをしている。両手には、スレインのためのジャケットとユキからの贈り物であるマフラーを持っていた。その手は芥子色の手袋に包まれている。

「この寒いのに？」

酔っているようだし、休んだら、とスレインが言い、食事の後伊奈帆はしぶしぶスファアに横になっていたのだ。すぐに寝息が聞こえてきたから、もう今夜は起きないだろうと思って毛布を掛けてやっていたのだが。

「うん」

伊奈帆の顔を見ると赤みは半分収まり、眠気もなさそうだった。布巾で手を拭き差し出されたジャケットを羽織ると、マフラーで首をぐるぐる巻きにされた。なんだか嬉しそうな伊奈帆の表情に、なるほど、これがやりたかったのかとプレゼントを交換したときの様子を思い返す。部屋の中なので暑い。首元を緩める。

「いいけど、お前いいのか。寒がりなのに」

窓には結露ができて水滴が滴り落ちている。外はかなり寒そうだ。

「いいんだ」

伊奈帆がくると背を向けたので、スレインはその後に続いた。

「綺麗だ。知らなかった」

大通りに出ると、歩道に沿って光の木が列を成していた。その先には、一際輝く巨大なクリスマスツリーが設置されている。伊奈帆がその方向に足を進めた。
「イルミネーションだよ。年末だからね」

「これを見せるために？」

「まあ、そんなところ」

伊奈帆がぶっきらぼうに返答する。照れているのかもしれない。スレインは、からかってもいいが、今日のところは素直に好意を受け取ることになろう、と微笑んだ。

「…初めて見た。綺麗だ」

深夜だが、人通りは少なくない。すれ違うのは二人組ばかりだ。通りのコンビニやレストランからクリスマスソングが聞こえてくる。そういう店の前に差し掛かると、明かりで吐く息が白いのが分かった。寒がりの伊奈帆が、クリスマスのイルミネーションを見るためにわざわざ連れ出してくれたのがこそばゆい。

スレインは木々の灯りを見上げる。その向こうの星空は見えないが、電飾の光はあたたかく心を満たした。

「光の中を飛んでいた」

自分の口から出た言葉に、スレインはぎょっとした。思わず足を止め伊奈帆を見ると、視線がかち合う。伊奈帆は静かな瞳で頷いた。

「そうだね」

伊奈帆は、僕も同じことを考えたよ、とゆっくり一步踏み出した。スレインは肩が当たるくらい、伊奈帆のほんの少し後ろからついていく。言葉が次々舌に乗った。

「：光を、綺麗だと感じたことはない。アルドノアの輝きも」

揚陸城から見た光。タルシスから見た光。月から見た光。自身を包んだ光。たくさんの光の中を飛んだ。そして落ちた。見上げて、地上の灯りが賑やかで、今、星はよく見えない。小さく見える月は、歪な形をしている。

「でも、これは綺麗だ」

チカチカと、単純な点滅を繰り返す電飾に手を伸ばす。はっと触れる前に手を引っ込めたが、満足だった。

「どうして？」

伊奈帆が聞いた。いつもの声だった。平坦で、穏やかで静かだ。

「多分。…いや、よく分からないな」

何も見えない暗闇は怖かった。でも、光の下に晒されるともっと恐ろしいものが見えてしまった。光は力だった。影は恐怖だった。暗闇はいつしか安らぎになった。

光の下では、なにもかもがさらけ出されてしまうから。暗闇の中では見なくて済む。自分の姿を。たとえ暗闇が、孤独と恐怖を強めようとも。

「小さい光だから、優しいのかもしれないね」

「そうかな」

伊奈帆がとても優しいことを言ったので、スレインは俯いてしまった。つま先を見ながら、子どものように路面のブロックをふみふみ歩く。伊奈帆が歩調を合

わせて横に並んだ。人を避けようと、肩が軽くぶつかる。

「夏になったら、蛍を見に行こう」

「ホタル？」

スレインにうん、と頷いて伊奈帆は聞いてもいないのに蛍の解説をはじめた。伊奈帆はジェスチャーを交えて発光器官がどうか、熱心に蛍の説明をしている。その横顔を眺める。

顔は童顔だがそこそこ格好いいし、頭は抜群によくて有能、軍神という二つ名を持つ彼が、いまいち垢抜けないのはこういうところだな、とスレインは若干呆れながら話を聞いた。

「きっと、君は好きだと思うよ」

「ふうん」

想像上の発光する昆虫を思い浮かべる。綺麗かどうかはよく分からない。伊奈帆が、あ、と声を上げた。すれ違うカップルがちなりとこちらを見た。私服だが、学生風の二人だ。目が合って、なぜだか頬が熱くなる。

「でもその前に、桜を見にいこう」

「サクラ？」

伊奈帆が今度は桜について説明しだした。少し聞いて、ああ、チェリー・ブロッサムのことか、と遠い昔に父と見た薄紅の木々を思い出す。あれを見たのも、確か日本だった。

「今年は見れなかったけれど、来年はお花見に行こう」

「オハナミ？」

日本では、桜の木の下で宴会をするんだ、と聞いて、規模の大きいピクニックのようなものかな、とスレインは想像した。まさか昼日中の公園や堤で、酒を飲んだりカラオケに興じたりということは思いもよらない。

「お弁当持ってきてさ」

「お弁当……」

スレインは、面会室に何度も持ち込んでいた弁当箱を思い出し出していた。

伊奈帆の作るお弁当には、絶対にだし巻き卵が入っている。あとおにぎりとい

う三角形のライス。あとは器用に調理された色鮮やかな副菜が詰められているに決まっている。

何度もいらないとつき返したが、根負けして食べてしまっただけはどんどん弁当箱のサイズが大きくなっていったものだった。一番大きかったのは正方形で三段になっていた。

あれを使うのだろうか。二人には、少し多すぎやしないか、と当時と同じ感想を抱く。

「春は桜、夏は蛍、秋は紅葉を見に行こう。それで、来年の冬も、こうして街を歩こう」

スレインは収容所から出たとはいえ、自由の身になったわけではない。体の数か所に埋め込まれたマイクロチップで常に生体情報がスキャンされている。こうして一緒に歩いても、どこにいるか、誰といるか、どんな話をしているか。それらは全て顔も知らない何人もの軍人によって監視されている。スレインには、伊奈帆が自身をそういう不自由な境遇に甘んじてまで自分の隣にすることがよ

くわからない。一緒にいることで、いろいろなものを犠牲にしているはずだ。学校に行くこと、家族と暮らすこと、好きなことを何にも縛られずに行うこと、普通の生活を送ること。

こうしてクリスマスにクリスマスらしいことをするのは、無理に普通を装っているような気もする。そして、今話した未来の約束があまりに普通でささやかで、スレインは伊奈帆が何かを必死に取り戻そうとしているように思えた。

「どうしたの」

立ち止まったスレインに伊奈帆は振り向く。重ね着のせいでもこもこした上半身と、ぐるぐる巻きのマフラー。ストレートのジーンズに少し年季の入ったスニーカー。幼さの残る顔。年相応の恰好をした伊奈帆は、普通の、どこにでもある学生のようなだ。その左目の眼帯がなければ。髪に隠れた銃創がなければ。そして、あまりに鋭く澄んだその眼差しがなければ。

「なんというか、お前は。…馬鹿なんだな」

スレインは白い息とともに言葉を吐き出した。伊奈帆がむっと眉を数ミリ動

かす。些細な表情の変化だが、スレインは彼が人並みの喜怒哀楽を持っている、案外子どもじみた反応を知っている。

「どうしてそういう結論に達したのか、君の思考が分からない」

伊奈帆に肩を並べたスレインは一つ大きく息を吸って、はあ、と聞こえるように息を吐く。

「そういうところだ」

急に伊奈帆が足を止めたので見上げると、目の前に、五メートルほどだろうか。青い電飾で輝くツリーがそびえ立っている。青い光はアルドノアの輝きを思い起こさせる。スレインは知らぬ間に胸で手を握っていた。光量も何も似ても似つかぬ輝きだが、青い色は綺麗だがおそろしい。

並び立った伊奈帆の指が、スレインの小指に触れた。ぴく、と強張ったが、伊奈帆はスレインの手をそのまま握った。

手袋越したが、人のぬくもりがした。スレインは空いた左手で伊奈帆が巻いてくれたマフラーを引き上げ、ぼそぼそと言った。

「…でも、お前らしい」

ぐ、と指に力をこめると握り返された。二人は手を繋いだまま歩いていく。

スレインは、伊奈帆について小高い丘のゆるやかな斜面を登る。草の匂いがした。

ここに来るまで、随分歩いた。大通りから逸れ、細い路地を何度も曲がり、橋を渡り、舗装のない土道を下った。次第に人が減り、建物が少なくなり、明かりが減り、音が遠ざかった。

聞こえるのは、空気が冷える音。夜の音。心臓の音と息を吐く音吸う音。静かな音が肌と耳を刺した。久しぶりに感じる草と土の感触に、スレインは足をとられそうになりながら付いて行く。数歩前を歩く伊奈帆はぐんぐん迷いなく足を踏み出す。と、伊奈帆が歩調を緩めて半身を向けた。

「こっち。暗いから気を付けて」

「何があるんだ？」

息を切らせながらスレインがそう聞くと、伊奈帆はわざわざ振り返って人差し指を唇に当てた。暗くてほとんど見えない顔の向こうは真っ暗だ。丘の上はまだ見えない。前にも後ろにも、人家も街灯もない。

夢の中にいるようだ。

「内緒。ほら」

「…うん」

無表情に見えるが、どこか楽しそうな伊奈帆に意地を張る気にもなれなくて、差し出された手を素直に握る。手袋越しに、指が曲がり握られる感触がくすぐったい。なんだか今日は、手を握ってばかりいる。

「ちょっと、目を瞑って」

さらにしばらく歩き、伊奈帆が振り向き立ち止まった。下を向いて、自身の爪先と斜面の草でいっぱいになっていた視界が上がる。

「ええ？」

暗くて寒くて、坂道で？そんな不満を顔いっぱい浮かべたスレインの肩を伊奈帆は掴み、言った。暗くて表情はよく分からないが、声は弾んでいる。

「いいから」

「こうか？」

目を瞑ると、耳が急によく聞こえる気がする。伊奈帆が満足そうに息を吐くのが分かった。手を引かれる。

重ね着した服の衣擦れや、足元の草を踏み、裾を擦る音が意識された。手袋越しに触れた手。伊奈帆の手は、思ったよりごつごつして、大きかった。

「手を引くよ。こっち」

「ああ、待って」

たたらを踏むと肩を支えられ、腕を引かれる。そのまま引き寄せられ、肩を抱かれて一歩、また一歩と足を踏み出す。まるで淑女を相手にするような丁寧な手つきに、スレインは躊躇いがちに身を預けた。

ゆっくりと歩く。一步、一步、急な坂を上る。

「もう少し」

沢山歩いた。汗がこめかみを流れる。伊奈帆の言葉に頷く。と、急に踏み込む地面がなくなつた。どうやら丘を登り切つたらしい。大きく一度息を吐く。熱い息が鼻を通り抜けた。

「着いた。目を、開けていいよ」

伊奈帆の言葉に、スレインは少し高揚した心持ちでゆっくりと目を開ける。体は離れたが、手は握られたままだ。

「ああ……」

スレインは、言葉を忘れて夢中で首を回した。

目に飛び込んできたのは、満天の星空。

遠いのか、近いのか。黒一色ではない幻想的な夜の闇に、数え切れない星々が瞬いていた。さっきまでの街中の、死んだような空とは全然違う。白、赤、黄色、橙、青……力強く輝く星々の中に、半分の月が遠く白く浮かんでいた。

——あそこにいたのだ。僕たちは。

「綺麗だ」

スレインの口から出た言葉を聞いて、伊奈帆は良かった、と呟いた。

伊奈帆とスレインは隣に並んで座り、無言でしばらく夜空を見上げた。伊奈帆は何も言わない。スレインも、何も言わなかった。なんだか喋るのがもったいないような気がした。今、こうして隣にいただけで、何かが重なり合っていくようだった。

「あ」

スレインが小さく声を上げた。伊奈帆も見ていた。流れ星だ。一瞬で消えた。伊奈帆は思う。

二人で落ちてきた時、僕らも地球からはあんな風に見えていたのだろうか。

「流れ星だ」

スレインが頷いた。心配がした。吐く息は暗くて見えないが、きっと綿菓子みたいに白いだろう。寒さで痛む鼻を擦って、伊奈帆は次に話す言葉を考える。

「…スレイン」

「何？」

綺麗な声だった。この声は、スレインの肌に埋め込まれたICで軍の機関に送られ記録されている。心拍も血圧も呼吸も、どこにいるのかも。今この瞬間も監視されている。

でもいい。聞かれて困ることなんてないし、見られて困るものなんてない。だって、もう戦争は終わった。

「あの宇宙で、僕たちは戦った」

「ああ」

「戦争は、終わった」

「ああ」

「君は、生きている」

「…ああ」

「僕も」

「…」

スレインの体が強張っていくのが分かった。でも、どうしても言わなくてはいいけない。これまでのことも、これからのことも。伊奈帆は星を見上げる。スレインも見ているはずだ。暗いけれど、それは分かる。

半分の月は白く優しい光で浮かんでいる。あそこにいたのだ。彼は。

「これからも、僕は君とこうして生きていきたい」

「…」

スレインは息を詰めて聞いている。自分はひどいことを言っているのかもしれない。それでも、伝えたかった。分かって欲しかった。

一緒にいたいんだってこと。あなたがいる毎日が大切なんだってこと。

「春には桜を見て、夏には蛍を見て、秋には紅葉を見て、冬には星を見て。毎日

一緒にご飯を食べたり、時々ケンカしたり、笑ったり泣いたりする。…そんな未来がいいなって、思うんだ」

スレインは星明りに照らされた伊奈帆の横顔を見た。眼帯が、その左目を覆っている。

自分が撃った傷。治らないし戻らない。伊奈帆はただ一つ残った右目で、これからの未来を生きていくのだ。

「重い？」

俯いて膝の間に顔を埋めるスレインの肩に伊奈帆はそっと触れた。触れた瞬間、電流が流れたように肩が跳ねた。

「うん…僕は、君にそんな風に思われるような人間じゃないから」
空虚なその左眼窩。

スレインは言わない。伊奈帆も何も言わない。失われた目についての経緯や理

由や謝罪について、二人の間で何一つ語られることはない。

もうそんな問答は、随分前に終わっているのだ。わかる。終わったことだと。時は戻らないのだと。そしてたとえ時が戻ったとしても、スレインは、自分はその瞬間、きつと何度でも迷うことなく伊奈帆を撃つだろうと確信している。憎しみも抱かず、アセイラムを救うための交渉手段として、躊躇なくこの男を撃つだろう。

彼は、その場にいた唯一の地球人だったから。

「ねえ、君は世界中の人間にとって、それほど特別な人間じゃないよ」

伊奈帆の声がやけに優しく、寂しく聞こえた。その声音は、影法師に語り掛ける少年のように孤独だった。スレインは顔を上げる。滲んだ星々は綺麗だった。

「でも」

自分は、償いきれない大罪を犯した。沢山の人を不幸にした。殺し、騙し、奪った。形なき思いのために。だからこうして、監理され、監視され、箱庭のような世界で生かされている。それはいい。胸に引っかかる抜けない棘のような痛み

の原因は、別にある。

界塚伊奈帆を道連れにしている。

自分は狡い。伊奈帆を拒むことができない。伊奈帆を自分に縛り付けているのは、アセイラム姫との約束でも、軍の思惑でもない。そんなことくらい、分かっているのだ。

「僕も、特別な人間じゃない」

声に顔を向けると、伊奈帆の顔はスレインを向いていた。星に照らされ闇に溶ける輪郭は幼さを残し、右の眼がとても大きく丸く見えた。まだ、子どものように見えるくらいだ。置き去りにされた迷子の子どものような顔だと思った。スレインは、首を振る。

「お前は、そうかもしれないな」

こんな生活は、伊奈帆には似合わない。自由で、素朴で、何でもない日常が似合わないやつだ。似合わない軍服。似合わない階級。似合わない眼帯。

似合わない、自分との日常。どうして伊奈帆なんだろう。どうして、伊奈帆と

過ごすこの日常が。楽しいだなんて、思ってしまうのだろう。

「戦争だから、いろんなことがあった。でも、終わったんだ」

伊奈帆の手が、膝を抱えたスレインの手にそっと触れた。いつの間にか、手袋を外していた。

固くて、冷たい手のひらだ。

「普通に生きよう。できれば、一緒に」

朝起きて、君がいる。寝る時隣に、君がいる。一緒にご飯を食べて、一緒にテレビを見て、一緒に散歩して、一緒に暮らす。そんな風に生きていきたい。伊奈帆はそんなことを訥々と、ぎこちなく語った。

スレインが何も言えず伊奈帆の顔を眺めていると、伊奈帆は眉を下げた情けない顔になって身を乗り出した。

「お願い」

こんな顔は見たことない。そう思うとスレインはなんだかおかしくなって、少し笑った。伊奈帆が怪訝そうに首を傾げた。それがまたおかしい。スレインは口

元に手を当て笑いながら言う。

「お前は……。ときどき、本当に馬鹿だなあ」

スレインは、祈りを捧げるように左右の手を組み合わせた。そして、固く手を合わせたまま、指に額を寄せ目を閉じた。

「ありがとう。僕を救ってくれて」

それっきり黙り込んだスレインは、声も出さずに泣いているようだった。伊奈帆は寒そうな肩をそっと引き寄せた。

「……うん」

一人でも二人でも、冬は寒い。特にこんな夜は。でも、今は寒さなんかどうでもよくなるくらい、大切な時間だ。伊奈帆はスレインの薄い肩を抱きながら思った。

「ねえ、キスしていい？」

汗も冷え切り、寒さで手足の感覚がなくなってくるほどの時間が過ぎた頃、出し抜けに伊奈帆が言った。あまりに唐突なその言葉に、スレインは思わず吹き出した。

「僕たち、そんな関係か？」

伊奈帆は大真面目な顔で大きく頷いた。

「そんな関係になりたいと思ってる。駄目かな」

どうやら真剣そのものらしい伊奈帆に、スレインはたじろく。こんなにもストレートなアプローチをするやつだとは知らなかったし、その対象が自分だとはなんとも居心地が悪い。

…でも、嫌ではない。

「いいも悪いも…。なんか他に、言い方ないのか」

スレインがもごもごと言っているうちに、あ、と声を上げて伊奈帆はジャンパールのボタンを外した。内ポケットをガサゴソと探り出す。今日の伊奈帆は普段の

様子からは考えられないほど落ち着きがない。

何かを見つけたらしく、神秘的顔で伊奈帆はスレインに向き直る。何がしたいのかよく分からないが、とりあえず、スレインも彼の正面向いて座り直す。

「手、出して。左手」

「? どうか?」

伊奈帆の左手がスレインの左手を持ち上げた。いつの間にか、伊奈帆は片膝をついて背筋を伸ばしている。

「左手の薬指は、心臓に繋がっている。だから、エンゲージリングは左手の薬指につけるんだ」

「そうか?」

伊奈帆が握っていた右手のひらを開き、スレインの手に寄せた。冷たくて固い感触が、指を通り抜ける。

指の根本に嵌ったそれは、月の光できらりと光った。

「: よかった、ぴったり」

こっそり測ったかがあった、と伊奈帆は余計すぎる一言を言った。

スレインは突っ込むこともできず、自身の左手薬指と伊奈帆の顔を交互に見やる。驚いたというかなんというか、何がしたいのかはわかるのだが、思考と感覚と感情が付いていかない。

「……えっと、これは」

「スレイン」

星が降るような冬の空の下、伊奈帆の声がやけにはっきりと耳に届いた。伊奈帆は左膝を地面に着いて、スレインの左手を自身の左手に乗せたまま右手を胸に当てた。気障な仕草だが、真剣な表情に鼓動が大きくなる。

いつの間にか、スレインの右手は自分の胸を押さえていた。服の下、汗で冷えたペンダントの固い感触を確かめた。

「結婚してください」

冷たい夜風が通り過ぎ、草原の草が波のようにざあざあと騒めく。伊奈帆の隻眼は真っ直ぐにスレインを見つめていた。冷え切った左手はぐ、と力をこめて握

られ、悴んだ指先が少し震えたのが分かった。

伊奈帆が何を言ったのか、分かってはいるが。現実感がない。しかしスレインは、冗談でも、酔狂でも、本気でも、何でもいいと思った。この告白に心臓がやけに元気に跳ねだして、じんわりと顔が熱い。急に目が熱いし、喉の奥で変な味がする。

ようするに、嬉しいのだ。自分は。

「…はい」

伊奈帆の手に両手で触る。撫でると固くて冷たい。古傷や胼胝があり、短い爪の先はがさがさにひび割れている。その手を温めるように優しく包んだ。

この手が、僕の手を掴んだんだ。あの星々の中で。

「え、いいの？」

伊奈帆は彼なりに驚いた顔をして腰を上げた。思わずと言った様子で両手をぎりぎり握りしめられる。

「…お前、そういうところだぞ」

「ごめん、つい。え、本当に？」

目を大きくして詰め寄る伊奈帆に、スレインは笑いかけた。目を見て、頷く。

「ああ」

「やった」

伊奈帆が首に抱きついてきて、スレインは後ろに倒れた。夜露で湿った土と草の感触を背中に感じながら、起き上がろうと手足を動かすが無駄に終わった。諦めて伊奈帆の背中をぽんぽん叩く。より一層腕の力が強くなった。

「ちょ、苦しい」

伊奈帆が腕を緩めて腕を立てる。至近距離で見下ろす顔は、嬉しそうに笑っていた。つられてスレインも笑う。額がぶつかり、こつんと小さく音が鳴った。

「ああ、良かった。ねえ、キスしていい？」

「お前なあ……」

スレインは苦笑いして、目を閉じて首を伸ばした。

少しかさついた、柔らかい感触。触れた部分は乾いて冷たい。

草の匂いが青臭く香った。目を開ける顔を離すと、伊奈帆の後ろは星が降るような空だった。

「：こういう時は、何も聞かずにするもんだ」

スレインがそっぽを向いて言うのと、伊奈帆が歯を見せて笑った。スレインも照れくさくなって笑った。

「：今後の参考にするよ。ね、もう一回」

「：馬鹿だな」

首に腕を回す。視界の隅で、指に通された小さな輪が銀色に輝いた。

一緒にいよう。一緒に生きよう。その指から繋がる心臓が止まるまで。

星の海の底で、もう一度キスをした。

時は遡り。

十一月のある日。界塚伊奈帆は、二か月遅れの健康診断を受けるため耶賀頼蒼真の下を訪れていた。検査項目を終え、診察室に入る。仕事を立て込んでなかなか来れなかった旨を伝えると、耶賀頼は渋い顔で伊奈帆くん、と椅子を回転させ、眼鏡の位置を中指で直し、お説教モードに入った。

耶賀頼といい、鞆戸といい、ダルザナといい。どうもデューカリオン時代の知り合いには、いつまで経っても子ども扱いされているようで面白くない。

「定期検診は必ず受けること」

「はい」

「どんな後遺症が出るかわからないんだから。無茶は禁物だよ」

「はい」

アナリティカルエンジンのことでは、当時耶賀頼に世話をかけた。素直に頷く。その後もくどくどと小言を言われ、伊奈帆は神妙に聞いた。

会話が一区切りして、耶賀頼がそうそう、と手をポンと叩いた。伊奈帆に背を

向け、ごそごそとデスクの引き出しをかき回す。箱のようなものを取り出した。

「伊奈帆くんへ、少し早いけどクリスマスプレゼント」

伊奈帆は手渡された白い小箱を見る。軽くて小さい紙箱は、一見何が入っているのか分からない、白くシンプルな装丁だった。裏面を見てたっぷり十秒言葉を失い、伊奈帆はようやく一言言った。

「…耶賀頼先生」

コンドームだった。

そうそうこれも、ともう一つ手渡された薄ピンクのシンプルな箱には潤滑ゼリーという文字が小さく控えめに、でもしっかりプリントされていた。

それぞれを両手に持って耳を真っ赤にしている伊奈帆に、耶賀頼は身を乗り出し真面目な声で言った。

「たとえ相手がいらないういっても、必ず使うこと。上手く着けられなくても、手間でも、面倒でも、必ず使いなさい」

真剣に話す耶賀頼に、伊奈帆はこくこくと頷いた。耶賀頼は微笑む。

「まだ早いと思うかもしれないけどね。いざという時のために、今からちゃんと考えておきなさい」

「…はい」

耶賀頼はよし、と笑ってまた引き出しをがさごそ探り、不透明なビニール袋と紙袋を差し出した。伊奈帆はありがたく頂戴し、袋に入れる。耶賀頼が伊奈帆くん、と名前を呼んだ。

「大事にしてあげるんだよ。人を愛するっていうことは、自分も相手も尊重することだ」

あの子は随分、辛い目に遭ってきたようだから。その言葉に、耶賀頼は医者として、大人として、伊奈帆の近い友人として、未来を案じてくれているのだとわかった。

「はい」

「幸運を祈るよ。We wish you a Merry Christmas.」

耶賀頼はウイंकを一つして、回転椅子をくると回した。伊奈帆は一礼して、

紙袋を持って診察室の扉を開けた。

▷なんでもないはなし

コンコン、カッ。

「今日、何かあるのか？」
何にもないよ。

シャカシャカシャカ。

「朝から、何で？」
何となく。

トントン、トン。

「…何か企んでるか？」
何にも。

チン。

よし。上手く出来たみたいだ。書いてある通りに作ったんだから、当然と言え
ば当然か。

コポコポコポ。

「コーヒーが出来た。砂糖は？」
四つお願い。

「こっちも出来た」

伊奈帆は、ダイニングテーブルに大皿とナイフを置いた。スレインは両手にマ
グカップを持って、それぞれ置いて自分の場所に座る。皿の上を見て、僕の顔を
見た。

お、笑った。

「綺麗だ」

「でしょ」

真っ白な生クリームと、砂糖漬けのフルーツで飾り付けしたホールケーキ。
ナイフを手に取ると、スレインが聞いた。

「何で急にケーキなんて作ったんだ？珍しい」

何かの記念日か？と不思議そうに首を傾げる。

「何にもないよ」

伊奈帆は出来上がったばかりのケーキにナイフを差し込んだ。切り分けると、
オレンジとキウイが断面から鮮やかに顔を覗かせる。

何にもない。何となく。まあでも。

強いて言うなら、君の笑顔が見たかっただけ。

なんでもない日[2018-10-7]

Happy New Year.

——新しい年。君の大切な人と。

[2018-01-11]

「明けましておめでとうございます」

界塚伊奈帆が玄関のドアを開けると、ダルザナ・マグバレッジと不見咲カオルが口を揃えてそう言った。伊奈帆は同じ言葉を繰り返す。

来ることを事前に聞いていたこととはいえ、仕事の上司とプライベートで会うのはどうも気まずい。二人の私服姿は初めて見るが、思っていたより女性らしく柔らかいファッションだ。

「：どうぞ」

二人の女性はそろって中に入り扉を閉め、靴をそろえて上り框で振り向く。嵩張る荷物を両手に持って、伊奈帆の後にダルザナ、そして不見咲が続いた。

「もう、皆さん来ていますか？」

マグバレッジが廊下で聞いた。伊奈帆は振り返り顔を向ける。仮にも上司だ。

「いえ、まだ」

まだ定刻より十五分ほど早い。返事を待っていない早いタイミングでマグバ

レッジはもう一度問いかけた。

「彼は？」

「今、吸い物の様子を見てます」

「そうですか」

今度は振り向かず前を見て言った。リビングのドアノブに手を掛ける。マグバレッジが後ろで苦笑いしたような気配がした。

リビングには、出汁のいい香りが漂っていた。向かって左側のオープンキッチンでは、湯気を立てるコンロの鍋の前で、スレインが手持ち無沙汰にお玉を握っている。

「スレイン、艦長たちが来たよ」

「…どうも」

スレインはお玉から手を離し、会釈をした。マグバレッジと不見咲も軽く一礼する。

「明けましておめでとうございます。今日はお世話になります」

「……いえ」

伊奈帆は、来客をリビングのソファに案内する。上着とバッグを置く前に、二人から手土産を渡された。

「人が集まるまで、涼しいところへ置いてください」

そう言ってダルザナが差し出したのは白の水玉模様の青いビニールで包まれた、大きくて丸い入れ物だ。握り寿司だ。

「少尉、これをどうぞ」

不見咲は、包装された箱を袋のまま渡した。中身が何かは分からない。

「何ですか？」

「おかきです」

キッチンに向かう伊奈帆の後ろで、不見咲君、という呆れた声が聞こえた。

事の起こりは、クリスマスの三日後、十二月二十八日だった。

『伊奈帆、今年のお正月はどうする？』

夕食後、韻子からの電話を取ると第一声がそれだった。

そういえばもう年末か、と伊奈帆は頭の中のカレンダーをめくる。近頃浮かれ気分だった伊奈帆は、年末年始のことをすっかり失念していた。そう言えば、明日は仕事納めだった。

「まだ決めてないけど、家にいると思う」

学生の頃は、ユキと二人で韻子の家に迎えてもらい正月を過ごしたものだっ
た。

戦争があつて、戦争が終わって。普通らしい日常が戻って初めての正月だ。

『そうだよね。聞いてみただけ。ユキさんにも電話していい？』

「別に、僕に断る必要はないよ」

『それもそうか。じゃあ、伊奈帆。よいお年を』

「：よいお年を」

韻子はいく、まめで世話焼きで、ちょっとお節介で。そして、とても優しいところがある。韻子に救われたことも多かったな、と伊奈帆はふと感傷的な気分になった。

そしてその電話から数分後、もう一度伊奈帆のスマートフォンが鳴り出した。発信者を見ると、姉のユキだった。

「ユキ姉。韻子から電話あった？」

『そうよ。なおくん、そこにスレイン君いる？ ハンズフリーで一緒に話ができるかしら』

「ちょっと待って」

スマートフォンを持ったまま廊下を歩いていく。一つドアを開けて、もう一つ

のドアをノックする。名前を呼ぶと、スレインが顔を出した。

頭からなにからびしょびしょだ。

「何だ？…見ての通り、風呂に入っているんだが」

「そんなの知ってるし見れば分かるよ。ユキ姉と一緒に話したいって」

「お姉さんが？」

スレインが湯冷めするといけないので、伊奈帆は靴下を脱いでバスルームに入り扉を閉めた。あたり一面湯気で真っ白だ。

『ごめんね、お風呂に入っていたのなら言ってくれば良かったのに』

「いえ、おかまいなく」

「浸かったら。冷えるよ」

風呂場なので、声が反響して大きく聞こえる。スレインはこういう時に何を言っても無駄だと知っているの、そのまま湯船にもどって体育座りで膝を抱えた。伊奈帆は服が濡れないように立ったままだ。

『あのね、韻子ちゃんと話してたんだけど、今年はなおくんの家で、みんなで一

緒にお正月を過ごそうかなって』

「家で？」

『それで、韻子ちゃんと私だけではちょっと味気ないなあって。カーム君とか、ニーナちゃんとか、ライエちゃんとか、声かけてもらえることになったから』賑やかになるわね、と呑気な姉の声が聞こえる。急にいろいろ決まったな、と思いつながらスレインを見ると、怪訝そうな顔で伊奈帆を見上げている。

『みんな、帰る実家もないしねえ。多い方が楽しいかなって思ってる。どう？』
「どうする？」

スレインに話を振ると、困ったように眉を寄せて考えた後、ぽそりと言った。

「どうって……。お前が決めたらいい」

まあそう言うだろうな、とは思っていたので、伊奈帆は頷いた。

「そう。じゃあ、来てもらおうか」

「……うん」

受話器の向こうでパチン！と指を打ち鳴らす音が聞こえた。ちよつと端たな

い。

『決まりね！食べ物はいろいろ持っていくからね』

「お節くらいは、こっちで用意するよ」

買うと高い。チラシに載っていた値段を思い出す。卵が二切れしか入っていないなんて、とスレインにぼやいた伊奈帆だ。もっと沢山、必要だろう。

『そうね、それは頼もうかな。じゃあなおくん、スレイン君、よいお年を』

「よいお年を」

ほら、と受話器を口元に寄せられてスレインもぎこちなく口を動かした。見ると顔が赤い。のぼせたのかもしれない。

「よい、お年を」

ばいばーい、という明るい声で通話は終わった。

そこまでは良かった。翌日は仕事を納めて、三十日は大掃除と買い出しを済ませ、三十一日はのんびりした気持ちでリビングのソファでテレビの音をBGMにタブレットでおせちの作り方を検索し、大晦日を満喫していた伊奈帆だった。テレビでも見よう、とスレインを誘ったのだが、「掃除のやり残しが…」と一時間くらい前から風呂場の鏡やトイレを掃除している。メニューが決まり、スレインが普段からきれいに掃除をしていてくれる上にお掃除を経てピカピカのキッチンに立ち、伊奈帆がうきうきと腕まくりをした瞬間。

スマートフォンを着信音。

なんとなく、嫌な予感がする。手に取ると、ディスプレイには見知らぬ番号が表示されていた。伊奈帆はゆっくりと通話ボタンを押して、耳に近づける。

「…はい」

『突然すみません。ダルザナ・マグバレッジです』

「ああ、どうもこんにちは」

知った相手に少しほっとして、口調が和らぐ。何かと世話になっている相手だ

が、そういえば連絡先も知らなかった、と気付く。

『半分くらいは仕事の電話だと思って聞いてください。今、時間は良いですか？』

「どうぞ」

『一月一日に、貴方たちの住まいで正月パーティーをするそうですね』

「……ええ、まあ」

どうして知っているのだろう、とも思ったが、当然と言えば当然だった。ここは軍の管理する生活空間で、同居人は監視されているのだ。最近は自分も彼も監視を気にしなくなっていた。少し不味いかな、と伊奈帆は頭の端で考える。

『それはいいのですが。人が集まると聞きました。たとえ軍人、軍関係者、元軍人とはいえ、……いえ、だからこそ彼の存在はあまり大っぴらにできません。万が一にでも相互に作用し合い、取り返しがつかないことになったら。魔が指して殺傷沙汰にでもなつては、という懸念があります』

軍の管理下で、何かあつてはいけませんから。

「はい」

『しかし、君たち二人でずっと引き籠っているのも考えものだと、私個人としては思っていました』

この人にしては、回りくどい。どういふつもりだろう、と伊奈帆は首を捻る。

『そこで、私も参加します』

「はい……え？」

『驚きましたか』

驚いたも何も。

「え、艦長が家に来るんですか」

『おそらく、あと数人増えるでしょう。おそらく今、あなたの想像している通りのメンバーが行くことになるでしょうね』

ということとは、不見咲副官は当然来るだろう。あとは、もしかしたら鞠戸大尉……なら、耶賀頼先生も。

回線の向こうで小さく笑う声がした。

『いいですか。私たちなりに、君のことを心配しているのですよ。ご馳走を持っ

ていきますから、邪険にしないように』

それでは、良いお年を。そう言って切れた電話を数秒眺め、伊奈帆は冷蔵庫から卵をパックで取り出した。

「あら。艦長たち、もう来てるの」

玄関先でユキが寒い寒いと手袋を外した。いそいそと靴を脱いで微笑む。

「スレイン君は？」

「艦長たちと一緒に」

まあ座りなさい、とマグバレッジに言われ、スレインは蛇に睨まれたカエルのような様相で、母国では新年をこう祝います。あなたのところはどうか。とお正月についての国際交流をさせられている。

「へえ」

ユキがにんまりと笑って、伊奈帆はそわつきつつこっち、と姉に先を促した。

「なお君、これ」

「何？」

ユキに渡された白いビニール袋はずっしりと重い。

「おもち。みんなで食べよう」

きなこがあったかな。と思いを巡らせつつ、伊奈帆は自分より少し小さい姉の

少し後ろを歩いていく。

「よう」

「やあ」

「：あけましておめでとうございます」

午前十時過ぎ、チャイムを鳴らしたのは鞠戸孝一郎と耶賀頼蒼真だった。鞠戸はラフな服装で、鼻の頭を赤くしている。耶賀頼は襟付きのきちんとした格好。対照的な二人だな、と眺めると新年のあいさつが返ってきた。

「おめっとさん。もうみんな来てるか」

「艦長と中佐と、ユキ姉が。他のみんなは昼頃になるって」

「そうか」

靴を脱いで立ち上がると、鞠戸も耶賀頼も背が高い。狭い室内だと、いつもより大きく感じ、背が伸びたはずなんだけど、と恨めしい気持ちで二人の後ろに続

く。鞆戸が何気ない口調で聞いた。

「あいつは？」

「中にいますよ」

「そうか」

みんな気にしすぎだ、と思う。耶賀頼が振り向いて伊奈帆くん、と呼びかけた。
「今日はありがとう。準備も大変だったでしょう」

「いえ。別に」

リビングのドアを開けると、出汁の匂いともちの香ばしい香りがした。

これが正月の匂いなのだろう。スレインがオーブントースターを開けて、菜箸でもちをひっくり返している。箸の持ち方も上手になったな、と伊奈帆は思った。
「遅かったですね。十分の遅刻ですよ」

マグバレッジにぴしゃりと言われ、鞆戸は頭の後ろを掻いた。その横で、不見咲が面白くなさそうな顔で鞆戸を見上げている。ユキはやれやれ、といった表情だ。

「勘弁してくださいよ」

賑やかになりだしたりリビングからキッチンへ足を向けると、耶賀頼が呼び止めた。

「伊奈帆君、これ。冷凍庫空いてるかな？」

耶賀頼が差し出したビニール袋を受け取る。中には袋いっぱいのカップアイスが入っていた。いろいろと種類がある。イチゴ、チョコレート、バニラ、チョコミントも。

「ありがとうございます。ガラガラですから入ります」

ああ、と鞆戸が向こうの方で声を出した。なにか細長い包みをほどこいている。

「弟、これも差し入れだ。こっちに置くぞ」

「酒……」

「貴方という人は」

マグバレッジが一つ溜め息を吐く。

中から出てきたのは案の定酒だ。金ぴかのめだたそうな箱に入っていて、さっ

そく開封を始めた。

「ああ、でも、コップしかないんだけど…」

伊奈帆は食器棚の中を物色する。グラスしかない。あとは湯呑か、マグカップか…。

「お猪口を持ってくれば良かったですね」

しまった、とユキが頬に手を当てた。鞆戸は足を組んで座り、コップでもいいだろう、と言っている。

「折角のお正月なのに、気分が出ませんね。買ってきましたよか」

不見咲が腰を浮かせると、ユキがポン、と手を叩いた。どうも姉は最近ハンドジェスチャーが多い、と伊奈帆は分析した。

「そうだ、なおくん。韻子ちゃんに頼めない？」

韻子の家は定食屋だ。当然お猪口も徳利もあるだろう。

「聞いてみる」

時計を見ると十時半だ。スマートフォンを押した。

『はいはい』

がちやがちやと作業の音をバックに韻子の明るい声がした。料理中かもしれない。

「韻子、今いい？」

『いいよー』

パチパチと音がする。揚げ物をしているようだ。

「お猪口って借りられる？」

『お酒の？』

「そう」

『いっぱいあるよ。徳利は？』

「いるかな」

『あった方がいいよね。ええと、今フライを揚げてる所で、カームとニーナは買い出し中。行くときに持っていくのでもいい？あ、艦長たち、もう来てるんですよ？先に始めてね』

「ありがとう。じゃあ、また後で」

『うん、また後で』

通話を終え、ユキに近づき声をかける。

「持ってきてくれるって。あと、先に始めててっさ」

「ありがとう。何か手伝う？」

「いや。ここにいて」

姉の手伝いは百害あって一利なしなので、伊奈帆は素っ気なく言ってキッチンへ向かった。

キッチンでは、スレインがオーブントースターで何度目かのもちを焼いているところだった。既にきなこと磯辺焼きに味付けされたもちが、皿に分けて置かれている。伊奈帆のレクチャーよりも甘そう濃そうな味付けに見えるが、酔っ払いいにはこのくらいがいいのかもしれない。

「おもち、上手に焼けたね」

「ぷくぷくしてきて、面白い」

スレインはトースターの中身を見ながら言った。こういう、時折見せる子どもっぽい感性が面白いなと思う。

「スレイン、始めるから向こうに座ろう」

「…ああ」

トースターからもちを取り出して、少し緊張した面持ちでスレインは頷いた。気持ちには分かるが、伊奈帆はなるようになるだろう、と樂觀している。

「お寿司と、お重は持って。吸い物は後にしよう」

「お重？」

「その弁当箱のこと」

「ああ。昨日作っていたあれか。でもあれ…」

「何？」

「…いや、なんでもない」

お節と寿司ともちの登場に、大人たちから歓声が上がった。

「それでは、新年あけまして、おめでとうございます。乾杯」

「乾杯」

一番上官という理由で、マグバレッジが乾杯の音頭をとった。皆が手にしているのは透明のグラスだ。結局、お猪口が来るまではコップで酒を飲むことになった。伊奈帆は一口飲んで顔を顰める。美味しくないし苦手だ。すぐに眠くなるから、あまり飲まないようにしよう、と脇に置く。

「ねえねえ、なおくん。お節、開けていい？」

「どうぞ」

ユキが重箱の一番上のふたを開ける。他のメンバーもわくわくした表情で覗

き込むが、スレインは一人そつと目を逸らした。

「あらあ、黄色ね〜」

ユキが蓋を持ちつつのんびりした声で言った。一段目には、びっしりと伊達巻たまごが並んでいた。

色と言ひ、香りと言ひ、見るからに一級品の素晴らしい出来栄えの伊達巻だが、みっちり詰まっている様子は少し異様だ。鞠戸が素朴な疑問、という風に口を開いた。

「なあ、弟。どうして卵ばかりなんだ？」

「好きだからです」

ユキが頬を引きつらせながら二段目、三段目を開けると、二の重には、黒豆、昆布巻き、たたきごぼう、えび、栗きんとん、かまぼこと、一の重から追いやられた料理まで所狭しと詰め込まれている。黒と黄色が面積の半分以上を占めているが、よく知るおせち料理の姿に近くてほっとして、ユキはふたを置いた。そして三の重からは筑前煮が現れた。良く味が染み込んで、美味しそうである。

「栗きんとんと黒豆が多めですが、甘党ですか？」

真面目な顔で聞く不二咲の隣で、鞆戸が黒豆をつまんで口に放り込んだ。旨い、と言ってぐいと日本酒を煽る。やっぱりお節には日本酒だな、と満足そうだ。

次々箸が伸び、それぞれ好きなものを食べ始めた。

「残るともつたないので、食べたいものを多めに作りました」

「だから言ったのに……」

伊奈帆が伊達巻に箸を伸ばしながら言うと、横でスレインが呆れたように言った。前日のお節制作の際、テレビや写真で見たのと違う、ちよつと黄色が多すぎやしないか、と珍しく口を出したのだった。スレインが伊奈帆の料理に口を出すなんて言うのは前代未聞、全く思いもよらぬことで、伊奈帆は神妙に頷いて品数を変えたのだ。スレインにしてみれば、伊奈帆の家族や友だちだけでなく世話になった上司まで来るといふ話だから、あんまり極端なことをしては彼が困るのでは、という親切心から出た言葉だったが、もう少ししっかり言えばよかった、と後悔していた。

「だって、かまぼこや酢の物は君が食べないじゃないか。煮物も好きじゃないし。だから栗きんとんを二段目いっぱい詰めようとしたら、それじゃあ色がどうとか言うから」

「お前、だって見せてもらった写真と全然違うし、あんまり黄色ばっかりだと誰だって変だと思うだろう」

ということは、もしかしたらこのお重は伊達巻、栗きんとん、筑前煮のコンボもあったかもしれないということか。小皿に取ったえびを見て、おいしいだろうけど酒が進まないだろうな、と考える耶賀頼だった。

「まあ、詰め切れなかったきんとんが冷蔵庫に沢山あるから。また食べよう」

「沢山あるのか」

甘いものはあんまり、とスレインは小さく呟いた。

「心配することありませんでしたね」

ダルザナが日本酒を口へ運び、コップを両手で包んで言った。ユキが、うん、と頷きにつこり笑う。

「スレイン君、ここでの暮らしは、もう慣れた？」

「ええ、まあ」

ユキに名指しで話しかけられて、スレインは背筋を伸ばしてどきまぎと返事をした。少し逡巡し、隣に座る伊奈帆を横目でちらりと見た。

「彼が、良くしてくれるので」

その一言に、ユキはあらあら、と両手で頬を包み、マグバレッジは妬けますね、と日本酒を口に運び、不見咲はそんなマグバレッジをまじまじと見つめ、耶賀頼はやたらしい笑顔で何度も頷き、鞆戸は大きな手の平で伊奈帆の背中をばんと叩いた。

「良かったなあ、弟」

「…吸い物出そうか」

ごぼごぼと数度噎せてから、早口で言い伊奈帆が立ち上がった。はっはっは、と鞆戸の笑い声が響く。

「ああ、手伝う」

「いいよ、座ってて」

立ち上がろうとしたスレインを片手で制して、伊奈帆はキッチンへ足早に向かった。腰を下ろしたスレインに、ユキがそつと耳打ちする。

「あれは照れてるのよ」

確かに、そんな感じだ。伊奈帆は、一見クールに見えて、感情表現が案外子どもっぽく分かりやすいところがある、というのをスレインは彼と一緒に暮らすうち学んだ。

「トロイヤード君」

自らを呼ぶ声に視線を向けると、ダルザナが遠くを見る目で手元のコップに目を落とした。

場が静かになり、キッチンでコンロに火をつけるカチカチ、という音がクリアに聞こえる。

「私たちは皆、界塚伊奈帆くんと一緒に戦った仲間です。高校生だった彼の頭脳と戦闘能力に助けられたことは数え切れないほど。彼は本当に頼りになる。それ

は戦争が終わり、アナリティカルエンジンを取り外した今でも変わりません」

それはそうだろう、とスレインは考える。そうでなければ、自分の命はとつくの昔に失われている。そして、自分の人間としての自我とか、自意識とか、綺麗な言葉で言うのと誇りのようなものが未だ保たれ、生きることを楽しむのは、卓越した能力を持ち実績を上げ地球軍で地位を確立した伊奈帆の尽力以外の何物でもないのだろう。

「しかしそうさせてしまったことに、私たち大人は責任を感じているのですよ」スレインは、自分の周りに座る地球の軍人たちを見た。

皆自分よりも年上で、何とも言えない表情をして伏目がちに微笑んでいる。悲しそうにも見えるし、悔しそうにも見える。でも、誰もとても優しい目をしていた。

「あの少年から、普通の友だちや普通の生活を奪ってしまった。彼は戦争だから、と言うかもしれません」

キッチンの音が聞こえる。鍋のふたが少し揺れる音、微かな火の音、トントン、

と俎板の上に包丁が規則正しく降りる音。伊奈帆が何か作っているのかもしれない。彼は甘くて柔らかい食べ物が好きで、料理も好きで、きれいな部屋が好きで、理屈っぽいことが好きで、意外とうっかりしているとところもあって。

そして、自分を殺せたのに殺さず。今では。

「ですから、彼が貴方を仲良く暮らしているようで、安心しました」

ダルザナの言葉に、周りの大人たちが大きく、小さく、それぞれに頷いた。スレインは彼らの顔を一巡し、目の前の卵の殻を視界に捉える。あいつ、本当に卵が好きだな、と関係ないことを考えながら。

「そう、なのかな」

「先ほどの話は、貴方も同様ですよ」

「え？」

スレインの耳に、優しい声が届いた。

「我々は、貴方にも、責任を感じています。様々な意味で。ここでの暮らしは、幸せですか？」

「幸せ……」

皆、スレインの返事を待っている。

幸せ。幸せって何だろう。今までの人生で、幸せだったこと。

多分、お母さんとお父さんといった時は、……あまり覚えてないけれど、目を閉じると黄色っぽい感じであったかくて、ふわふわとしていて、幸せだったような気がする。お父さんと二人のときも、時々幸せだった。火星に行ってから辛いことばかりだったけれど、アセイラム姫がいるだけで幸せだった。と、思う。

そのあとは、よく分からない。幸せな時もあったかもしれないけれど、胸を隙間風が通り抜ける冷たい感じがいつもしている。地球に落ちて、死にたくて、死ねなくて、生きるしかなくて、今では生きてもいい、生きたいとさえ思えるようになった。でも今でも、いつもどこかに風が吹く。幸せかどうかはわからない。

「……幸せについては、よく分かりませんが」

そう。幸せについては分からない。でも生きていると、時々、生きていたから分かった、という出来事に出会ったりする。何かを知ったり、何かを感じたり、

何かに触れたり。

こんな狭い部屋だけれど、伊奈帆がいるから退屈じゃない。基本的に優しいが、どこか抜けてて意外と馬鹿で。腹の立つことばかり言うし、驚くようなことをする。でも、それが嫌じゃない。

「楽しいこともあります」

うん。今までこんなことは無かったかもしれない。一緒にいて、飽きない人間。同じ場所において、同じものを見て、同じものを大切にして、でも大切にする方法が全然違う人間。お互いに言いたいことは全部分かるのに、全然納得できない相手。だから楽しい。

だから、こうして生きている。彼の隣で。

「そうですか」

それは何よりです。そう言って笑ったマグバレッジは、一度瞼に指を当てた。鞆戸が、まあ飲みめ、と酒瓶を傾けたので、スレインは慌ててコップを両手で持った。

「……ずっと気になっていたのですが」

出し抜けに、不見咲が言った。伊奈帆が腕を盆に乘せてやってきて、何の話？とスレインに盆を差し出す。スレインは木目の大きな盆から、腕を両手で持ち上げた。不見咲がスレインの左手を指さし、伊奈帆とスレインを交互に見てから言った。

「お二人は、お付き合ひされていますか？」

からん。

「おわあっち！あっち！」

転げた腕が鞆戸の膝にこぼれ落ち、ああ、すみません、とスレインが布巾を取りに慌ててキッチンへ駆けていった。ユキと耶賀頼は困ったように眉を寄せ、視線を合わせ、ダルザナは額に手を当てる。ピンポン、とチャイムが鳴って、ああ、韻子たちが来た、と伊奈帆も慌てて玄関へ飛び出していく。若者二人の耳は真っ赤だった。

ダルザナが、不見咲の肩に手を乗せて大きく一度溜め息をついた。ユキは立ち

上がり玄関へ向かい、耶賀頼は面白そうに一部始終を眺めている。

「今更です。君がモテない理由が、今日という今日は本当によく分かりました」
明けましておめでとう！という元気な声が玄関から聞こえた。

その五日前。電話の前日。十二月二十七日の朝のこと。

「…伊奈帆」

「…何？」

朝食の白米を口に運んだ伊奈帆に、スレインが声を掛けた。伊奈帆はもぐもぐと口を動かしながら、ダイニングテーブルの対面に座るスレインを見る。スレインは口を開けては閉じを繰り返し、そしてばつが悪そうに目を逸らした。

「いや、…何でもない」

「何なの」

米を飲み込んで味噌汁の椀を持つ。さっきから、気付いてはいたが、スレインの食事は進んでいない。箸と茶碗を両手に持ったまま、ぼうつとしたり、伊奈帆と目が合うと目を逸らしたり。どうも落ち着かない。

味噌汁をずず、と啜ると温かい。わかめの風味が鼻を抜けた。

伊奈帆は椀越しにスレインを見る。彼の視線の先はスイッチの切れたテレビ。

それが見たいわけではなさそうだ。

目が合い、何かを言いたそうに視線が一点を見つめたまま小刻みに揺れた。伊奈帆はスレインのこういう目が一番好きだ。

「気になるよ」

伊奈帆の声に、スレインははっと顔を上げて、次に視線を落とし首を振った。茶碗を置き、味噌汁の入った椀に持ち代える。一口飲んでスレインは言った。

「…今するような話じゃなかった」

「余計気になる。言って」

「でも」

スレインの煮え切らない態度はよくあることだが、珍しく彼の方から話を持ち出したのだ。伊奈帆も食い下がる。箸を置いて湯呑を持つと、程よく温い。伊奈帆はごくごく、とお茶を飲み干し言った。

「いいから。だって僕ら、結婚したんだから」

「そのことなんだ」

スレインが間髪入れずにそう言った。じいっと伊奈帆を見据えている。ああ、この目も好きだなあ、と思いつつ、伊奈帆は間拔けな声を出した。

「…え？」

まさか、別れ話ではないだろうが。どうにも言いにくそうな様子に緊張を覚え、伊奈帆は湯呑を置いて口を結んだ。

数秒の沈黙の後、スレインは左右に目を泳がせてぼつりと言った。

「この前、君はその…これを、くれただろう？」

「うん」

テーブルの上に重ねた手をずらし、スレインが控えめに自身の薬指を示した。

「その…あれを僕は、プロポーズだと認識したんだけれど」

「その通り。それで？」

スレインは木製の椅子に背を預け、後頭部をかりかりと掻いた。

「…今までと、君との生活があまりに変わらないから。あれは本当にあったことなのかと不思議になった…それだけ」

そういえば、と伊奈帆は想起する。二十五日の夜、草っぱらでプロポーズをして、キスをした。その日は帰ってくると寒さと疲れでそのまま眠り、今日までの二日間、二人はそれ以前と全く変わらない生活を送っていた。

一緒に朝ご飯を食べて、伊奈帆が仕事に出かけ、帰ってきたら一緒にご飯を食べて、一人ずつお風呂に入って、別の布団で眠る。

日常は、これまで通りの距離感で、規則正しく運行されていた。一つだけ違うのは、スレインの指に嵌った銀色の輪だけだ。

「それはつまり…」

伊奈帆は少し身を乗り出して、両肘をテーブルについた。スレインは視線を合わせて言葉を待っている。

「生涯を共に歩むパートナーらしく、もっと親密なスキンシップをとるべきだと？」

スレインは瞬きを一度して、一塊の息を吐いた。

「まあ、そうなんだが。お前：なんというか、身も蓋もない言い方をするなあ」

スレインはそう言って右手の指先で指輪をくるくると弄っている。関節の間が細くて、隙間が空いてしまうのだ。

そういえば。近頃ペンダントを触るあの癖を見なくなったな、と伊奈帆は気付いた。

「…もういい」

スレインの立場からしたら、以前から何でもできるのに無理強いをしない伊奈帆が不思議でしょうがない。今は同意まで得たというのに、一向に何もしいことが理解不能だった。今まで自分をそんな風に扱った人間はいなかったからだ。

この贈り物についても、自分と彼との間には意図と理由に差異が生じているように思える。

「ねえ。今日は帰ってきたら、一緒にお風呂に入ろうか」

「…へ？」

目を丸くするスレインに、伊奈帆が肩を竦めた。口を曲げた、はにかみ笑い。スレインは伊奈帆のそんな顔は初めて見るし、いい表情で、うっかり見蕩れてしまった。

その事実には気付いて頬が熱くなる。よく考えたら、聞いた言葉もずいぶんと恥ずかしい。

「君が、嫌じゃなかったら」

「…別に、嫌じゃないけど」

素っ気なく返事をするよう努力をするが、伊奈帆が口元を緩ませたのがスレインには分かった。伊奈帆が頬杖をついて、目を閉じる。

「一緒にご飯を食べて、一緒にお風呂に入って、少しでもいい話でもして、一緒の布団で寝ようか。…君が、嫌じゃなかったら」

「…だから、…嫌じゃない」

なんでこいつは、こんな馬鹿丁寧にいちいち自分の意向を聞くのだろうか。そういうのには慣れていない。まどろっこしいし、何がしたいのかよく分からない。

まあ、別に。：嫌じゃないけど。

「じゃあ決まり。今日は、早く帰ってくるよ」

「別にそんな：」

なんだか恥ずかしくなって、スレインは俯いた。伊奈帆は時間だ、と立ち上がり、濃紺の上着に袖を通す。

「もう行くけど。ご飯、ちゃんと食べるんだよ。終わったら自分で洗って」

「ああ」

「スレイン」

「：なんだ？」

「嫌なら嫌って、言っていないんだ」

伊奈帆は、真剣な表情でスレインを見ていた。声は少し低く、丁寧な発音。ゆっくり発声されたことに気付く。伊奈帆の隻眼に吸い寄せられるように目を合わせる。

温かい色の瞳だ。

「ご飯を食べたくない時は、言ったらいいし。一人になりたいときは、そう言えばいい。言いたいことがあったら、どうでも良いと思ってても間違っても、小さなことでも言ったらいい」

伊奈帆が口を閉じ、そして開いた。

「一緒に暮らしていくんだから」

そういえば、こいつには二人暮らしをしていた姉がいたのだった、とスレインは思い至った。詳しくは知らないが、小さい頃から二人で生活をしていたと聞いたことがある。あれは面会室でのことだったか。姉の作った卵焼きの話。

きつと。いろんな話をして、お互いを大切にして、相手のために怒ったり、笑ったり、泣いたりして。これまで伊奈帆はそうやって暮らしてきたのだろう。

そうか、家族になるのか。こいつと。そうして暮らしていくのか。これからの時間を。

『左手の薬指は、心臓に繋がっている』

そうか。だからこいつ、指輪を嵌めたんだ。

「…嫌なら嫌って、ちゃんと言える。…この生活は悪くない」

スレインも答えようと考えるが、どうも上手く言えない。本当はちょっと泣きそうだし、言いたいことが沢山、山ほどあるのだ。拙い返事にそれでも、伊奈帆ははっきり微笑み頷いた。

「なら良かった。じゃあ、行ってきます」

「…伊奈帆」

思うより先に体が動いて、右手が勝手に伊奈帆の服の裾を掴んだ。驚いたように丸くなるオレンジ色の瞳。ああ、ええと。何だっけ。

「…待ってる、から」

「ああ、うん。…えっと」

いつになくしおらしいスレインの様子に、伊奈帆はその場から動くこともで

きずスレインを見つめた。見つめ合うこと数秒。スレインはぶつと吹き出して、肩をぽん、と軽く叩く。

「早く行け」

「ああ、うん」

はっとして伊奈帆は壁掛けの時計を見る。足早で玄関に向かう伊奈帆の後ろに、スレインはついてくる。玄関先で靴を履き、ドアを開けて振り返った。

いつもの無表情に見えるが、すこし俯き加減のこの顔。これは照れている顔だ、とスレインは少し笑った。伊奈帆もつられてじゃあ、と笑った。

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

重い音がして、扉が閉まった。さて、次にこれが開くとき、あいつどんな顔をしているだろう。少し弾んだ気持ちで、腕を伸ばし背伸びをする。スレインは残った食事を片付けるために、誰もいない部屋へ足を踏み出した。

▷ある朝のはなし

「…ごめん」

「…」

「…ごめんって」

「…」

「本当にごめん。反省してる」

「…反省？」

バツ、と起き上がり思いっきり顔を顰めて、スレインは凄い目つきで僕を睨んだ。この目、久しぶりだな。戦時中を思い出して、少し嬉しい。

「どの面下げて、言っている？何回目だと思ってるんだ」

「だから、ごめんって。この通り」

手の平を合わせて頭を下げるものの、効果がないのはこれまでの経験で知っ

ている。でも、もう少し怒られておこう。確かに、怒る理由はある。

スレインが低い声で界塚、と僕の名前を呼んだ。まずい。苗字呼びは相当頭にきている証拠だ。

「僕は言ったな？もう無理だ、って」

「うん。聞いた」

「やめろって。限界だ、って」

「覚えてる」

「久しぶりだし、きついって」

「…それがいいんだけど」

しまった。口が滑った。

「反省してるんじゃないかったのか？」

「つい本音が」

完全に冷めた目でこちらを見ている。一つ大きな溜息を溢して、スレインは枕の上に照準を合わせてぼふ、と倒れ込んだ。

「もういい。お前、覚えておけよ」

「本当にごめん」

もうしない、とは約束できないけれど。

「ね、何でも言うこと聞くから」

「…言ったな」

スレインが片眉を上げてにやりと笑った。

「起きたら、フルコースが食べたい」

「何系の？」

「中華」

「中華か…」

もう寝る、と壁を向いて布団を被ってしまった。中華か。棒棒鶏に小籠包、青椒肉絲に胡麻団子。北京ダックは、スーパ一の品揃えとの勝負だな。あと青島麦酒。これから買い出しだ。

「他には？」

「寝るからどっか行け」

「…じゃ、買い物行ってくるから」

髪に顔を近づけると、頭突きで反撃された。鼻が痛い。寝室のドアを閉める。

「昨日は確かに、やりすぎたかな」
でも、すごくよかったと思うんだけど。

昨晚滅茶苦茶セックスした（反省の色なし）[2018-10-2]

Be my valentine.

——二月。甘い香りと花の数。

[2018-02-14]

二月十四日。

仕事を終えてくたくたになった伊奈帆が玄関の扉を開けると、目の前にずい、とそれは迫ってきた。突き出された両腕の向こう側から、スレインのつつけんどんな声が聞こえる。

「……ただいま。何？」

「やる」

伊奈帆は両手に持っていた紙袋の持ち手を腕に通して、両手で受け取った。意図も意味も分からない。玄関先で、手の中に収まったものをまじまじと見る。

これは弁当箱だ。

伊奈帆が職場に持っていく青い二段重ねの弁当箱。包みはしていない。仕事がある日は二日に一度くらい弁当を持参する。今日は持って行かなかったから、家にあった。

「……どういうこと？」

まさか夕飯に弁当を作ったわけではないだろう、と嵩張る紙袋でもたつく手

で弁当箱の蓋を開ける。伊奈帆は、数秒間の沈黙と共に中身を凝視し固まった。スレインは、廊下の壁に肩をもたれかけさせて腕を組んでいる。不機嫌そうな表情を貼りつけているが、伊奈帆の反応を窺っているようだ。

開けた瞬間、まず甘い香りが広がった。

四つ入っている。丸くて、茶色い。銀色のアルミ箔が蛍光灯の光を反射した。

あれ、材料あつたつけ、と関係ないところで思考が進む。卵はもちろんある。

小麦粉、砂糖、牛乳、バター。うん、ある。ベーキングパウダーはないけど、重曹を使ったのか。チョコはないから、この色はココアだろうか。

このアルミカップは、弁当の仕切りで使っているものだ。ああ、そうか。包装紙や袋なんでものはこの家にはないから。だから弁当箱に入れたのか。一応、驚かせるつもりなんだ。少し悔しいが、その目論見は大成功だ。驚いたのなんの。くう、と腹が鳴った。

「え？何？君が作ったの？」

アルミカップのチョコマドレーヌだった。

伊奈帆は弁当箱の中身とスレインの顔に視線を数度往復させた。スレインが鼻を鳴らしてそっぽを向く。細い指先がトトン、と組んだ腕の肘を神経質に動いた。

「文句あるか。…美味しくできたと、思うけれど」

口を尖らせてつんけんしているが、分かる。これはかなり照れている。

はた、とあることに気づき伊奈帆はスレインに詰め寄る。聞きたいことがある。

「いつ？」

「今日。昼」

「まさか、エプロンをして？」

そう。エプロンだ。基本的に普段の食事は伊奈帆が作るので、スレインはエプロンをかけない。洗い物をするときも、他の家事をするときも。着用する習慣がないのだ。だから洗い物の後に泡や水滴が衣服につくのも気にしない。気にしないのだが。

お菓子作りという、とんでもなく汚れやすい調理工程を経て、彼の服は全く汚

れていない。エプロンをかけていなければ当然、服は粉まみれ染みだらけになっているはず。それが無い。

「…お前のを勝手に借りた。…まずかったか？」

やっぱり。

表情にも態度にも出さないが、伊奈帆は膝から崩れ落ちそうになった。

スレインのエプロン姿。しかも、伊奈帆のために慣れないお菓子を、こっそりと。まずいわけないが、どうしてだ。

「なんて勿体ない。どうして僕のいない時にそういうことするの」

「…？何を怒っているのか、分からないが…」

スレインが引いている。伊奈帆は我に返って慌てて言った。

「いや、待って。そう、ありがとう。まさか、君から貰えるとは思っていなかったからすごく嬉しい」

「…別に。暇だったから」

「一応確認するけれど、今日がバレンタインデーだと知っていて、これを作った

の？」

そう。今日は二月十四日。聖バレンタインデー。

義理チョコ、友チョコ、逆チョコ、自分チョコなどなんでもありと言える昨今だが、基本的には女性が意中の男性にチョコレートを贈る、という文化の中で伊奈帆は育った。スレインがそんな世論を知っているとは思ってもみなかったが。「ああ。日本では、バレンタインというのは友人や世話になっっている人へ、チョコレートで感謝の気持ちを表明するのだろうか？テレビで言っていた」

「その知識はあながち間違っていないが、偏っている」

伊奈帆の両腕では、六つの紙袋が地球の重力を訴えている。バレンタインデーチョコなんて、幼い頃は、姉と幼馴染以外から貰った覚えはほとんどないというのに、今年はチョコをはじめとした各種プレゼントを贈られた、というより押し付けられた体で持ち帰ってきた。

どうやら、軍神と称される十九歳の地球連合軍少尉は人気者らしい、と自分を客観的に分析する。上司や年上の贈り物は断りにくい、と言いながら、伊奈帆は

その紙袋を五つ、腕から外してスレインに渡した。「いろいろもらったなあ」と呑気な声が聞こえた。義理とか本命とかいう概念は全く理解していないようで、伊奈帆は拍子抜けした。

でも、世話になっていると認識し、こっそりお菓子を作っていたなんて。これはもう、なんというか、すごくいい。伊奈帆は弁当箱の中に手を伸ばす。

一つ、マドレーヌのアルミ箔を取って口に運ぶ。少しもそもそしているけれど、甘くて美味しい。

二つ目を口に運ぶ。こんなものを作れるなんて、知らなかったな。いくら混ぜて焼くだけのお菓子とはいえ、料理はまだまだ不慣れで危なっかしいんだから。三つ目のアルミ箔を剥がしにかかる。しかし、どうしてこんなことを思いついたのやら。いや、それはもう、とても嬉しいけれど。しかしこれじゃあ、こちらの立場がないじゃないか。

四つ目を手に取る。全く、予想外だ。一緒に暮らして、本当に飽きない。大体、普段はエプロンなんてこちらが言ってもかけないくせに、なんで僕のいない時

に限って。一緒に暮らすようになって結構経つけれど、なかなか見られないのになんて勿体ない。

ぐくりと飲み込むと、空になった弁当箱をスレインの手が回収していった。溜め息と、呆れた声が降ってくる。

「全部食べるとは……。そんなにお腹がすいていたのか？」

お腹もそうだが心も満たされた。伊奈帆が靴を脱ぐと、スレインは先に立って廊下を引き返す。それに続く。

「美味しかった。ねえ、なくなったからもう一回作ってよ」

「そんなに好きだったか？」

スレインの不思議そうな声に、伊奈帆は小さく息を吐く。分かってないけど、そこもいい。

「そういうことでいいよ」

リビングに入る。暖かさに、伊奈帆の頬が綻ぶ。

帰ってきて、明るく暖かい部屋に、好きな人がいる。これはすごいことだ。し

かも、今日は慣れないお菓子まで作ってくれた。

「そうだスレイン」

「何？」

テールに伊奈帆が持ち帰った紙袋を置いたスレインに、伊奈帆は一つ腕にかけていた紙袋の中身を掴み差し出した。

「これ。あげるよ」

スレインは目を丸くしてしばらく伊奈帆の顔と手に掴んだものを眺めていたが、おずおずと手を伸ばし受け取った。抱えて、腕の中の贈り物に目を落とす。

「こんな花……どうしたんだ？」

香りを確かめるようにスレインの臉が下りるのを見て、少し高かったけれど花にして良かった、と伊奈帆は思った。

「君の生まれ故郷では、本や花を贈るって聞いたから。貰ってよ」

スレインは花束をじいっと見ている。伊奈帆も見る。赤い薔薇の花が、一、二、三、……十一。

「…一本、買い忘れたのか？」

「何の話？」

「いや。何でもない」

スレインがくると背を向けてキッチンへ向かった。花を活けるのだろう。それを見送り、伊奈帆もマフラーやらジャンパーやらの防寒着を脱いで片付け、エプロン片手にキッチンへ向かう。

「さあ、ご飯にしよう。今日は一緒に作ろうよ。エプロンは貸してあげるから」
スレインは水を張った洗い桶に茎を浸し、一本一本丁寧に切っていた。雫に濡れた赤い花びらは生き生きとしている。伊奈帆の言葉に『ああ。ちょっと、これだけ』と答えるスレインの声と表情には、自然な嬉しさが滲んでいた。

『十一本ですと、大切にしたいもの、という意味になります』

花屋の店員の言葉を思い出して、伊奈帆は鼻の頭を掻いた。

▷エプロンのはなし

うーん…困った。

玄関を開けてたつぷり五秒は静止して、界塚伊奈帆は口を開いた。

「その格好…」

「気に入らないのか？」

スレインがおかしいな、と自分の体をあちこち見下ろした。動く度ひらりと揺れる青いエプロンの裾。ちなみに、淡いチェック模様。

「いや。気に入らないとは、言っていない」

「そ、…そうか？」

つい大きな声を出してしまった。そう、気に入らないわけじゃない。どちらかというと、かなりいい。いや、すごく。

しかし。

「どういう、心境の変化？こんなの、持ってたっけ」

「ユキさんが、この間くれて」

そうか。なら仕方がない。善意百パーセントの贈り物に違いない。

「…この着方は、一体誰に？」

「カームさんが」

そうか。…仕方ない。からかい半分おもしろ半分だろうが、今度何かご馳走しよう。

「…その、お玉は？」

「ああ。シチュー、出来てるぞ」

そんな、掻き混ぜた後のお玉を持ってくるなんて。ほら、白いの垂れてるって。伊奈帆は玄関の鍵を閉めて靴を脱いだ。

「…ご飯にしようか」

お玉を揺らしてうん、とはにかみ笑い。ちょっと、可愛いんだけど。

「今日は、上手く出来たと思うんだ」

肌色の多い後ろ姿に続いてリビングに足を踏み入れる。ミルクとコンソメのやさしい匂い。

荷物と上着をソファに置いて、キッチンに向かう。手を洗うために流しのコックを上げる。前に、コンロの前に立ったスレインの頭の上から足の下まで、視線を往復させる。

うん。可愛い、けど。

「…あのさ」

「何だ？」

お玉でクリームシチューを掬っていたスレインが、こっちを向いた。

つい顔が赤くなってしまう。

「…服、着て食べない？」

はだかえぶろん[2018-10-23]

▷お一人様1パック限りのはなし

「衣類用洗剤と、柔軟剤」

「ティッシュも」

「石鹸」

「いくつ？」

「箱で」

「卵4パックと、牛乳2パック」

「レタス、キャベツ、ハウレンソウ、トマト、ニンジン…うーん…タケノコ、ピーマン。タマネギ…とりあえず、そんなところかな」

「あとは…肉、って書いておいて」

じゃあ行こうか、と伊奈帆はエコバッグを3つ、ディバッグに放り込んだ。

「僕も行くのか？」

「こんなに沢山、一人で持てないよ」

それに、と続けて伊奈帆は靴を履く。

「特売の卵、お一人様2パックまでだから」

スレインは一つ息を吐き、早く、と急かす伊奈帆の背を追う。

「今日のおかずは？」

「ピーマンの肉詰めと、ハウレンソウの卵とじかな。それにサラダ…ニンジンの金平。ああ、ゴボウも買おう」

献立を思案する伊奈帆の手の中には、カーシヴのメモ。

買い出し[2018-10-11]

3/14

——三月。一輪の花を君に。

[2018-03-13]

「買い物に行こう」

夕食を終えて洗い物が済み、スレインがリビングのソファで読みかけの本のドッグイヤーを伸ばしたところでそう話しかけられた。壁掛け時計で時刻を確認する。午後八時四十五分。いつもなら、この後は思い思いに過ごし、風呂に入って寝るだけの時間帯だ。見上げると、声の主はもうジャケットを着てディバッグを手を持っている。

「…今から？」

一応聞くと、界塚伊奈帆は神妙な顔でうん、と頷いた。

徒歩で十分ほどのスーパーを、いつも伊奈帆は利用している。スレインの外出は伊奈帆と一緒に許可されている。休日は人が多いので、伊奈帆が一人で買い出しに出かけることが多い。スレインにとっては、久しぶりの外出である。

「ちょっと待って」

スーパーでカートを引こうとしたスレインを伊奈帆は止めた。そのカートは車輪が煩い。いくつか試さないと。いつになく真剣な顔でカートを吟味し始める。スレインは近くに突っ立ったまま、軍神殿のこんな姿を火星騎士が見たら泣くな、と思っていた。結局三つほど試して、これがいい、と伊奈帆はカートを転がす。自動ドアが開き、軽やかで能天気な音楽が聞こえてきた。

「明日が三月十四日だって忘れていた」

買い物かごをカートにセットして、伊奈帆がぼやくように言った。スレインは首を傾げる。

「何の日だ？」

何か、記念日があったろうか。記憶にない。伊奈帆がレジの近く、店内の一角を指示した。進行方向もそちらだ。近づく、と、小綺麗な包みが整然と並べられているのがわかる。薄いブルーのポスターには、大きく明日の日付が印字されていた。

「ホワイトデーだよ」

「ホワイトデー？」

白い日。一体、何が白いのだろう。なぜか瞬時に、驚きの白さ、という言葉が浮かんだ。耳に残るコマ・シヤルを思い出し、随分呑気なことを考えるようになったものだ、と我が身を振り返る。…ああ、もしかして、洗濯の日だろうか。それとも、ワイシヤツ・デーかもしれない。「そもそも、ワイシヤツはホワイトシヤツの略形だ」と以前伊奈帆が聞いてもいない蘊蓄を話しながらアイロンがけをしていたの思い出した。

「そうか、君は知らないのか」

そう言えば、日本独特の文化だったな、と伊奈帆は説明を始めた。

「バレンタインデーにチョコレートをもらった人が、送り主にお返しをする日だよ」

「へえ」

そういえば、先月、伊奈帆はチョコレートをはじめとする様々な贈り物を両手

に下げて帰ってきていた。食品群は、少しずつ消費されようやくなかったところだ。かなりたくさんあった気がする。全員に返すのは無理だけど、と伊奈帆は続ける。

「明日、職場の人くらいには返さないと、小言を言われる」
「なるほど」

伊奈帆は、そのエリアで包装用の袋をいくつか選び、かごに放り込んだ。方向転換し、カートを押す彼に続く。食料品売り場に向かっていているようだ。どうやら、これから何か作るつもりらしい。

「…僕を連れてきた意味はあるのか？」

「君にもお返しをしたいから。好みを聞こうと思って」

伊奈帆は卵のパックに手を伸ばす。冷蔵庫に、まだ一パックまるまる入っているが。

「クッキーにしようと思うけれど、どう？」

どう、とは別の菓子類がいいか、味付けはどうするか、という質問だろう。ス

レインは数秒考えたが、返答しかねた。菓子類に、特に嗜好はない。そもそも、甘いものはそれほど食べたい対象ではない。それに、バレンタインデーに双方贈りあったわけだから、もうお返しはいらないのではないか、と考えてしまう。

「別にいい。花をくれたし……」

もう枯れてしまったが、二週間くらい花の世話ができた。思いがけない贈り物は照れくさいがとても嬉しかったので、スレインとしてはそれで十分だった。

「ああ、それなら花にしようか。良かったら、レジの近くに花屋があるから、見ておいでよ」

言われて伊奈帆の視線を追うと、スーパーの出入り口付近、こじんまりとしたスペースに花がディスプレイされている。フロアと地続きでドアもない。いくつかの花桶と、包装された鉢植え、レジカウOUNTER。壁面にガラス戸があり、奥には温度管理が必要な花が保管されているらしい。屋外なら、市場のような感じだろう。スーパーとの境界あたりに丈の低い看板があり、店の名前らしい文字が読み取れた。

「…離れていいのか？」

「こんなの、離れる内に入らないよ」

行ってきたよ、という伊奈帆に、スレインは躊躇いがちに頷いた。

「…じゃあ、そこで待ってるから」

「うん。好きな選んでおいて」

「お待たせ」

伊奈帆が買い物袋を提げてやってくると、スレインが振り向いた。手に、ピンのチューリップを持っている。伊奈帆にはその花びらが少し開きすぎに見えるが、まっすぐな茎は手入れが行き届いて、活き活きとした印象だ。ちょっと意外に思いながら、伊奈帆はスレインを見た。

「それにするの？」

スレインがいや、と首を振ると、茎も軽やかに揺れた。揺れるハート形の花弁

が、なんだか可愛らしい。なるほど、チューリップも、案外悪くない。

「これはもらったんだ」

「へえ」

視線を送ると、レジの近くにいた店員が気付いてウインクした。いつぞや、花言葉を聞いた店員だ。もう一度、やわらかな色彩の花びらへと焦点を合わせる。

なるほど。花びらが開いている理由が分かった。おそらくこのチューリップは、数時間後には廃棄処分運命にあるのだろう。とはいえ無料でプレゼントするとは、このような店舗で勤務する日本の従業員にしては、大らかで気さくである。

「他にも、好きなものを選んでよ。ちゃんと僕から贈りたいから」

「じゃあ」

スレインはスマートに数歩移動した。そこにあったのは、やはりというか、赤い薔薇だ。そこから一輪だけ引き抜き、香りを確かめるように顔に近づけている。赤い薔薇を持つ横顔は、なかなか絵になる。

「これにする」

すたすたと戻り、スレインは手にした一輪を伊奈帆に差し出した。

「え？一つでいいの？」

「ああ」

「ふうん」

店員が花を包んでいる間、スレインは少し離れたところで花を眺めていた。伊奈帆にとっては、見たことはあるが名前も知らない花だ。前髪で隠れて表情はよく見えないが、嬉しそうに見える。一緒に来て良かったな、と一度目を閉じた。

会計が済んで花屋を出るとき、伊奈帆は二輪の花束をスレインに渡した。「お返し」と言うと、「ありがとう」と返事があった。憂いを表情筋に張り付けているようなスレインには珍しく、頬には明るい微笑みが浮かんでいた。そんなに無防備な顔を向けられると、ついそっぽを向いてしまう。

自動ドアが開くと、肌寒い風が頬を掠めた。店舗の明かりや看板で明るい夜道を、並んで歩く。見上げてみても、星はあまりよく見えない。仕方がないので伊奈帆は時々、横目でスレインを見た。左手に花束を立てて持って、右手を胸の近

くで添えている。表情は穏やかだ。時々、手の中の花に視線を落とす。その視線を追う。蕾が開きかけの赤い薔薇と、花びらが開ききった淡紅色のチューリップ。

多分、花言葉に意味があるんだろう。一本のバラの花言葉は、確か、十二本のと同じくらい気障で恥ずかしかった気がする。あの時、店員が薔薇の本数の意味を一から順に説明してくれたが、十一本まで聞いたところで決めてしまったのだ。後から調べて十二本目までちゃんと聞いておくんだ、と頭を抱えた伊奈帆だった。

家に帰り着くと、もう九時半だった。連れ立ってキッチンに入り、買ってきたものを整理する。材料を並べ、調理器具を取り出す伊奈帆を尻目に、スレインは花を活けるとさっさとリビングに引き返していった。花瓶を持った後ろ姿を見送り、伊奈帆はクッキーの制作に取り掛かった。

「…あのさ」

焼きに入ったところで、伊奈帆はキッチンカウンターから、リビングのソファで本を読んでいるスレインに声をかけた。スレインは顔を上げて、視線を伊奈帆に向ける。その目は途中、テーブルの上の花で留まった。

「何だ」

「花言葉を調べただけど、よく分からないから教えてほしい」

「…」

スレインは不思議そうな顔をしている。なんだか恥ずかしい話題だな、と思うながら、伊奈帆は続けた。

「僕が贈った薔薇は、あれは、一輪とカウントするの？それとも、前の十一本と

合計するのか？あと、あのチュールリップは含めるのか？それを僕はどう解釈すればいい？」

スレインはページの端を折り、本を置いた。肘をソファの背に乘せて、上半身に向ける姿勢で座り直した。感情が読み取れない表情で、瞬き少なく伊奈帆を見ている。言葉を待って見返していると、しばしの沈黙の後、ふう、と息を大きく吐いたのが分かった。ため息だ。

「…相変わらず、理屈っぽくて情緒がない」

スレインは呆れたように笑った。前にも同じことを言われたが、以前とは全く違う響きを持って伊奈帆には聞こえた。

「君のすることが分かりにくい」

「…正解なんてないさ」

スレインは立ち上がり、テーブルに近づき花瓶に手を伸ばした。二輪の花から薔薇だけを抜き出し、テーブルに軽く腰を預けた姿勢でくると指の腹で回している。棘はないようだ。俯いていて、どんな顔をしているのかよく分からない

い。スレインが指を止めて、花から伊奈帆へ視線を上げた。

「…この薔薇は、君がくれて今では僕のものになったわけだけれど」

「うん」

スレインはなんともいえない表情で首を傾げた。香りを確かめるように花を持ち上げ目を閉じる。ゆっくりと瞼を持ち上げた時には、口元は弧を描いていた。一つ一つの動作がやけに堂に入って、映画でも見ているかのようなだった。うっかり見落れてしまったようで、気がつくとスレインはキッチンのカウンターを回り、伊奈帆から二歩ほどのところに立っていた。視界の、金と白と碧、そして赤のコントラストが鮮やかだった。中心の碧がふっと消え、次の瞬間、スレインはとてつもなく優雅な動きで片膝を折り、頭を垂れていた。見下ろす髪と項が蛍光灯に照らされ眩しいくらいだ。意外な展開に、伊奈帆は呆然と立ち尽くしてしまっ

った。

「君に贈りたい。…受け取ってくださいか」

「…え？」

控えめに差し出された花と、その奥の彼の顔を交互に見る。現実離れたシチュエーションに二の句が継げずにいると、スレインはくすりと笑って顔を上げた。きれいな顔だ。やわらかい表情だが、吸い込まれそうな瞳をしている。

「君から、これで十二本の薔薇をもらったことになる。これは、その返答だと思ってくれればいい」

ええと、どういうことだろう。十二本の薔薇の意味はなんだったかな。ああ、そうか。そうだった。あと、一輪の薔薇の花言葉は、たしか……。とにかく、これがスレインの考えたお返しというやつなんだ、と伊奈帆はホイップクリームみたいに攪拌された思考でようやく辿り着いた。そして、なんとも気障なことをする、と無性に腹がたってくる。なんか、ちょっと格好いいんじゃないか。

スレインの差し出す赤い花に手を伸ばす。触ると、茎は少し濡れてひやりとしていた。瑞々しい光沢を放つ、一枚一枚の花弁に目が吸い寄せられる。

花って、こんなに綺麗だったっけ。棘が抜かれた茎の、つるりとした感触を指でなぞる。一枚一枚の花びらが作り出す曲線が美しい。顔に近づけると、急に香

りが立ったように、馨しい空気が感じられた。花も生きているんだな、ということを感じた。

薔薇の花に気を取られていると、いつのまにかスレインの右手が伊奈帆の左手を持ち上げてあいた。指先に唇が触れる。上目遣いに視線が合わされて、引き締まった口元が動いた。

「I love you」

しばらく視線がかち合ったあと、スレインはにっこり笑って片目をつぶった。くすくすと、忍び笑いで肩が震えている。伊奈帆は解放された左手で額を覆った。顔が熱い。心臓の音が大きい。触覚がふわふわして、せっかくの花を取り落とし、てしまいそうだ。

しばらく、まともに視線を合わせられそうにない。

「…ああ、もう」

格好良すぎる。これでは、情緒がないと言われても仕方がない。降参だ。いよいよ大きくなる笑い声をバックに、背後のオーブンが軽快な電子音を鳴らす。

なんだかやたらと悔しくて、この熱々のクッキーを口に詰め込んでやろうか、と笑窪の浮かんだ頬を横目で睨み、伊奈帆はオーブンを開けた。

初夏とうたた寝とアイスクリーム

—
夏の光の中で。

[2017-07-05]

伊奈帆が買い物から帰ってくると、スレインがリビングの床に仰向けになって寝ていた。顔の横で投げ出された右手の近くに、本が開きっぱなしで転がっている。読書の最中に眠ったらしい。

「こんなところで寝て。風邪ひくよ」

聞こえているはずもないか。とりあえず先にキッチンへ足を踏み入れる。伊奈帆は額の汗を拭い、買い物袋の中身を取り出した。冷蔵庫の扉を開けて、使いやすいうように並べていく。卵、鶏肉、葱、トマト、茄子、胡瓜……

「これは、後かな」

霜の張り付いたアイスを手に取り、少し眺めてから冷凍庫に入れた。暑かったから、帰ったらすぐに食べようと思っていたのだけだ。

室内にふわりと風が吹きこむ。膨らんだレースカーテンの動きに合わせて、白い光がちらちらと揺れた。涼し気な光景だが、気温も湿気も高く風はぬるい。汗がこめかみを伝った。

中身を全部仕舞い、買い物袋をざっと畳んでリビングに戻る。スレインは相変

わらず床に転がって寝ていた。剥き出しの腕と足先が生白い。フローリングの床が冷えすぎないように、少し温度設定を上げてからクーラーのスイッチを入れる。ふうん、と室外機のファンが音を立てて回り始めた。

そのままりビングを横切り、開いていた窓を閉め、カーテンを開ける。室外は強い日差しで、ビビットな青空をバックに大きな入道雲が峰のように連なっている。

きつとどこか見知らぬ町では、向日葵が風に揺れているだろう。

「スレイン」

近くにしゃがんで、肩を揺する。が、全く起きる気配はない。穏やかな寝息に、起こすことを諦めて横に座った。スレインの右手の先で転がっていた本が目についたので、手に取り、パラパラとめくる。この間、伊奈帆が勧めた哲学書だ。気になったところを覚えておくためか、ページの端の折り跡が数か所あった。本が傷むなあ、と心の中で小言を言いつつ、折り跡のページを眺める。

「…暇だなあ」

それにも飽きて、本を適当に放り出して足を伸ばした。後ろ手で体を支え、スレインを見下ろす。今日はグレイのTシャツにブルージーンズの普段着だ。靴下は履いていない。仰向けで、両足が半歩分ほど開いて並んでいる。右手は顔の横で卵を掴むように軽く握られて、左手は腹の上に置かれていた。その下にあるシヤツの裾が少し捲れ、薄い腹が見える。

「：お腹なんか出して、子どもみたいだな」

服を直してやろう、と手を伸ばす途中。形のいい臍が目に入った。少し割れた腹筋の中心にある、小さな窪み。

ふと悪戯心が沸き起こり、その臍に顔を近づける。白い腹、ジーンズの留め具の少し上にあるそこがやけに気になる。

ぺろり、と舐めてみた。

「う：」

小さな呻きが耳に届く。起きたか、と思ったが、スレインは眠ったまま顔の向きを少し変えただけ。半開きの唇から規則正しい寝息が聞こえる。よし。

れる、ともう一度臍を舐めた。味はしない。美味しくも不味くもない。しかしやめる気とタイミングを逸して、伊奈帆は臍の奥を舌尖でぐりぐりと押してみた。

「んん…」

さっきよりも呻き声が大きくなった。腹の上に屈み込んだまま、ちらりとスレインの表情を窺う。目はしっかりと閉じられている。少し眉根が寄っているが、起きてはいない。すうすうと、睡眠中のゆっくりとした呼吸音が室外機の音と合わさって、この空間をひどく静かに感じる。

興に乗ってきて、今度は臍をぢう、と吸ってみた。ぴく、と腹筋が強張り腹が凹む。また、息を詰めるような小さな声が色の薄い唇の隙間から零れた。でも、まだ起きない。

今度は固い腰骨を両手で掴み、腹の割れ目に舌を這わせてみた。ぴく、ぴくと腹の筋肉が寄った。

「…あ、…はあ…」

呼吸が荒くなってきたが、まだ起きない。そのまま続けていると、触れる肌がしっとりと汗ばんできた。右手でゆっくりと上下に腰を撫でまわす。少し熱くて、つやつやしていて気持ちいい。

脇腹から背骨にさわさわと指を這わせた。指の動きにあわせて時折筋肉が張り、その震えが手の平を通して伝わってくる。

「う……ん、んあ、……あ」

触るのに夢中になっていて気付かなかったが、割と大きなスレインの声が耳に飛びこんできた。うう、と唸って体を捻る。

起きたらしい。

「あ、っつい……」

スレインの右手が髪を掻き上げた。ぱち、ぱち、と緩慢に瞬きを繰り返した後、びくりと体が跳ねる。碧の瞳がぱちりと開き、きょろきょろと周囲の状況を確認する。腹の上で蹲る伊奈帆を見て、眉が寄った。

「……何してる？」

心底不思議そうにそう聞いて、スレインは逃れようと身じろいだ。しかし伊奈帆の両手が腰をしっかりと掴んでいたのも、その場から動くことはできず手足を動かすだけに終わった。

「帰ってきたら、君が寝てるから」

「…うん、だから？」

「悪戯してた」

「…い、いたずら？」

わけが分からない、と首を傾げ、スレインは急に口を噤んでそわそわと腕をさすり出した。伊奈帆の両手の中にある腰がもぞもぞと動く。

「悪戯って…。お腹が冷たい」

「お臍が出てたから、舐めてみた。味はしないね」

「はああ？ な、舐めた？」

まだ腹に頭を乗つけたままの伊奈帆の言葉に、スレインは飛び起きた。半身を起こして、腰にしがみついている伊奈帆を見下ろした。

信じられない、と額に青筋を作って思いっきり引いている。伊奈帆は構わずスレインのシャツの裾をたくし上げ、その下の生肌に頬をぴったりくっつけた。白い肌は汗でしっとり濡れている。

「暑い？汗かいてるね」

「あつい…ん、あつ…！」

汗に濡れた薄い腹を舐めると甘い声が上がった。ぱつと口を両手で塞いで、スレインは顔を真っ赤にして伊奈帆を睨みつける。伊奈帆は自身の唇を舐めて、にと笑った。

「ちょっとしょっぱい」

「うわ…、勘弁してくれ…。んっ…」

ぺろぺろと肌に浮いた汗を舐め取る。舌が肌を辿る先、スレインは息を詰めて顔を顰めるが、頬も耳も上気して目が潤む。その上漏れる声にだんだんと期待の色が混ざってきた。伊奈帆の手がジーンズの釦を外し、ジジジ…とジッパーをゆっくり下げ始め、スレインが焦り出した。

「おい、何を…」

「分かってるくせに」

すかさずかの、ウエストの隙間から手を入れる。敏感な部分を布越しに撫で上げられて、スレインの肩が跳ねた。伊奈帆の頭に手を伸ばすが、その手首を握り伊奈帆は唇に寄せた。

じゅうう、と手のひらを吸われ、ひい、とスレインの喉から声にならない悲鳴が上がった。がくがくと笑う膝の間に前かがみになって、弱々しく首を振っている。

その間も、伊奈帆の手が下着越しに包み込んで、固くなりだしたソコをくいくいと揉み込む。

「は、ちょ、やめ…。」

いじめすぎたかな、と思いつつ下を向いた顔を覗き込んだ。涙目と視線がぶつかる。

目がとろんとして、頬がばら色だった。半開きの唇からもれる吐息は熱く甘い。

切なそうな表情が非常にそそる。

「…い、伊奈帆…」

…絶対に嫌がってはいない。

「やめてもいいの？」

からかい半分でそう聞くと、スレインは顎を引いて唇を噛んだ。伊奈帆を上目づかに睨んで、ふっと視線を外す。

「……ええ、と」

今やめられても…。という言葉は聞こえないが、顔に出ている。スレインはわなわなと唇を震わせまします顔を赤くする。意地っ張りだな。そんなところが、いいんだけど。

「今、やめてもいい？」

口をぐぐ、と引き結んだスレインにきつ、と睨まれた。意地が悪い、と目が言うが、瞳は熱っぽく潤んでいるし目尻が赤く染まっている。色っぽい眼差しをじいっと見つめ返すと、根負けした碧の瞳が居心地悪そうに逸らされた。

「…でもこんな、…明るいところで…」

スレインの顔が窓へ向けられた。

そういえば、カーテンが開いている。全開だ。誰かが通りかかったら、丸見えだろう。まあ、こんなところを通る人間なんて一人もいないのだけれど。

「誰もいない」

伊奈帆はそう言って、ジーンズの中の手を下着の中に入れ、さらに奥まで滑り込ませる。へこみや窪みをなぞり、小さい尻をきゅ、とわし掴むと、スレインは仰け反って喘いだ。

「うあ…あァッ…!」

華奢な腰を引き寄せて、伊奈帆は体を起こして膝を膝で固定する。スレインは息を上げ、肘をついてぐったりと床に体を横たえた。両手で床を搔き、爪を立てて快楽の波をやり過ごそうとするが効果はないようで、何度も床の上を白い手が跳ねた。

伊奈帆は右手で性器を緩慢に愛撫しながら、左手で服を首元まで捲り上げる。

白くて肉の薄い、傷だらけの肌が露わになった。

ざらりと舌を這わせと、スレインの腰が不規則に震え、掠れるような喘ぎが漏れた。

「は…、あア、…あ、…う」

しつこいくらいに傷跡を舐めあげ、満足した伊奈帆はもう一度臍へ唇を寄せた。舌でじゅぶじゅぶ吸ったりかき回したりを繰り返すと、スレインの腿が強張った。

伊奈帆は今日は臍ばかり舐め、傷跡ばかりを愛撫する。いたたまれない心地でスレインは顔を横に向けた。頬がフローリングの冷気を感じて気持ちいい。シャツを首までたくし上げられているのに、素肌にクーラーの冷気はまったく感じられない。

それなのに自身の胸の突起が痛いくらい盛り上がっているのが分かって、触

ってもいないのに、とスレインは恥ずかしくて目をぎゅっと固く閉じた。

その途端、性器を触る手つきが変わった。直接ぐ、ぐ、と握られ擦られて、勝手に声が喉から飛び出す。

「アァッ……あ……も、う、……だめ……、あっ！」

必死に身をよじるが、膝を固定されて身動きができない。スレインは両手で顔を覆った。頭がくらくらして、ぼろぼろと涙が零れた。スレインの顔に伊奈帆が顔を近づける。

「かわいいね」

ちゅっと頬を吸って、そんなことを言う。首に伊奈帆の腕が回り、後頭部を何度か撫でられた。耳の傍の吐息が熱い。触れ合った胸がどっどっどっ、と早い鼓動を伝えてきた。涼しい顔に見えるが、鼓動と息の熱さから彼も興奮していることが分かり、ほっとする。

れろり、と耳に妙な感触を感じてスレインは思わず両手で伊奈帆の頭を押しつけようとしますが、やんわりとその手を伊奈帆の腕に戻される。顔の横に放り出

した手の指が、刺激を捉え小刻みに震えた。

「あ：ッ、そんなとこ：、あ、：んあ！」

今度は耳の穴に舌を挿れてきた。ぬばぬばと、変な音と心地に背筋がざわざわする。刺激が強すぎて、気持ち悪いのか気持ちいいのか全然分からない。

「ああ：ア！：だ、め、まって、：っ！」

おかしくなりそう。首を振ろうとするが頭を抱きこまれているので動かせない。スレインの手のひらが手近にあった伊奈帆の腕をひし、とつかまえる。

伊奈帆は器用に片手でスレインの頭を固定して耳を吸いながら、もう片方の手を前から尻の間へ何度もスライドさせた。ぐちゅぐちゅという感触が前へと後ろへと広がる。

「やめ：ッ！ん、んっ：！」

「やめていいの？」

急に耳と首を開放されて、熱の行き場をなくしたスレインは荒く息をしながら伊奈帆の顔を見た。こんなに表情に出ること、自分で知ってるのか。悪そうな

笑みを口元に浮かべて、子どもみたいに目を輝かせている。

完全に調子に乗っている。後で覚えてろよ…。

降参だ、とばかりにスレインは首を振る。悪ふざけがすぎる伊奈帆を睨みつけるが、どこ吹く風。にやりと笑って頬にキスを落とされた。

その間も、伊奈帆の手は休まず動いて、下からくちゅくちゅと卑猥な音が聞こえる。

「すごい濡れてる」

亀頭をくにくにと攻め立てられる。もう限界だ、とスレインは伊奈帆の腕に爪を立て、押し寄せる快感をなんとか押し戻そうと目を瞑り唇を嚙むが、その唇をキスで開かれて少し開いた口の隙間から、ひっきりなしに喘ぎ声が漏れる。

「はア、…あッ、あ！…も…う、…こ、の、…んあ、…あ、あ！」

「腰上げて」

伊奈帆がジーンズのウエストに両手を掛けたので、離れたスレインの手は胸の上にはばたりと落ちた。

伊奈帆がさつと衣服を剥ぎ取る。スレインはもう抵抗する気力はなく、次の動きを待つ。言うことを聞くのも癪だけれど、腰が勝手に浮いてゆらゆらと動くのを止められない。胸の上の両腕が交差して自身の肩を強く抱く。昂って、喘ぎがどんどん大きくなる。

「ああ……！あ、はア……！」

伊奈帆が裏筋を中指で辿ると、先端からじくじくと滲んできて、張り出した形ははっきりしていて、もう我慢できないくらいになってきた。

「どうする？一回出す？」

スレインは、伊奈帆の一言一言がじれったくてしょうがない。腰が床から浮き上がって左右にぐらぐら動く。伊奈帆が右手で前を焦らして触りながら、左手で浮いた尻を撫でた。切羽詰まった様子のスレインの耳元にふうっと息を吹きかけ、スレインの背中が大きく撓る。反り立つ場所が震え、先走りがとろりとろりと伝い落ちる。

「出そうか。後ろはどうする？」

「い：っ、いちいち、うるさい、な：、アアッ！」

後孔に伊奈帆の濡れた指が這い、指先が穴の周りでくるくる回り出した。ぞわぞわして、大きな声が出る。

伊奈帆はスレインの尻の割れ目に指を押し付け、ゆっくり沈ませる。つぶ、つぶ、と指先が入っては出て入っては出る。

もっと速く。もっと。もっと奥まで来てほしいのに。
ぐ。ぐり。

指がある場所を掠めた。電流が奔ったみたいに、体が言うことを聞かない。

「ああァ！はあっ……！！……あ、あ……！もう、……い、いく……っ」

「うん、いいよ」

に、と笑って伊奈帆は指を根元まで進め、ぐりぐり、ぐりとさらに強く擦り押す。スレインの体は爪先までぴんと張り、がくんと仰け反り白い喉仏が晒された。赤く薄い唇から、細い嬌声が尾を引く。飲み込まれた指がぎゅ、ぎゅ、と締め付けられ、屹立した性器がぶるりと震えた。

「はあっ……！あ……あ、ああッ……！！」

スレインはぐくぐくと体を震わせて、昂ぶりから白濁を溢れさせ達した。中身を絞り出すように根元から扱いてやる。与えられる刺激に、スレインは性器と体をぶるぶる震わせ感じている。もう出なくなると、体から力が抜ける。口を開けてはあはあと荒い呼吸を繰り返した。下りた瞼の端から水滴が零れ、寄せられた眉根には悩まし気な皺が刻まれていた。

「色っぽい」

耳元で伊奈帆が言うのと、スレインは薄く目を開く。まだ熱い、濡れた瞳を泳がせた。恥ずかしそうに膝を擦り合わせる。

「……この……ばか……」

尖らせたかわいくない唇をぢゅう、と吸いあげる。離れるとき、物欲しそうに口が開いているのを見て取り伊奈帆は聞いた。

「ねえ、最後までしてもいい？」

小首を傾げて持ち上げた手の甲にキスを落とす。スレインは赤い顔をこれ以

上ないくらい赤くした。俯いた顔の中、小さな口がぼそぼそ動く。

「……ここでやめられても……。……。その、困る」

「やった」

その言葉を待っていた、と言わんばかりの早業で、伊奈帆はスレインをひよい、と担ぎ上げた。

「うわっ……！」

急に視界が高くなり、頭がぐらりとする。いったばかりの腰がびくびくと震えて悲鳴が飛び出した。文句を言おうとするがみっともない声が出そうで悔しくて、スレインは伊奈帆の背中をどんどん叩いた。

「あっちでしょう」

伊奈帆は晴れやかな表情でいそいそと寝室へ向かう。扉を行儀悪く足で開けた。

服を全部放り出して、ベッドの上に並んで寝転ぶ。カーテンの隙間から、白い光が線になって差し込んだ。

「キスしていい？」

「そんなこと聞くな…」

スレインの顎を掬い上げ、深く深く口付ける。何度も角度を変えて、舌が絡んで奥へ手前へ吸い合った。歯列をなぞり、口蓋を舐める。喘ぐ声が呼吸に混ざり合い、伊奈帆は唇を離した。開いたままの口から伸ばされた舌をつなぐ銀糸が細く弧を描き、ぷつりと切れた。伊奈帆はほろりと笑い、舌なめずりをしてスレインを見下ろす。

白い肌の中、色づいた二つの突起がゆるく立ち上がっている。両手の人差し指でそれぞれの周りをくるくると撫でた。尖りが硬くなり、ぴくりと震える。スレインが息を呑むのが分かった。見ると、もじもじとシーツを握ったり、手を重ねたり組んだりして気を紛らわせている。

「ここ、赤くなってる」

乳首の先端をピン、と弾くとスレインの体がバネのように跳ねた。シーツを掴む手の関節が白く強張っている。

「ああ、ん！ん、まって…」

「待ってたのは君でしょ」

指の腹でくりくりと先端をいじくると、あられない声が上がった。固く尖る乳首を抓み、引っ張る。悲鳴のような喘ぎとともに腰がびくりと痙攣し、爪先がシーツに皺を作った。

また先走りがとろとろと溢れ出した先っぽに、伊奈帆は自身の先端を押し付ける。ぐちゅぐちゅしていて、気持ちいい。そのまま片手で包んで、ゆっくりと動かした。硬さを増した二つの昂ぶりを抜く。どくどくと、脈動がダイレクトに手に伝わってくる。

「はあ、きもちいい…」

次々と熱が溢れ、ぬちゃぬちゃと手を動かすたびに音が鼓膜を刺激した。ペースが速くなる。

「んああっ！ああ！……う、う……もう、やだ……」

玉の汗がつつ、と滑り落ちた。落ちた先は上気した肌。触れるとあたたかくて心地いい。傷痕の残る胸に伊奈帆は額を寄せる。スレインの腕が伊奈帆の髪を掻き混ぜ、首のあたりで両腕を緩く交差した。伊奈帆は心臓のあたりに耳を当てる。どくどくどく、と音がする。

生きてる。動いてる。

顔を上げて、静脈の浮き出た首筋に吸いつく。何度も吸って、甘く噛む。静脈の太い血流の音を口で感じる。

「……あ、あと、が……」

スレインの消え入りそうな声が聞こえた。白い手が首のあたりにたどたどしく触れる。赤い鬱血の痕が、ひらひらと舞い落ちた薔薇の花びらのように散っていた。

「あ、ごめん。つい」

スレインは諦めたような溜め息を吐くが、そんなおいしそうな首をしている

からなんだよなあ、と伊奈帆はもう一度だけ首筋にキスを落とした。今度は肌が一瞬だけピンクに色づき、すぐ色は消えた。すぐそこにある胸の飾りを指で抓む。そこは刺激に愛らしく反応を返した。

「びくびくしてる。好きだよね、ここいじられるの」

「そん、な、…こと。…ッ、…ん、……っ、…ああ！」

赤く色づきぷくりと浮き出た乳首を、口に含んで舌でころころ舐め回す。スレインが嬌声を上げて首を振り、金の髪が汗で額に纏わりついた。胸骨がぼこぼこ和ぶ胸が呼吸で大きく上下している。腰が様々な角度に誘うように揺れ、膝が開いて足先がシャツに襞を作った。

伊奈帆は膝の間に体を入れ、腿を開いて足の間に分け入る。ぷくり、と強張る膝を持ち上げると目が合った。濡れた瞳が期待と不安で揺れている。伊奈帆は聞いた。

「ほぐすよ。いい？」

もう言葉にならないのか、スレインはこくりと頷く。腰がしなやかに撓み揺れ

て、伊奈帆を奥に誘った。中指が窄まりに触れる。ひくひくと震えるソコを濡れた指で撫でて押す。

「…ッ、ん…。は、あ…。」

もう弛緩していて、すぐに指を飲み込んだ。中はさらりと湿って温かく、きゅうと指に吸い付いた。傷つけないように慎重に掻き混ぜ、二本、三本と指を増やしていく。息を詰めていたスレインが、大きく息を吐いた。見ると、水気を含んだ睫毛のカーテンの下、とろけるような目で伊奈帆を見ている。目が合うと内壁がきゅうと吸い付き、掠れ声を上げ眉を顰めた。

「ああ、…もう、はや、く…。」

スレインの足が伊奈帆の腰に回されて、ぐいぐいと引き寄せる。背中を反らし、ああ、あ、はやく、と何度もねだる声。

いつもはこんなに乱れないのに。今日はよっぽどいいらしい。

「うん、…ちょっと待って」

伊奈帆は体を起こして、ベッドサイドの引き出しからコンドームとローション

ンを取り出した。コンドームの封を切ろうとすると、ばっ、と自分ではない手が目の前を掠めた。

「え、何」

スレインが袋を口に咥え、気怠そうに体を起こした。

「……つけてやるから」

髪をかき上げ目を伏せる。両手についてにじり寄ってくる仕草の一つ一つが、噎せ返るほど艶やかだ。

「うわ、いいね……」

スレインは片眉を上げて、視線を外した。コンドームの袋を口に咥えたまま、照れ顔で口をへの字に曲げる。関節の目立つ細い指がローションの蓋を開け、中身を手のひらに落とした。両手を擦り温めながら、聞き取りにくい声でごによごにと口を動かした。

「その、よくしてくれたから……」

スレインは四つん這いになって肘をつき、両手で伊奈帆を包みゆっくりと撫

で上げた。

ぬるぬると温かい感触に、伊奈帆の口から思わず息が漏れる。上下に動かすときにどう指を使っているのか、裏筋からくる刺激がとんでもない。気持ちよすぎてすぐにいってしまいそうだ。

「ん、く……」

大きく張り詰めたソコと吐息を漏らす伊奈帆の顔を見て、スレインは満足そうに口角を上げた。咥えていた袋を片手で開け、するりと着けたゴムの上から手に残ったローションを丁寧に塗りつけ軽く扱く。睾丸がぶるりと震えた。

スレインは立膝で伊奈帆の上に乗っかり、肩に手を乗せ肌を寄せた。胡坐をかいた伊奈帆の上にまたがっているような恰好になる。見上げていると恥ずかしそうにふいと顔を逸らしたが、腰が中空で誘うように円を描いた。

「え、この体勢でいくの？」

「……たまには」

うっそりと微笑んで、スレインはゆっくりと腰を揺らし始めた。当たった、と

思ったら離れて、回を増すごとに当たったときの沈み方が深くなっていく。

「きもちいい、すぐいきそう…」

「はあ…、んっ！…お前、もう、少し、…静かにつ、できないのか…っ」

「自分だって、すごい声出してたじゃないか…」

体が動く、密着した胸の間でペンダントの鎖が揺れた。もう半分くらい挿入した。スレインは伊奈帆の肩口に額をつき、大きく息を吐く。

「まだ、いくなよ…」

そうは言われても結構やばい。…耳元でなんて声を出すんだ。

「頑張る」

細腰を両手で掴んで揺する。ずちずちと、粘性のある音が接合部の摩擦とともに大きくなる。奥を突くと、悲鳴のような喘ぎが途切れ途切れに吐き出された。

「うあ…、アあっ…！ひっ…あ…！あ、っあ！」

角度をずらして押し込んで、何度も壁にあたる。スレインの腰の動き方があまりにもよくて、意識を持っていかれそうになる。向こうもかなりいいようで、先

走りが止めどなく溢れソコは先端から根元までてらてら濡れていた。

「あ…っ、あ…、ん！あ、ああっ！」

伊奈帆はスレインの腰骨の出っ張りを掴み引き寄せ、自身の腰を浮かせてぐっと奥まで押し付ける。中の肉がきゅうと吸い付く。スレインは激しく喘ぎ腰を浮かせるが、伊奈帆はその背中に腕を回して抱きしめた。中は熱い。啞え込んだ入り口がきゅうきゅう締まった。

「アアああっ…！あアッ……！！」

「逃げないで、…う、っく」

スレインの中が痙攣を初め、両腕が強すぎる刺激から逃れようと空を掴んだ。回した腕に力を込めて、重く腰を打ち付ける。ぐ、ぐ、と最奥を穿つと、スレインの足の指がぴんと伸びた。何かを掴もうと泳ぐ手が、伊奈帆の肩に下りた。扶るように中をかく。スレインの背中が弓なりになる。胸が離れ、腕が伸びる。腰を支える。伊奈帆の肩に指の爪が食い込んだ。

「っああ！あっ…あ！ア、ア！」

絶頂を迎えようと、伊奈帆の上で激しく腰を揺らしている。お互いすぐそこ。
できれば、一緒に。

「…は、倒すよ」

振り乱す頭を抱き寄せて、背を支えて押し倒す。喘ぎ続け掠れ始めた声が耳にこだまし、内部の熱量が高まる。スレインは伊奈帆の腰の後ろで両足を交差させ、腹をぎゅうと締めあげた。中もぐねぐね動き、兆しがある。大きく速くなるばん、ばんと肉のぶつかり合う音。奥まで何度も打ち付ける。先端が押し戻され、また押しして。粘着質な水音が、喘ぎと軋みと接触音と混然一体となり、薄暗い室内に反響する。

皿さ揺れるカーテンから差し込む、細長い光の束。

一筋の光が、金の髪を掠めた。

綺麗だ。

「ああっ！ア…！あ、…ア、いっ、いく…！」

「うん、僕も…っ！」

カーテンの隙間から差し込む光が、赤みを帯び始めた。

「昼間から、恥ずかしい……。ちょっと昼寝してただけで、どうしてこんな」
スレインが枕を抱え込み、ううう、と突っ伏した。茹蛸のように耳を真っ赤にしてぶつぶつと文句を言っている。今更だと思うけど。

「ノリノリだったじゃないか。またしよう」

明るいとろいろとよく見えるし、恥ずかしそうな表情がそそる。何回かしたあと、いい加減疲れたし腹が空いたのでやめにした。いつもならそのまま眠ってしまうのだが、こうやって一緒に寝転んで話すのもいいな、と伊奈帆は思う。軽口の応酬は楽しいし、彼の体温をすぐ傍に感じる。

そうか。これが愛ってやつかもしれない。

もう夕方だ。そろそろ晩御飯の支度をしないと。伊奈帆は冷蔵庫の中身を頭の中に思い描く。

「そうだ、アイスを買ってきたんだ。今食べる？夕飯の後にする？」

伊奈帆が体を起こし聞くと、スレインは枕から横目を出してうーん、と唸った。

「……………今食べる」

喉が渴いた、暑い、とぐだぐだしているスレインの肩に、床に落ちたシャツの皺を伸ばしてかけてやる。枕に接した顔面から、聞き取りにくい「ありがとう」が聞こえた。

「チョコミントとバニラがあるけど。どっちがいい？」

「…………どっちでもいい」

スレインの顔にかかる髪を指で掬い、何度か耳にかけてやる。彼はますます深く枕に顔を埋めた。

「じゃあ、半分こしようか」

スレインは首を回し枕から目を覗かせて、小さく頷いた。

枕に沈み込んで半分以上見えないが、伊奈帆が一番好きな表情だった。

▷おしりのはなし

目が覚めたら、尻を揉まれていた。ソファにうつ伏せになったまま、上半身を捻り背後を見る。思いつきり目が合った。

しばしの沈黙。気まずい。

「…やあ、ただいま」

「…おかえり」

もみもみもみもみ。

「…いや、継続するな」

「だって」

話がしにくい。首が凝ってきた。尻を揉む代わりに肩でも揉んでくれないだろ

うか。

「…やめる気配は全然ないし。

「疲れて帰ってきたら、こっちを向いたお尻があったから」

「だから？」

「だからつい」

だって、とか。つい、とか。子どもじゃあるまいし。あと、一つ言いたい。

「…パンツまで脱がすやつがあるか」

「やっぱり直だよね」

もみもみもみもみ。

「…いつまで揉む気か、聞いてもいいか」

「うーん、もうちょっと」

「はあ…」

小一時間後。

「あのまま寝る？ノーパンでお尻揉まれて？あんまり無防備じゃない？」

「パンツを脱がせたのも尻を揉んだのもお前だ」

「こんなじゃ、迂闊に留守にできないな。ちよつと心配になってきた」

「僕はお前の方が心配だ」

おしりをもむとようつうがなおるらしい[2018-09-02]

▷また、おしりのはなし

後悔先に立たず。

…という格言を噛みしめつつ、スレインはいい加減痛くなってきた肘を伸ばす。本を自分と同じ姿勢で床に伏せた。

体温が移ったフロリングにうつ伏せ。伸ばした手足。身動きはできない。その元凶の名前を呼ぶ。

「…おい、伊奈帆」

「…もうちょっと」

もみもみもみ。

「重いんだけど…」

「気にしないで」

くぐもった声が返ってきた。…尻の上から。

何が気にしないで、だ。何が。

がちりとしわし掴みにされた尻。その間に顔を埋められているこの状況。

「いいお尻だよね」

「……そこで、あんまり喋るな」

確かに、床に寝そべって本を読むのはだらしなかったと思う。熱中して、伊奈帆の帰宅に気づかなかったのも悪かった。反省している。しかし、何も言わずに尻に顔面ダイブしてくるとは。そして尻の間に鼻を押し付けて両手で揉むとは。そんなこと思わないじゃないか。

……いや、前にうっかり寝ていたらパンツを脱がされ尻を揉まれていたことがあったな。予測はできたかもしれない。

もみもみもみ、もみもみ。

戦時中はオレンジ色の悪魔と火星騎士から恐れられ、戦後は軍神として持て囃される男。そいつが男の尻に顔を埋めて尻を揉みしだいている。……どう控えめに言っても格好悪いし情けない。泣きたい気持ちになるのは自分だけではない

はず。

もみもみもみもみ、ぐい、ぐい。

「うわ！な、何？」

「脱がせていい？」

ぐいぐい、ずずず。

「あっ、待ってっ……」

「黒か。色っぽくていいね」

何パンツの色なんて……。いや、お前、朝見ただろ。

「穿いてないのいいけど、やっぱり脱がすのがたまないよね」

「……お前な」

「もうちょっとだけ。ね」

素肌にかかる息と指。……くそ、変な気分になってきた。

こいつ、これから晩御飯だって分かってるのか？

おしりばふふ[2018-11-12]

レース模様とフルコース

——いつか。君といるのが当たり前になった。

[2018-11-30]

「んっ……あッ……！」

ぱちん、とゴム紐が肌を打ち腰回りにぴりぴりと刺激が奔る。膝立ちの体勢がきつい。前のめりに倒れ込もうとすると、背後から羽交い絞めにされた。体重をかけてもびくともしない腕が、少し悔しい。両手と右頬がゆっくりシーツに着地した。

「スレイン。…もうちょっと、腰上げて」

いけしゃあしゃあと、と腹も立つが、無視をするといつはきつと図に乗る。言われたとおりに膝を折ると、胸と腹のあたりを支えていた両手が下へ下へと這い出した。

「は…あ…」

「ここ、跡がついて、赤くなってる」

伊奈帆の手が、肌と細い紐の間を指の腹で撫でて押し、爪の曲面でなぞる。腰骨の辺りをしつこく触られて、スレインはぞくぞくと背が粟立った。

「ンあ…！」

布地の凹凸に中てられて、抑えようとしても声が出てしまう。前はじゅくじゅくと濡れて昂って、先端を不揃いな糸目が擦り上げ引っかかる。すっかり染みたま布の上からソレを握られて、ヒツと喉が引き攣った。ぐちぐちという淫猥な音が耳に入る。

「ぐっしよりしてる」

伊奈帆は背中から覆いかぶさる格好でスレインの前を刺激しながら、割れ目の間に指を滑り込ませた。そこも、一枚隔てた上から押したり擦ったりされて、いつもとは違う感触が神経に伝わる。スレインは声を押し込めるため、枕に顔を押し付けた。

勢いに押されて流されたとはいえ。「一回くらいなら」なんて言うんじゃないかな。

——遡ること、三時間前。

「…伊奈帆。何だ、これは」

帰宅した伊奈帆から、素っ気なく手渡された茶色の紙袋。開けてみて、と言われるがまま、何の疑いも抱かず貼ってあったセロハンテープを剥がし封を開けた。

中身が見えて、スレインの脳内にぼんぼんと浮かぶクエスチョンマーク。

…何だ、これ。

「パンツだよ」

「見ればわかる。そういう意味じゃない」

渡された包みを開け、絶句した。次に、とりあえず出してみた。一応、広げてみる。裏と表を確認。そして目の前の男に視線を移す。仕事帰りだというのに、やけに目が輝いて見えるのは気のせいではないだろう。

この顔は、面白がっている顔だ。…それも、かなり悪い意味で。

「じゃあ、どういう意味？」

「これを、どうしろって言うんだ」

両手の親指と人差し指で摘み、目線の高さで開いた衣類。

パンツと言えぱパンツだ。まぎれもなく。

「そりゃ、パンツは履くもんだよ」

確かに一理ある。パンツは履くものそれはそうだ。しかし、お前。

「黒のレースだぞ…」

「似合うと思つて」

面積の小さい、サイドはほとんど紐一本のレースの下着。目を凝らしても目からなくらい細かい細かな総レース。透けた生地に複雑な刺繍が施されていて、何というか、無駄に高そう。

しかも袋の中をよく見ると、もう一つ何かある。

「うわっ…」

思わず取り出してしまった。伊奈帆が腕組みをして、うんうんと頷く。

黒のレースにリボン付きの、ガーターベルト。

「似合うと思って。ロマンだね」

右手と左手に、黒い下着を摘み上げ、どうしようもなく情けない気持ちでスレインはため息を吐いた。

聞きたくないが、聞いてみよう。一応。

「…これを、どうしろと？」

「履いて。お願い」

この通り、と両手を合わせてにじり寄る軍神。下げた頭の頭頂部のつむじを見つつ、スレインは思った。

かつて死線を交えた相手のこんな姿を見ることになるとは…。お前、どんな顔してこれを買ってきたんだ。値札も取ってあるし、店員に何て言って…。ああ、これ以上考えるのはやめにしよう。

きわどい下着と、それを買ってきた男の下げられた頭を見比べる。

……人生、何が起こるか分からないな。

「いやだ」

至極当然の言葉を口にする。伊奈帆はさらに距離を詰めた。

「一回だけ」

いや、人の話を聞けて。

「い、や、だ」

「…君、パンツを履いてない時もあるじゃないか」

「…」

それは。…つい癖で。でも最近は、昼間はちゃんと履いてるぞ。…今日はどうっかり忘れたけど。

「僕は、そっちの方が恥ずかしいと思うんだけど」

え？………そうなのかな。

…いや、騙されるな。こいつのペースに巻き込まれてしまうと、ろくなことがない。

「一つ聞いていいか？」

「うん、どうぞ」

「…こういうのが趣味なのか？」

黒でレースでスケスケで、肌を隠す面積が極小のパンツと花の刺繍のガーターベルト。

「白か黒か迷ったんだけど」

黒の方が、エロいかなあと。君は肌が白いから、色が引き立つと思うんだ。

伊奈帆が顎に手を当て答えた。

…そんなまっすぐな目で言われても。

「…そう、か」

聞くんじゃないかった。

伊奈帆はもう一度ぱちんと手を合わせた。可愛い仕草に反して、真剣過ぎる目が怖い。

「いつも履いてとは言わないから。今日だけ。ね、お願い。明日は、何でも君の好きなもの作るから。コース料理」

その言葉に、視線で反応してしまった。くそ、目が合った。いや、そんな期待を込めた目で見つめられても困る。

好きなもの…か。悔しいが、こいつの作る料理は美味しい。

コースか…。

「お酒もつける。じゃんじゃん飲んで」

ぐっ…。

ちらりと、壁に掛けられたカレンダーを見る。

…明日は、伊奈帆は休みだし。

……そういえば、最近してないか。

……こいつの帰りがこんなに早いのは久しぶりだし。

……溜まってるのかも。

……減るもんじゃないし。これくらいのサービスなら、してやってもい

いかな。

「……………まあ、一回くらいなら」

「本当！？」

よし！と両腕でガッツポーズを繰り出す伊奈帆。

いや…お前、そういうキャラじゃないだろう。

鼻歌交じりにキッチンへ向かう後ろ姿を、スレインは胡乱気に眺めた。

「はあ、ア…ッ！」

体が揺れると、太ももにちらちらと紐の先の留め具が当たる。それが刺激になって、無意識に腰が動いてしまう。くそ、ガーターベルトってのは、こういう使い方をするものじゃないだろう。

「ひえ…っ…あ…」

伊奈帆の手がフロントのレースを抓んで引っ張った。急に刺激から解放されて、行き場のない快感が対流する。

「パンツ、絞れるくらい濡れてる」

ピン、と手から離れた布地が伸縮して、先端に勢いをつけて戻ってくる。思わず声が裏返って、後ろが力んで穴がじくじくする。

「後ろ、きゆうきゆうしてる」

「んあ…あ、っ、…つつく、な…っ…」

こいつ…後で覚えてろよ…。とんでもなく面倒くさい料理と高い酒を頼んでやる…。

前を握りこめられ、後ろで指の先端を出し入れされて、頭がだんだん真っ白になってきた。

手の動きが速くなって、もう限界に近い。
でも…。

「ね、このまま出してよ」

「ふえ…、う、うあ…！」

右へ左へ首を振る。冗談じゃない。…だって、今の恰好。……こんなもの着けてイクなんて、恥ずかしくって死にそうだ。

「ほら、もう限界じゃない？意地張ってないで出しなよ」

耳元でぼそぼそ言うなって…、耳に、息がかかるから…！

「うあ、あ、つく…あ！あ…っ！」

「出して。パンツがくしゃぐしゃになるとこ、見たいから」

この、変態…！

「あアア…！ツア…ッああ！ア…！！！」

体を糸でぴんと吊られたみたいに、動けない。

びゆく、と溢れる白濁を、布が受け止めしとどに濡れた。液体が滲みた布の冷える感触はまるで漏らしたみたいで、かあっと頭に血がのぼる。

「…エロいな」

黒っていいな、と呟く声に、スレインはお前もう黙れ、と心の中で悪態を吐いた。

ルームランプに照らされ、てらてら光る肌と下着。荒い呼吸で上下する背中 of 動きを胸で感じつつ、伊奈帆はスレインの肩口から顔を出し彼の腰回りを見下ろした。

これは、堪らないな…。

風呂上がりの寝室。身に着けているものは、お互い下着だけ。伊奈帆は密着し

ていた体と手を離した。

「…あ、…イ、いな…？」

「ちょっとだけ待って」

そう言って、トランクスから足を引き抜く。このままだと、脱ぐタイミングを失いそうだ。それに、もう結構きつい。

うつ伏せに脱力しているスレインの後頭部を一度撫でて、肩を掴む。汗ばんだ肩は細い。

「回すよ」

「え？…ひっ…あ」

ぐるんと仰向けにされたスレインは、ぼうっとした目で天井を見上げ、次に伊奈帆の顔を見た。

「急に、びっくりする…」

「ごめん」

閉じた足首を両手で持ち上げると、恥ずかしそうに膝小僧が寄った。初心な仕

草だが、身に着けているもののせいで、とんでもなく扇情的な光景だ。腿の上で踊るガーターの紐に生唾を飲み込んだ。足の間から太腿までを濡らしているのは汗だけではない。

「足、開いて」

スレインは両手で口と目を覆って、返事をしようとしなない。邪魔な両手を引きはがして、左手で頭上に縫い留める。

「ね、足。開いて」

「…う」

息がかかるくらい顔を近づけて目を覗き込む。スレインは両手を動かそうと数度試み、観念しておずおずと膝を開いた。鼻先にキスを落としてから両腕の拘束を解き、伊奈帆は体を足の間に割り入れパンツの腰紐に手を掛けた。下方へ少しだけずらす。

「この、透けた影がまたいいね」

「うわ……。あっ……！」

腿で穿かせたまま、右手の指で窄まりをさぐる。周辺の粘液を指で掬い、ひくつくそこへ塗り込んでいく。濡れたシーツの上の尻がゆらゆら揺れて、指の先がベッドへずぶずぶ沈んだ。

「あ……んっ」

中指を簡単に根元まで飲み込んだ。関節をくいくい折り曲げ中を擦る。

「はあっ……、あ……ア！」

いいところに当たったのか、腰がビン、と浮いた。中も反応を返し、絡んだ腸壁はじつとりと熱い。

「柔らかくて熱い。きゅうきゅうしてる」

指を増やす。二本。……三本。切なそうな声が、呼吸に混ざり大きくなってきた。顔を見ると、潤んだ目と視線ががち合う。スレインは唇を噛んでぷい、と横を向くが、足は伊奈帆の腰を掴んでまだかまだかと揺すり出す。

「気持ちいい？」

「う……っ……!!……ッ！」

両手で口を覆って目を閉じてしまった。

こんなにトロトロにしているくせに。ちょっと意地悪したい気分だ。

「ねえ。指だけでこんなになるの？こっちは？」

臍のあたりから左手を這わせて、胸を撫でまわす。時々中心を掠め、円を描くように指の腹でくるくる触る。すぐに先端は赤く色づきピンと尖った。

「尖ってる。触って欲しい？」

「ふ…あ…ア…」

後ろの三本はバラバラに動かして、上下左右の内壁を刺激する。水音が聞こえるように中を掻き混ぜつつ、勃起上がった右胸の突起を親指と中指でぎゅ、と抓んだ。高い声が尾を引いて反った腰ががくがくと震えた。

ちゃり、ちゃり、とガーターベルトから垂れた紐が揺れる。

悩まし気な細腰にぴったり巻き付く黒い彩りから下、下腹部はぬめる液体で覆われ、ぽたぽたと水滴を滴らせていた。

「ア…——ッ…！あ、…も、…う…！」

スレインの下方に伸びた両手が体の左右を不器用に搔いた。皺が寄った白いシートと、力んだ指の白い関節。腰がそこじゃない、奥、と指をぐいぐい飲み込み淫肉が蠢く。伊奈帆は舌を濡らして問いかけた。

「もう、何？」

薄らと開いた瞼の下から、水の張った目が現れた。快楽で潤んで緩慢な瞬きを繰り返す恨みがましい目に満足感を覚え、伊奈帆は屈んで心臓のあたりの肌に舌を這わせる。骨と傷跡で凹凸のある皮膚を、丹念に舌で辿る。

「あァッ……！！っは、……ア、ァ！」

右胸の乳首にカブリと食いつく。出っ張ったそこは、舌で転がすともっと固く尖った。

「ンアァ……ッ！！あ、ダ、ダメ……ッ」

仰け反る喉から喘ぎ声がひっきりなしに飛び出す。腰の下、濡れた布越しの先端に腹をぐっと押し付けると、びくんびくんと背中が跳ねた。密着した腹に、お互いの固くなったモノが当たり合って動く度甘い酩酊が首の後ろを駆け上がる。

早く達したいところだけれど、もうちょっと。

「…ね、聞こえる？」

ぐちゅぐちゅ、ぐちゅ。ずっと指を動かしていた中はすっかり柔らかくなって今か今かと侵入者を待ち焦がれ震えて鳴いている。強く擦り上げると太腿が強張って筋が浮き出た。

「…ン！…あ！ちよ…あ、ア…！」

「…スレイン」

ぬぽ。

「あ、…っは、あ…？」

一気に中身を引き抜かれて、スレインは息を切らしつつ呆然と伊奈帆を見上げた。

とろんとした涙目。ハの字に下がった柳眉。上気して赤い頬と、半開きの唇から覗く歯と舌。

汗ばんだ熟れた肌を飾る、精液で濡れた黒いランジェリー。

ぐっ……。かなりクルが、ちょっと待て。冷静になれ。こんな美味しい状況、そうそうないんだから。

伊奈帆は理性を総動員して暴れ出しそうな下半身を宥め、にやりと笑った。

「ねえ、どうしてほしい？」

スレインが目を見開き、頬をさらに赤く染めて目を逸らした。

「ど、どう……。って……」

くっ……。そういうのも堪らない。もじもじと両手を合わせて指を弄ぶとか口を尖らせてごによごによさせるとか、足をそれとなく閉じ気味にするため膝を曲げるとか。

そういう恥ずかしそうな姿が一番そる。足を曲げた時にガーターベルトと股下までずり下げられたパンツの存在を思い出して目をぎゅっと瞑ったところなんか、もう最高。

「言ってみて」

至近距離で視線を合わせると、泳いだ目がまた逸らされた。困り切った顔で

「…えっと」とか「その…」を繰り返している。

ぐい、ぱちん。

「あんっ…！」

パンツのゴムで遊ぶと、体が跳ねて膝がカクカク震えた。待って、とか聞こえた気がするけれど、聞く気もなく数度ゴムを引っ張り軽く音を出す。

「ンあ…！アアッ……！ッあ…！」

「パンツ。濡れてないところ、ないね」

ずらした布の上から握る。硬く濡れて、どくどくしている。握りこんだ手を上下に動かすと、スレインの腰と腹が激しく震え、ガーターベルトの紐が淫猥に揺れた。

「ああ、ア…！」

びしょびしょになったレースの手触りが官能的でくらくらする。素材は大事だな。結構高かったけど、ちゃんとしたやつにして良かった。

すごく気持ち良さそうだし。

「ほら、早く言って。どうしてほしい？」

仰向けで口をパクパクさせて喘ぐスレインに、手を止め聞く。顔の左右で力なく投げだされた両手の指が、ぴくりと動いた。

「…うっ。…い、…い」

「い？」

きゅっと引き結んだ口元は赤く濡れている。美味しそう、と眺めていると観念したような吐息が微かに聞こえた。

「…挿れ、て、ほしい」

「何を？」

まだ言わせるか、と言いたげな視線を受け止め見返す。あ、泣きそう。

「…お」

「お？」

「お…まえ、の…」

ぐ、ぱちん。

「アッ……！」

これ、楽しいな……。病みつきになりそう。

紐を引っ張ったまま、赤い耳元に顔を近づける。

「ね、名前で」

ふうっと、耳の中に息を吹き込む。綺麗な背筋がアーチを描いて震えた。

「ふぁ……あ……」

「名前で言って」

ぱちん。

「うぁ……っ！……う。……い」

「い？」

ぽろり、と目尻から水滴がこめかみを伝った。……ちょっと意地悪しすぎたかな。

「いなほ、……の、が。……ほしい」

震える声も可愛いし色っぽい。睫毛に溜まった涙を舐め取り伊奈帆は体を起

こす。

「オッケイ」

仰向けで体を震わすスレインの足の間を大きく開き、膝を抱えて持ち上げる。ついでに、左膝の裏をべろりと舐めた。

「イヤ……あっ！」

汗で少ししょっぱい。

「嫌じゃないくせに」

両膝を肩に引っ掛け自由になった両手で、ずらした腰ひもをもう少しだけ下げる。前はレースを持ち上げたまま、後ろは尻の下まで。スレインがぎょっとして首を起こす。

「……え、……はいた、まま？」

「うん」

逃げるように動く腰をがちり掴む。腹筋に線が入って、上下左右に揺れる臍を覆うガーターベルトのレース。そこから伸びる紐。

「恥ずかし……」

「うん、だからだよ」

濡れた尻を持ち上げ数度揉む。肩の後ろにぶらさがった足が伊奈帆の背中を蹴った。足癖が悪い。

「後で…ッ、覚えてろ、よ…ッ！…あ！」

先端を押し付けると、入り口がひくひくと収縮して誘った。ぬめる後孔に腰を進める。

「…覚えてたらね」

ず、ず、とゆっくり奥を目指す。飲み込まれた場所は熱く濡れて纏わりついて、動く度に強く弱く締められる。

…記憶なんかふっとびそうに、気持ちいいんだけど。

伊奈帆は動きながら、接合を始めた箇所を見下ろす。開いた白い腿の上でひらひらと踊る紐と先端の黒いクリップ。くびれた腰を一周し臍の周りに張り付く、肌が透けるガーターベルト。濡れそぼった総レースのパンツと、刺繍の間から見える肌。腰や尻の周りは濡れて、ゴムが戻った部分の皮膚が赤く線を残している。

：いい。すごく。

視線を上げると、スレインは両手で口と目を覆って首を仰け反らせている。名前を呼ぶと、恥ずかしそうに首を振った。ぐるり、とようやく中ほどまで入った肉棒を回す。内側がぎゅう、と絡みついた。

「アアあああっ……！は、あ、ア……ッ！」

「我慢しないで、パンツの中にいっぱい出したら？」

きゅう、と下の口が返事をした。伊奈帆がくすりと息を漏らすと、スレインは肩を大きく震わせた。そして聞こえる。喘ぎではない、引き攣った声が数度。

：やばい。泣かせた。

慌てて肩を抱くがそっぽ向いたまま顔を覆っている。ひつく、としゃくり上げるような声まで聞こえてきた。

「ごめん、あんまり可愛いから。つい調子に乗った」

顔が見たくて額を合わせると、目と口を覆っていた手がゆっくり離れた。目と鼻が赤い。

「…ばか」

可愛い声音と表情。泣き顔もいいな…と油断していたら、バシ、バシン！と肩に平手が飛んできた。かなり痛い。呻き声をあげて思わず擦ると、腰の後ろをドンドン蹴られる。…そこ、ちょっと待って。敏感だから、今。ちょ、出るって。待って待って、締めないで。

ギブ、とベッドの上を叩くと、スレインがふん、と鼻を鳴らした。

「思い知ったか、このばか」

「…悪かった、ごめん」

スレインがしょうがない奴、と顔に書いて小さく笑った。

「ねえ、キスしていい？」

「……ばか、そんなの」

うん。泣き顔も可愛いけれど、やっぱり笑顔がいい。

瞼が閉じて、口も閉じた。つんと突き出した唇に唇を合わせて、舌で隙間を舐める。薄く開いて、口内に侵入すると熱い舌が絡んできた。

「ん……ふ……」

キスをしながら腰をさらに押し込む。根元まで入った。奥が熱くて、気を失いそうに気持ちがいい。じわじわ動き出すと、首の後ろに、スレインの腕が回った。腰を挟まれて、ガーターの留め具が皮膚に食い込む。腰が小刻みに揺れて、中を愛撫される。きゅんきゅんと入り口が窄まって、中がぴったり吸い付きぐねぐねと絡みつく。張り出した部分が襞のような部分で擦られて、当たった奥は熱く、押して押し返される。

「ア……アア！はっ……あ……っア！」

「やば、すぐ出そう……」

「だ、せ……って……！はあ……！ああ……っア！」

密着して腹に当たった布の濡れた感触。その下の熱さ。出し入れすると擦れる紐。カラカラと音を立てる留め具。

「うア、あ……っア……！！……あ！」

「は……スレイン……」

蛇の腹のように蠢く内部。波が次第に大きくなる。

打ち付ける奥はぎゅぎゅう押し返す。張り出した部分が強い締め付けの中熱く熟れた場所と擦れ合った。

熱い息。

熱い肌。

熱い中。

あと。

「アア！…っ！…い、いな…いなほっ…！も、いく…！」

熱い声。

「スレイン…っ！」

目が見開く。手足が止まって背が仰け反り、白い喉笛が鳴る。

目はこっちを見たまま。

「ああアア、ア…！！いな、…ほ…っああアッ！！」

びゆく、びゆるるる、びゆく。

びゅ、びゅびゅ、びゅる。

——そう、いくとき。

いつも、こつちを見るんだ。

目。熱で潤んで、欲に揺れて。それがどうしてこんなに綺麗なんだか。

「あ…は、…あ…ア」

「はあ…はあ…抜くよ」
ずるり。

「ンあっ…」

「…パンツ、どろどろだよ」

「…お前、もう本当にやめろ…」

もう肩ビンタをする気力もないようで、怠そうな声だけが飛んできた。ぐしゃぐしゃになった下着を足から抜いてホックを外し、タオルケットを掴んで隣に

倒れ込む。

仰向けの無防備な顔を見下ろす。スレインは瞼を閉じて、大きく息をしていた。

伊奈帆は瞼を閉じて、さっき見えた瞳を描く。

目。真っ直ぐ向けられた、その碧。

獲物を捕らえる肉食獣のような。きつと、カタフラクト越しに向けられていたに違いない。その眼差しが好きなんだ。

「ごめん」

「…」

「ごめんって」

「…」

「調子に乗った。反省してる」

「…」

「この通り」

翌朝。スレインは仰向けに寝たまま、謝罪を繰り返す伊奈帆を横目で見た。服を着て、彼の身支度はすっかり完了している。

ベッドのサイドテーブルには、湯気の立つマグカップとビスケット。自分の体は綺麗にされていて、パジャマの上下をちゃんと着ていた。洗濯機のドラム音が微かに聞こえる。何を洗っているのかは、一度思考の外へ追いやる。

「甲斐甲斐しくてマメではあるが、この状況、もう何回目だ？」

数えるのも馬鹿らしくなって、スレインは天上に向かって息を吐いた。疲れて怠くて動けない。

「もう、あんなのはしないからな」

「えっ」

「えっ」

いや、びっくりすることにびっくりする。

「どうして？」

お前、そんな悲痛な声を出すなって。

「一回だけって言っただろ」

「良くなかった？」

「…そういう問題じゃない」

あのパンツとガーターベルトは、洗濯機の中で回っているに違いない。

あれを干すのか…。人の目がほぼないとはいえ、ベランダは頼むからやめてほ

しい。でも室内干しは、今日一日視界に入る…。頭が痛くなってきた。

別のことを考えよう。

「…お前、約束は守れよ」

フルコースの約束。アルコール付き。

「勿論。何食べたい？」

伊奈帆が歯を見せて笑った。面倒なはずなのになんだかかなり嬉しそうなので、あんまり不機嫌を決め込むのも馬鹿らしくなってきた。

「この前は中華で、その前はイタリアン。和食。フレンチ」

ああ、そんな気がする。というか、こいつ、よく覚えてるな。

待てよ。フルコースってことは、結局その時も流されて滅茶苦茶されたってことだよな。

こいつ、全然反省してないじゃないか。

「…お前に任せる」

…面倒くさい。呆れて目を閉じると、髪に指が通る感触があった。

「じゃあ、今日は台湾料理にしようかな」

鼻の上に恥ずかしいリップ音をさせて、買い出しに行ってくる、伊奈帆は立ち上がった。目を開けると、ドアが丁度閉まるところ。

スレインは鼻の頭を搔く。あいつ。

「…台湾料理って、どんなのだ？」

◀ はじまりのはなし

ぽた。ぽた。ぽた。

「いい加減にしろよ」

伊奈帆は浴槽に浸かった手を力任せに掴み上げる。裂けた肉にタオルを巻き付け固く縛る。漂白されて真っ白だった生地は、みるみる朱色に染まった。

「…ようやく、愛想を尽かしたか？」

バスタブに頭を乗せて、浅い呼吸を繰り返しスレインが言った。投げやりな物言いに、頭に血がのぼる。こめかみが音を立てて血を送り出した。

色を変えたタオル地の上から、傷口を握り締める。自分の親指が、人差し指の第一関節まで周った。病的な細い手首。

「どうして、こんなことをする？」

自分自身でも、相当痛々しい声に聞こえた。スレインは哀れみの光を湛えて、伊奈帆の右目を見つめた。

「死ねないから」

「逃げるのか」

スレインが喉を震わせた。掠れた笑い声でも、密閉された場所ではスピーカーを通してように耳に響く。

「逃げたい。忘れない。死にたい。生きることとは死ぬより苦しい」

大きくぎらつく瞳の色に、高すぎる温度の炎を連想する。

「これが罰か？生きる理由か？」

「違う」

なら、と青褪めた唇が歪んだ。

「お前が殺してくれるのか？」

その乾いた唇に噛みついたのは、減らず口に我慢がなかったからだ。唾液

の水音がバスルームの壁に反響して、ざらついた舌が上顎を舐め取った。上唇で歯を押し、口呼吸を再開する。至近距離で白い瞼が持ち上がり、碧の目がきらりと光った。

「舌を噛めばよかったのに」

限界だったのだろう。ゆっくりと再び閉じた瞼と、深く繰り返す呼吸。気を失うように眠りについたスレインの額に触る。低い体温。細い金糸を掻き上げた。

「誤算だよ」

口の中に残る感触が、甘いと認識するなんて。

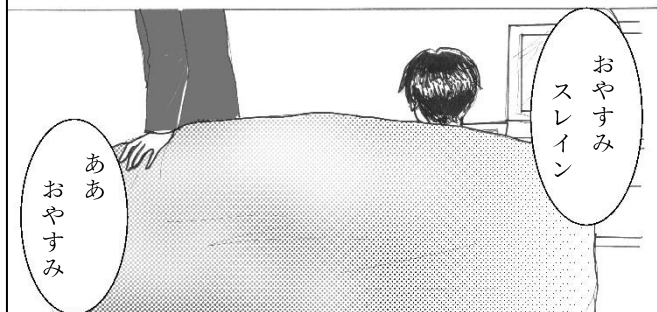
溶けだす赤い絶望と暗い浴室の風景[2018-9-29]

「おはよう」

——湯気の温度と、
出汁の香り。

[Newly written]









「おやすみ」

瞼の裏に

君がいる。

あとがき

この本を手を取っていただきありがとうございます。

Pixiv 再録第三段です。今回は同居をテーマに編集しました。Pixiv 掲載の作品に、Twitter での小話を追加しています。平和かつ甘めの話が多くて、推敲作業はテレテレでした。恥ずかしい二人……。スレインを泣かせてばかりでごめんなさい。性癖です。

ふたり」と (2017-03-01)

真面目に同居を想像したお話だったと思います。本編後妄想で、逃避行系は外に飛び出していくスカッと感と冷たいもの悲しさがたまらないですが、同居は内に籠ってくどくど話をして、じっとりしたやるせなさ感が満載でこれもまた良き……。伊奈帆軍属同居編は家があるのに迷子の子どもみたいだと思っっています。

カンパイ (2017-04-24)

伊奈帆が弱音を吐くことってあるのかな、という所からスタートした酒盛り伊奈スレです。「作(ぎく)」は地元の名酒でして、少し宣伝を…。

「作」の中にもランクがありまして、リーズナブルな「めぐみのとも」からちょっとお高い「みやびのとも」まで、味わいも辛口から甘めといろいろあります。どれもすっきりフルーティーな感じで、アルコール臭いぐえっとした感じは少なく、飲みやすいと思います。お酒好きでしたら一度ぜひ…。伊奈帆の理性はダイヤモンド並ですが、お酒を飲んだ時くらいは泣いたり甘えたりしてもいいんじゃないか、と思う親心です。

GIFT (2017-12-20)

プロポーズするなら、伊奈帆は指輪、スレインは花を相手に贈るだろう、という思い込みがあります。ケーキとチキンを両手に提げて、もこもこマフラーに顔を埋めた伊奈帆ってほのぼののしてて可愛いです。彼らはお父さんがプレゼントとケーキとチキンを買って帰ってきて、温かい部屋で家族そろっ

て楽しく過ごす、っていうクリスマスにどこか憧れてるんじゃないかな、って思いました。

Happy New Year. (2018-01-11)

わいわい賑やかなお正月もいいと思うんです。私が鞆戸大尉をちょいちょい登場させてしまうのは好きだからです。いい大人なのに少年っぽくて、心のどこかに綺麗な場所を持つてる感じがなんかいいです。つつい鞆戸さんの手を借りて伊奈スレにお酒をあげたくなってしまふのです。

Be My Valentine. (2018-02-14)

(脳内の自分) いや、スレインにお菓子なんて作れるのか？

(脳内のもう一人の自分) 一人でお菓子が作れるようになるまでの時が流れたのだ。

(脳内のこ) スレインはあまり食に興味がないんじゃない？

(脳こ) 界塚の(愛情込めた)手料理のおかげで、味覚が育ったのだ。

(こ) おおふ…納得。あのスレインが美味しくご飯を食べられるようになる

とは…。

（脳内の自分たち）愛だな。伊奈スレ最高。

という自分会議がありました。が、基本的にスレインは頭いいので、何でもすぐにできるようになるんじゃないか、と思ってます。でも壊滅的に料理との相性が悪いスレインも大好きです。目玉焼きを爆発させて、頬っぺた煤だらけにしても可愛い。もう何でも可愛い。

3/14 (2018-03-13)

伊奈スレ伊奈っぽくなっちゃってびっくりした覚えがあります。「スレインがプロポーズするなら、花を贈るだろう」というマイ設定があり、「Be My Valentine」[3/14]を合わせて「GIFT」での伊奈帆のプロポーズへの返答になっているお話でもあります。…書いてて恥ずかしいです（照れ）。末永くお幸せに。

初夏とうたた寝とアイスクリーム (2017-07-05)

重くない鬱じゃないハッピーエロにチャレンジしよう！と一念発起した

お話で、今見ると稚拙でお恥ずかしい限りです。同居に慣れてくると気も緩んで、スレインは猫みたいにその辺で寝転がってるイメージです。スレインのお臍っていいなあ、最高の窪みだなあ、と思います。

レース模様とフルコース (2018-11-30)

重くない鬱じゃないハッピーエロ(省略)リベンジです。おしり、えっちなパンツ、ガーターベルト、モーニングサービス、ごめんね料理、調子乗って泣かせる、と好き放題してすごすっきりしました。エロシーン九千文字以上というのは自己最高記録です(ちょっと誇らしげ)。台湾料理は、アルドノアラジオのネタからです。

「おはよう」(書き下ろし)

漫画初チャレンジでどきどきしています。四頁だけでも本当に大変で、漫画で本出す神々は本当にすごいです。こんなところでなんです、いつも素晴らしい作品を生み出していただきありがとうございます。眼福です。

明日。来週。来月。来年。一年後……。そして、いつか。未来を口にできるようになれば、スレインはきっと大丈夫。

◇イメージソング

ふたりごと

「告白」RADWIMPSさん

ふたりぐらし全編

「Million Films」コブクロさん

四方山話にお付き合いいただき、ありがとうございます。次の本でもお会いできますように。

鳴海

ふたりぐらし

発行 Scramble/鳴海

発行日 2019.2.10 / ZEROの方舟10

印刷所 (株)しまや出版様

Mail jjncg720@yahoo.co.jp

Twitter @narumiblue

PixivID narumi07

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。

無断転載、ネットオークションへの出品などのご遠慮ください。